資料

（昭和四十二年十月）

第十二回「合宿教室」（阿蘇）感想文集

社団法人　国民文化研究会

今上天皇御歌（昭和二十年）

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとゞめけりたゞたふれゆく民をおもひて

合宿第五日目に、夜久正雄講師によってなされた講義にこの御歌の説明があり、全参加者に深い感銘を与えた。この文集の随所にその感想が見られるので、ここにその御歌を掲載することにした。

第十二回「合宿教室」（阿蘇）感想文集

目　　次

「はしがき」に代えて……小田村寅二郎…… 3

「合宿教室の日程」の紹介と写真（韓国学生団の紹介）…… 9

参加学生の大学名・人数・総人数（講師・助言者などの紹介）…15

「合宿教室」の総括的な回想……上智大２年・津下有道君……18

解散間ぎわに記した「参加者の走り書きの感想文」……
270名分……21

合宿中に創作された「短歌詠草」……99
（しきしまの道）……講師・助言者を含め……315名分

あとがき…… 121

「はしがき」に代えて

小田村寅二郎

ここに編集した感想文ならびに短歌創作は、今夏、阿蘇で挙行した第十二回〝合宿教室〟でのものである。全国から集った大学生を主軸とする参加者全員が、四泊五日間寝食を共にし、誠心誠意、「学問—人生—祖国」について、その真なるものとはいかなるものか、を求め続けた。その最後の日、八月十一日の閉会の直前に、率直な感想を、走り書きのままに記してくれたものが、これである。

この感想文は、緊張した日々の続いた直後に書いてもらったものだけに、中には感激のほとばしるままにややオーバーとも見える表現も見うけられるし、合宿についての評価にしても過分なものがないわけではない。また一部には、平素の学園とは趣の異なった講義が多かったためか、また講義のあとでの「班別討論」—講義内容を知的に討論するだけでなく、班員相互の人生体験に照らして咀嚼しようと試みる——この討論に戸惑ったためか、さいごまでこの合宿になじめなかった人たちも何人かおられたようである。

ただ、ここで一言しておきたいことは、この文集はあくまでも「感想文集」であって「論文集」ではないことである。ということは、まぎれもなく各人それぞれの生活体験に裏打ちされた作品であって、頭脳の知的操作が生んだものではない、ということである。そのため、書かれている内容も、論理的ではなくて唐突なものの方が多いかも知れない。そこにこそ私たちは、書いた人たちの体験を、積極的に汲みとってゆかなければならないのではなかろうか。いいかえれば、論理的でないところに、むしろその人の精神というものが実在している現実的証拠があるわけであって、こうした精神の実在というものが、人間にはあるのだ、と確信する者にとって、——人

は、とやかくいってみても結局は、精神の実在を確信するのだと思うのだが――この文集は、心を傾けて四泊五日の生活を送った者の、まぎれもない「記念碑」であり、また「人生の一里塚」であると思う。

もっと極端ないい方をすれば、ここに書かれたものの中に、かりに、多少とも感激に走りすぎた面が見うけられたからといって、それがどうということはない。いなむしろ、知的偏重の物の見方からすれば、一見とりみだしたように見えるその体験の成果を、自分の人生の中で、いつまでも大切に「持ち続けようとする」姿勢と熱意、そこにかえって「人生の貴重な価値」を見出すことさえ、きわめて大切な場合もあると思う。その意味で、この「記念碑」は、書いた各人にとってはもとよりのこと、読む人々にとっても、学問的に、人生的に、決して軽く評価されるべきものではなかろうと思う。

しかし、全体的にみてこの感想文に見うけられることは、「学問と人生と祖国」という学生自身にとって一番大切な問題について、「問題意識」がまずはっきり浮び上ってきたことである。そして、さらにその「学問と人生と祖国」という課題に真剣に取り組むためには、今日の学園に見られるような知的追求、知的勉学だけでは、とてもだめだ、情意、情操を養うこともまた、あわせて学問の大切な課題に登場させなくてはならない、という根本的自覚が、人々の心の中に拡がっていったことである。それゆえ、「人間同士のつきあい」についても、「書物を読む読み方、選び方」についても、「社会とか祖国」について考える場合の大切なポイントについても、「文化とか伝統」とかを論じたり取り扱ったりする時の心構えなどについても、改めて再検討しようとする気配が生まれてきたようである。それは合宿教室の主催者たちにとっても、大変うれしい、また有難いことであった。

四年前の合宿でのことであったが、小林秀雄先生が、御講義のあとで学生からの質問に答えられて、次のように言われたことがあった。（「新しい学風を興すために――第三集」二一三―四頁）

「現代の教育に一番欠けているというのは感情の教育だと思っています。情操の教育が大変欠けているのではないでしょうか。学校の先生方が美術などを見につれて行ったりしますが、非常に形式的な事になっている。美術に関する知的教育をやっているので、美しいということを感じる力が、これで育成されるかどうかは、実に考えられていないと思っています。情操教育をやっている積りで、実際は少しもそうではない。美を感受する芽を育てたら非常に大きな結果が出るのにきまっているのだけれども、それを考えない。美に関する様々な知識を与えようとばかりしている。有害無益な事です。」

と。「美しいということを感じる力」、それを育てるのが、美術の教育であって、美術に関する知識を教えているだけでは情操教育にならない、といわれる。情操教育のつもりでしていることが、実は情操教育になっていない、という御指摘でもあった。まことに印象深く私の脳裏に残ったお話である。

現代という世代では、問題の所在についての指摘は、理論的には、かなり広範囲にわたって、ほぼ余すところなく提示されてくる。しかし、そのことを「身につけたり」「心の中に養う」ことの実践面になると、随分、見当はずれのことをして平気でいることが多いのではなかろうか。問題点の提起とその実践の両面が平行すればいいのだ、という程度の反省では、もう間に合わなくなってきている。「実践」というそのことに取り組む「姿勢」「心構え」そのものの再検討から、出発し直さねばならなくなっているのではなかろうか。そうした点についても、この文集が、なにかの参考になるとすれば、編者の喜び、それに勝ることはないと思う。また、そうあってこそ、同学同修、いいかえれば、教える者もまた、教えられている者から学びつつ励む、という学道の本来の姿——この合宿教室の目指すもの——に近づくことができるかも知れない。編者グループは、ここに書かれた三百編近い短い文章と、全参加者が創作した短歌から、いかに多くのことを学ばせていただいたことか。参加者の生活体験のきびしさは、合宿指導に当った人々の心を、改めて強く目覚めさせてくれるのである。

第十二回「合宿教室の日程」の紹介

とき　昭和四十二年八月七日（月）～八月十一日（金）四泊五日間

ところ　熊本県阿蘇町黒川字松の木―「阿蘇の司」

第一日　（八月七日・月曜日）

開会式　（午後三時）

一、国歌斉唱

二、黙　禱（われらの祖国を守るために、尊いいのちを捧げられた祖先のみ霊に対して黙禱を捧げた）

三、あいさつ

大学教官有志協議会を代表して　長崎大学　植木九州男氏

国民文化研究会を代表して　鹿児島大学　川井修治氏

参加学生を代表して　熊本大学 教育 三年　永井幸男君

四、幹部学生を代表して決意を述ぶ　富山大学 工四年　岸本弘君

五、韓国から特別招待によって参加された学生団の紹介

写真右より

（合宿参加学生・来日韓国学生団連絡係・亜細亜大学三年）　金泳国君

団員・慶北大学校師範大学　教育科四年　金慶麟君

団員・高麗大学校法科大学　法学部三年　李亨模君

団員・ソウル大学校文理大学　外交学科三年　張在竜君

団員・韓国外国語大学　日本語科三年　金泰定君

団長・韓国文教部奨学官　李聖祚氏

（紹介中の）小田村本会理事長

班長の所懐表明と自己紹介（各班に別れて行なった）

夜

○講　義　「わが民族に課せられた輝かしい宿題」（二時間）

国民文化研究会理事長　小田村寅二郎氏

班別討論　（一時間）

検討会　（男子学生班、十八班を四つのグループに分けて―運営委員会を中心とし、助言者を加えて―行なった。第二日、第三日も同時刻に行ない、第三日目はグループ編成でなく、女子班も交えて合同で行なった）（午後十時半～十一時半）（一時間）

運営委員会　（十一時半～十二時半、運営委員・助言者を加えて、毎日同時刻より深更まで続けられた）

第二日（八月八日・火曜日）

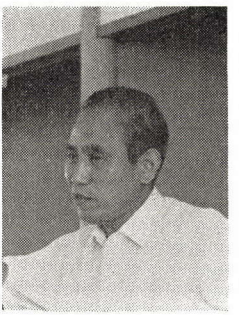
午前

国旗掲揚、体操（午前七時半）（第三日以降も同じ）

○講　話　「指導者の教養」（三十分）

亜細亜大学学長　太田耕造氏

○講　義　「世界の転機と日本」（二時間）



世界経済調査会理事長　木内信胤氏

班別研修　（木内先生の講義を中心に班ごとに問題点を掘りさげ、質問書を提出した）（一時間）

午後

質疑応答　（木内先生は質問書にもとづいて回答された）（一時間）

班別討論　（一時間）

○講　義　「古典にみる日本世界像の系譜」（一時間三十分）

岡山県立笠岡商業高校教諭　名越二荒之助氏

夜

○講　義　「和歌創作の手びき」（一時間）

福岡県立若松高校教諭　山田輝彦氏

班別討論　（二時間）

第三日　（八月九日・水曜日）

午前

○講　義　「日本民族の中核性格について」（二時間）

作家　林房雄氏

休　憩　（十五分）

質疑応答　（一時間）

記念写真撮影　（木内・林・山本三講師を囲み、全員の写真を撮った―十八頁参照）

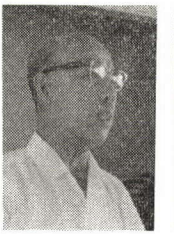
午後

あいさつ（大学教官有志協議会）（一時間）

亜細亜大学教授　梶村昇氏

滋賀大学助教授　吉田靖彦氏

明星大学教授　奥田克巳氏



長崎大学講師　峰辰次氏

鹿児島大学教授　平岡禎吉氏

阿蘇・中岳登山　（午後二時半出発、午後五時半帰着）

第一回和歌創作　（創作総数九百九十余首）

夜

○パネルディスカッション　（午後七時～九時）

「現代日本の最も重要な課題は何か」

木内信胤氏

林房雄氏

山本勝市氏

を中心にして

諸講師が各々重要と考えておられる問題点を述べられ、各々の問題について討論が行われた。

班別討論　（一時間）

第四日　（八月十日・木曜日）

午前

○講　義　「ヴェトナム問題について」（二時間）

経済学博士　山本勝市氏

質疑応答（三十分）

班別討論（一時間）

午後

○講　義　「聖徳太子の十七条憲法について」（一時間三十分）

福岡県立修猷館高校教諭　小柳陽太郎氏

班別輪読　（小柳先生の講義を導入として『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』を各班毎に輪読）（一時間）

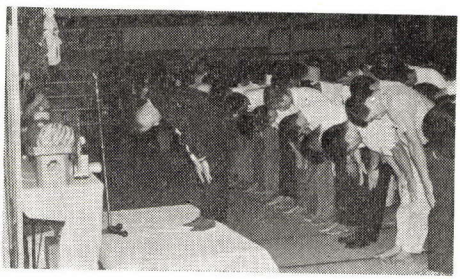
第一回和歌創作講評（一時間）　若松高校教諭　山田輝彦氏

地区別・大学別懇談会（三十分）

夜

和歌相互批評（班別に行なった）（一時間三十分）

慰霊祭（一時間）―午後八時三十分～九時三十分―



祖国を守るために尊い生命を捧げられた、すべてのみおやのみたまを祭る慰霊祭は大講堂に特設された式場で、簡素ななかにも厳粛にとり行なわれた。

最後の夜の集い―班別茶話会―（一時間）四泊五日の合宿生活を顧み、明日の別れを惜みつつ、各人それぞれの思いを開陳して、なごやかに語りあった。

第五日

（八日十一日・金曜日）

午前

○講　義　「今上天皇の御歌について」（一時間）

亜細亜大学教授　夜　久　正　雄　氏

全体意見発表（一時間三十分）

全参加者の集うなかで、自由に登壇がなされ、時間いっぱい、合宿の感想、今後の決意などが表明された。

「合宿を終わるにあたり所感を述ぶ」（四十分）　小田村寅二郎氏

感想文執筆（三十分）（本感想文集はこれを集録したものである）

閉会式（十二時三十分）

国歌斉唱

あいさつ

（大学教官有志協議会）明星大学教授　奥田克巳氏

（国民文化研究会）副理事長・鹿児島大学助教授　川井修治氏

（学生）東京大学　文Ⅰ一年　石村善悟君

（大韓民国学生団代表）韓国文教部奨学官　李聖祚氏

参加者（学生―**五十一大学**―）鹿児島大　鹿児島経済大　鹿児島工業短大　熊本大　熊本商大　長崎大　大分大　九大　福岡大　西南学院大　福岡教育大　修猷館高　下関市立大　山口大　広島商大　四国学院大　神戸大　京大　関西大　皇学館大　富山大　富山県立大谷技術短大　金沢大　東大　東工大　防衛大　玉川大　早大　法大　中大　日大　亜細亜大　横浜国大　学習院大　東女大　明大　慶大　一橋大　二松学舎大　明星大　国士館大　拓大　上智大　国学院大　順天堂大　山脇短大　実践女子大　日経短大　立正大　共立女子短大　東北大

計　二百十一名（内　女子二十二名）

（社会人班）会社員　福岡県高校教諭　熊本県小・中・高教諭　信用組合　経営者協会　日本遺族会　新日本協

議会　大学教官　大学職員　計　五十九名（内女子四名）
（韓国からの招待参加）団長　以下　五名
―ほかに―（講師）十名、（助言者）四十一名、（事務局）八名
参加者総合計　三百三十四名

講　師

世界経済調査会理事長	木内信胤	滋賀大学助教授
作家	林房雄	亜細亜大学教授
経済学博士	山本勝市	共同通信社・論説委員
亜細亜大学学長	太田耕造	元八代市教育長（現助役）
本会理事長・亜細亜大学講師	小田村寅二郎	熊本市役所・経済部長
亜細亜大学教授・教養部長	夜久正雄	安田信託銀行・渋谷支店長
鹿児島大学助教授	川井修治	三菱重工㈱・長崎造船営業課長
福岡・修猷館高校教諭	小柳陽太郎	熊本県・林業研究指導所・指導部長
福岡・若松高校教諭	山田輝彦	亜細亜大学・学生部主事
岡山・笠岡商業高校教諭	名越二荒之助	㈱アジアビジョン・企画部長

助　言　者

長崎大学講師	峰辰次	電源開発㈱・伊予電力所事務課長
鹿児島大学教授	平岡禎吉	下関・宝辺商店経営
明星大学教授	奥田克巳	山陽電気軌道㈱・宇部営業所長
長崎大学学生部	植木九州男	計理士・税理士
		大分県・国見町教育委員会・教育主事

吉田靖彦
梶村昇
毛利潮
島田好衛
加藤敏治
徳永正巳
松吉基順
小県一也
瀬上安正
関正臣
加部隆三
長内俊平
宝辺正久
加藤善之
小泉明
三重野悌次郎

福岡県立・宇美商業高校教諭　小林国男
岸和田市立・大芝小学校教諭　岡村義一
玉造・こんや旅館主　青砥宏一
㈱千代田コンサルタント・総務課長　上村和男
山口銀行・長崎支店　田口譲二
岡山県立・岡山操山高校教諭　三宅将之
川鉄鋼板㈱・千葉工場労働課　福島宏之
神奈川県立・横浜平沼高校教諭　福田忠之
新技術開発事業団・管理部業務課　野間口行正
筑紫女学園・高校教諭　行武靖枝
日商㈱東京支社・海外統括課　沢部寿孫
皇宮警察本部・皇宮護衛官　亀井孝之
三愛石油㈱・東京営業所　柴田悌輔
熊本行政監察局・事務官　黒木林太郎
旭興業㈱・寒川営業所・経理課　中川裕司
長崎県立・長崎北高校教諭　本城良子
三井石油化学工業㈱・総務部文書課　西元寺紘毅
長崎大学医学部専門課程　田村潔
長崎市中学校教諭　田川美代子
都城市立・庄内中学校教諭　坂東嘉美
兵庫県立・武庫高校教諭　寺川真知夫

合宿運営委員（助言者と兼務）

上村和男・三宅将之・福島宏之・福田忠之・野間口行正・沢部寿孫・亀井孝之・柴田悌輔・西元寺紘毅（いずれも前出）

指揮班ほか

指揮班　早稲田大学・政経学部四年　今林賢郁
写真班　九州大学・法学部四年　島津正数
録音班　最高裁判所・秘書課　西川伍朔

合宿事務局

国民文化研究会職員　石井恭子
国民文化研究会職員　山内健生
筑紫女学園・高校教諭　桑野勝子
中村学園・女子高校教諭　行正維紀子
熊本女子大学三年　加藤恭子
自由学園女子高等科三年　夜久和子
筑紫女学園高校二年　小柳怜子

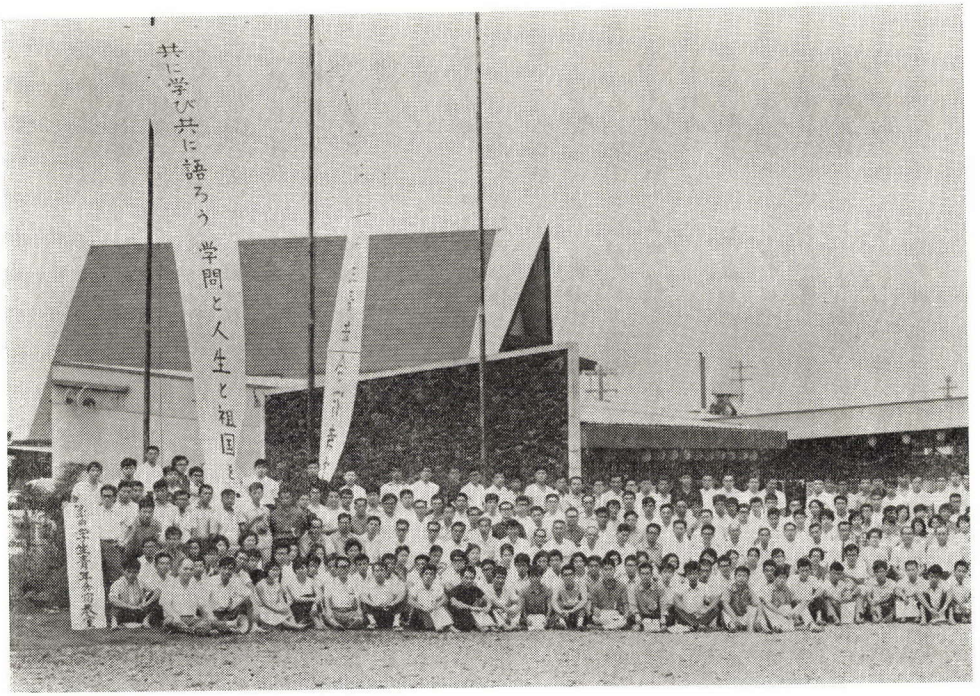
〝合宿教室〟の総括的な回想

第八班班長　上智大法二　津　下　有　道

合宿教室に参加して一カ月余りがたった。私達の周囲には合宿参加前と変りのない様々の環境が私たちを幾重にも取り囲んでいるが、それらは日々私たちに如何に生きて行くかというあまりにも切実な問題を投げかけてくる。大学の講義や人々の口からは真剣にいかに生きるかという自分の切実な想いに対する答は返って来ない。寧ろ期待を裏切られ欺かれた失望の念が益々私の心を重くする。

学問は何よりも理論の組立ての正確さが大切だという事が学者の権威を以て説かれ、学問の対象の如何を問わず「科学性」、「合理性」という言葉がもてはやされ、「平和」、「民主々義」、「憲法」などが事物の善悪を判断する基準とされている。日本という国に生れ、育っていながら祖国に目を掩い、如何に楽に生きるかという事が青年学生をはじめ、社会の主要な関心事になっている。

しかし、こうした状態がいつまでも続いて良いわけはない。私たちは合宿に於いて、人の心に正面から取り組む事を



教えられた。和歌の創作、相互批評、古典の輪読なども、結局は、人が何を感じて何を言おうとしたのかを、相手や古典の言葉を通して、自分の心にくみ取ろうとすることであった。しかし古典を通して昔の人の心を偲ぶということは、容易な事ではなかった。だが古人の遺した和歌や文献から、私たちはありのままの人間性の流露を心に受け止め、古人を身近に感じる事が出来た。私たちの祖先がありのままの人生の事実に随いながら、最後にそれを心の中で統一する境地に立ち得た事を、私たちは古典の講義によって知った、また、私たちは人の言葉に接するとき、虚心に相手の心にふれようと努力するときに、初めてその人の心とわが心がふれ合って、共感し合うということができる事を知った。祖国のために出陣するにあたって詠まれた人々の和歌は、私たちの心を強く揺り動かさずにはいなかった。

終戦の時に詠まれた陛下の御歌に接した時、私は涙がこみ上げてくるのを押える事が出来なかった。こんなに美しい真心の世界がまたとあるだろうか。この厳粛な事実を抜きにしてどうして過去を、一切の物事を語る事が出来ようか。

翻って現代日本を見ると、それは何と情なくも悲しい姿であろう。人の心は萎縮して仕舞い、方々に党派が出来て利害にせめぎ合っている。何故お互いが真心を持って人に接しようとしないのか。何故謙虚に歴史に接しようとしないのか。あまりにもわからない事が多く、疑惑は尽きることがない。

だがわれわれは、混迷した祖国のこの現状をいつまでも傍観する事は出来ない。

此の日本に生れ現在生きている限り、あらゆる虚偽を排して生き生きとした祖国への情愛を甦らせようという意志を確立し、祖国の文化と伝統の中に生くるこの身とこの心を寄せて、改めて現代日本を見つめねばならない。真剣に祖国の文化に学ぼう。潑剌とした情意に欠け、人の心を理解する努力のないところには、制度、機構、学問がたとえどんなに完璧なものとして存在したとしても、それだけでは人の心をつなぎとめていくことにはならないであろう。

私たちが、この合宿で古典に接し、或は友と真剣に語り合い、そこに得られた人の心との共感の、貴重な体験は、知的理解とは本質的に異なった体験であった。地道ではあるが、ゆるぎないものとして自分の心のすみずみにまで浸透させて行くように努力を続けたいと思う。私達は真心を尽して真剣に生きて来られた人々に対しては心から敬い、頭を下げずにはいられない。

合宿の最後の夜に行なわれた慰霊祭は、参加者の謙虚な心情と、肇国の昔から今日に至るまで国のために、尊い心とさらに生命まで捧げられた多くの祖先の御魂とが、一つになって荘厳な世界を創り上げる儀式であった。私達は祖国と共に生き、祖国の為に誠を尽して、尊い命を捧げられた祖先の御霊を偲びまつり、祖先の魂を受け継いで行くべく決意を新たにした。

われわれの祖国がこうした数知れぬ祖先のはかり知れない献身の努力によって今日に受け継がれている事を忘れてはなるまい。私達も此の国に生を禀けた一人として数限りない祖先が国に寄せた思いを正しく受け継ぎ、祖国日本を無限に切り開いてゆきたい。大らかな心と強固な意志を持ちつづけながら。

（班別討論風景）
——第1班——

走り書きの感想文

第一班

まじめに正確に生きよう

私はこの合宿教室で得た数々の事を、日常生活の糧として一日一日を真剣に、まじめに正確に生きようと思う心で一杯です。

私は大学で、この合宿教室に類似した研究会に入って勉強していますが、その原動力にもなると思うと早く帰って、友や会員にこの合宿で得たことを訴えたい気持ちです。これからも、もっと勉強して真実を知り、自分の進む道を切実に考えていこうと思いました。

（鹿児島経済大学　経　三年　東条　久）

友の言葉にうれしさを感じた

理論的な討論は面白いし簡単である。しかし、この合宿で体験した一番大切なまごころをもって友に接すること、相手の心に触れること、それはなんと難しいことでしょうか。いきおいそうした真剣な話し合いになると、口がふさがりがちになる。自分はどっかが駄目になっているのではないか、そんな気持ちさえ感ずることがあった。しかし、班別討論の中で、自分のことが話題になって、いろいろと話されたとき、ある友の言葉に何ともいいようのないうれしさが、こみあげてくるのを感じた。今までの口のふさがりがちな気持ちの中で、いまこんな気持ちになれたのかと思うと何だかおかしさえ感じた。その後、班の空気はなごみ、自分もうちとけた。今後、友とのつき合いということをまじめに考えていきたいと思う。

（鹿児島大学　法文　三年　土岐直彦）

本当の喜びを感じた

四泊五日、本当に短い期間であった。しかしこの合宿で得たものは、僕のこれまでの人生にはなかったほど多くの体験だった。

本当の喜びというものは、映画を見た後の楽しい気持ちのようなものではない。また遊びの中で感じるようなものでもない。真剣に充実した毎日を送って、友と人生あるいは国の

ことを語り合う中にはじめて真の喜びは求められるのだということを感じさせられた。（中央大学　商　一年　佐藤正史）

自分は日本人である

僕はただ漠然と参加したので、初日の講義から皆が真剣に聞き、また誠意をもってわかりすく話される先生方を見て、申し訳ない気持になった。

合宿全体を通じて最も痛切に感じたのは、自分は日本人であるということでした。今までは、ただそのことさえ考えてみたこともなかったし、感じたこともなかった。このような気持ちでは、日本の役に立ちたいと思って戦死された人々に対し申し訳ないという気持でいっぱいである。いまからでも日本のために、自分の出来ることで奉仕していきたい。

（長崎大学　教　二年　園田敏之）

現実的できびしい講義

ひさしぶりの団体生活で、いろいろと学ぶべき点がありました。心から感謝いたします。

諸先生の講義を通じて、先生方ができるだけ体験や事実に即して判断なさっていることを感じましたが、実に現実的できびしい見方だと思いました。

愛国心――自分たちの国に関心をもち、国をよりよくしていこうとすることは国民の義務だと思いました。

真心は、人と人の心を通わせるもので非常に大切だと感じましたし、その心を和歌によむことはすばらしいことだと思いました。

（九州大学　法　二年　永尾貴一）

「まごころ」がいかに大切か

小田村先生の「偉いとかお世話になったとかを感じた時、それは動作にあらわれ必ず相手に通じる」というお言葉を聞いて、「まごころ」がいかに大切か教えられました。でも実際に行なうということはなかなか難しいと思います。

（九州大学　医　一年　小川　清）

自分の発言にみんなが耳を傾けてくれた

一日目と二日目は、ややつかれ気味で講義中うとうとしてた。ところが、班長がここは聞くべきだと判断して、起こしてくれたときは怒りたくなった。けれど今は頭をさげてあやまりたい心でいっぱいです。また、自分の発言にみんなが耳を傾むけてくれたことをありがたく思っています。

たとえ、来年の合宿で会えなくても、手紙でだけはこれか

らの人生をよくするために文通したいと思います。

（亜細亞大学　経　二年　大塚達朗）

固定観念で歴史を見ることを排したい

固定観念で歴史を見るような態度は排したい。山田先生の御講義で、悲しい思いをいだきつつ戦地におもむいた先人の歌をよみ、まだ自分のことしか考えられぬ自分を恥ずかしく思った。自分にとってこのような先人の思いを知ろうと努力することが、今後の課題である。

（東京工業大学　理工　三年　内田厳彦）

真に得がたい邂逅

すべては、小田村先生の最後の御講義にあったように思われます。真に得がたい邂逅（かいこう）でした。これからはここで得たものをどれほど消化し、今後に生かしてゆくことができるかです。

（玉川大学　文　一年　長谷川　純一）

思考方法を確立したい

今まで持っていた僕の物の見方、考え方と、この合宿で知ったものとをよく検討し、時間をかけて今後の思考方法を確立したい。また和歌創作、鑑賞のたのしみと思考方法に大きな示唆を与えて下さってたことを感謝します。

（明治大学　商　二年　向田正志）

第二班

すべての問題は人間の心情にある

今日までの日本の歴史上の問題も、世界の問題も、その核心は人間の心情の問題であったと思います。小田村先生は、その問題解決を天皇の御製等にふれ、天皇の民を思うゆかしい心情を触発させていくことに求められているようです。私はまだ、それらのことをしておりませんので何も申し上げられませんが、その努力をしてみて、また先生にお伺い致したく思います。

この合宿に参加して、今痛切に感じますのは、今まで以上に自己の歩む姿勢に対して厳しくなければならない。そのことのみが今日の社会を正しい方向に進めていくことだということです。

（九州大学　法　三年　淵本忠信）

真剣に生きる生活態度を

合宿の冒頭から小田村先生の気魄のこもった講義に緊張を余儀なくされた。先生の気魄がびしびしと突きささってくるような感じで引きつけられてしまった。しかし、班別討論になると提起された問題が大きくなりすぎて、自分の意見をいうことがかるがるしくできなくなる自分を見出した。

しかし、諸先生方の講義で、それぞれ提起されたことは、どれも皆重要であり、自分が毎日々々の生活にそういう問題を常に考え、真剣に生きるという厳しい生活態度を今後も絶対もたなければならぬと強く感じました。

（亜細亜大学　経　四年　長谷川賢司）

心残りは「天皇」の問題

この合宿が私にとって有意義であったことは、日頃の混迷した種々雑多な思想や考え方を統一して行くうえで、一つの指針が与えられたことです。また、とくに感銘を受けたのは、小田村理事長が真剣に日本のことを考え、青年、学生に期待され、お互いの間に信頼心を培っていこうとされている真摯な生活態度でした。

しかし、たった一つの心残りは「天皇」という問題です。私には、日本国の〝象徴〟以上のものであるとはどうしても思えません。同じ人間である天皇を何故そんなにあがめなければならないのか疑問でなりません。しかし、今そう思うのであって、今後の勉強によって、夜久先生が何を言おうとされたのかが分る日がくるかもしれません。

（慶応大学　経　三年　相沢通雄）

自分の考えをもう一度見直したい

私は、昔の偉い人は何を考え、どう生きたのかを学びたかった。それを知って自分の生き方の参考にしたかった。他の人々が、われわれはどう生きるのかということを話すのに興味がわかなかった。こんな話からは何も学べないのではないかと思った。しかし、自分の了見の狭さがわかった。いやわかったような気がする。多くの若人が、これだけ一生懸命になって話していると思うと、自分の考えをもう一度見直さなければならないと思った。

それに自分はただ愛国心を言葉だけで片づけて満足していたが、それを行動に移す時に、一歩誤れば、良いと思ってすることが、害をまねくことがあるのだということを強く感じ、国を愛することがいかにむずかしいかを知った。

（東京大学　文Ⅱ　一年　中村隆象）

自分自身で研究し確かめてゆきたい

この合宿での講義は、自分には割合素直に理解できた。もちろんまだ反発する所はある。しかし、先生方が学問的に話して下さって、学生である私たちのことを思って下さる心が分ったような気がした。私はこの合宿に多くを期待していた。しかし今考えると、こんなに短い期間に多くを期待するのが無理であったと思った。だが先生方が訴えられたところは少しは学び得たと思う。今後はやはり自分自身で研究し確かめていかねばならないと思う。

（岡山大学　法文　三年　斎藤利明）

「考える」ことの大切さ

私は今まで、実践の方にばかり走りたがる傾向があり、「考える」ということがおろそかになっていたのではないかと思います。合宿にきて、「考える」ということの大切さを教えられました。何事も「思考」と「実践」がいっしょになったときうまくゆくものです。私も今からは、この二つの輪がいっしょにならんで走るように努力したい。また、天皇制、憲法問題等、各種の問題がありますが、自分として、日本人としてどう取り組んだら良いか勉強していきたいと思います。

（長崎大学　水産　二年　楠元佐知生）

やさしさと強さを持つ日本人の心

阿蘇の雄大なふところに抱かれ、多くの人と語り合えたことは、何物にも代えがたい貴重な体験であった。そしてその中で、自分の小ささを感じるとともに、一番大事なものは人の心であるという感をますます強くした。

一輪の花の美しさを感じ、人の情に涙を流す、そして自分のめざすもののためには命をも捨て得る、万葉以来続いている、やさしさと強さを合せ持つ日本人の心。それはすべての人の胸の中にあるものと思う。その心を信じ、真に自分のものとしていきたいと思う。

（長崎大学　教　二年　熊谷幸雄）

〝まず自らを正せ〟のお言葉を胸に

連日連夜、あますところなく語り合う友達の激しい気迫に触れて、自分の生活信条を心の根底からゆさぶられました。今までは、日々の生活に追われ、わずかな悩みはもつことはあったが、それも己れ一個人に帰するものばかりでした。ところが、今ここに集う友達が、自分の人生を深く考え、悩

み、そして前進する話を聴き、自分の甘さを恥ずかしく思うばかりでした。

「自行外化」〝まず自らを正せ〟と仰せられた聖徳太子の御言葉をしっかりと胸に抱き、真剣に生きていこうと思います。

（金沢大学　工　一年　羽喰守秀）

自分を考え直す転機になった

この合宿はいろんな意味で非常に重要な合宿であった。まず学生生活の締めくくりをする事、今後社会人としてどういう態度で生きてゆくかを決めたいと思った。班運営を通じて改めて自分の力不足を感じた事は、とかく自信過剰になりがちな自分自身をもう一度考えて見る大きな転機になった。

長かった学生生活も残り少なくなった。しかし、やるべき事は山積している。自分自身をかけて立派にやりとげようと決意している。

（京都大学　法　四年　福島義治）

自分の心の汚なさを痛感した

私がこの合宿に参加したときにはいい加減な気持ちがあった。それを今、後悔の念に耐えない気持ちで思いかえしている。しかし今合宿を終えようとして、何かやはりすべてを受け入れ難い気もする。それがどこに起因しているかはっきりわからないが、文化と思想、そして行動との関連になにかしら割り切れないものを感じる。第一日目の小田村先生の講義のあとの班別討論で、私は、〝先生の理論の展開に違ってるところがある〟と言った。私たちが日本人である、ということと人間の一人であるということの関連についての講義に賛成できなかった。もちろん浅学な自分に、それを十分に説明する能力はなかったが、そういう気がしてならなかった。しかし、最終日の小田村先生のお話を聞いて、そのことは、〝ああ、やっぱり自分の講義の聞き方が違っていたのか〟と自己の浅学さを再確認せざるを得なかった。それにしても、ほんとうに感銘したのは、〝まこと、すなおさ〟という事を強調され、実行されている事であった。そこに自分の心の汚なさという事を強く感ぜずにはおれなかった。

（防衛大学校　三年　大矢勝三）

第三班

本当の日本の心を取り戻した

次第に忘れられようとしている本当の日本の心を取り戻し、祖国日本の永遠に栄えんことを願われる先生方の痛烈なるお言葉に接する時、私は自分が現在思いわずらっていることが、如何に小さいかということを強く感じずにはいられま

せんでした。そして「この先生方の期待に応えうる、強く、雄々しい人間にならねば」という一種の使命感すら感じたのです。

この合宿は、今日で終わりです。しかし、私達の学問はこの合宿で得たことを基として今から始まり、これから先、ずっと続いていくものであると思います。

（東京大学　文Ⅱ　一年　石村善悟）

一生の一大転機となった

何の誇張もなく、この合宿は、僕の一生の一大転機となった。何気ない気持ちで、友の誘いを拒んでいたら、僕は無気力な生活を続けていたに違いない。参加して良かった。語らいの中に自分を再発見したことはもちろん、自分の心の中に揺るぎない一つの信念を築くことができたのだ。せいいっぱい生きてゆきたい。

（明治大学　文　一年　青木良夫）

自分を真剣に見つめる姿勢ができた

初めての参加でもあり、多少まごついた時もあったが、とにかく、自分というものを真剣に見つめる姿勢ができたような気がする。土台の石は小さくまだもろいかもしれないが、私の土台の石はだんだん大きく硬く成長するものであると確信する。先輩から注意を受けたことも、とても有難く、私は見守られているということを身にひしひしと感じた。

韓国学生の皆様と話し合えたことも、とても嬉しく、また慣れぬ手で胸の奥底を探り、短歌を作ったことは、苦しんだだけに感じるものがあった。

（玉川大学　文　一年　姫野道夫）

日本の心に通ずる感動

最後の御講義で、夜久先生が今上天皇の御製をお読みになろうとなさって、しばらく絶句されたとき、私の胸中に湧き起こった言い表わしようのない感動は、日本の心というものに通ずるものではないかと思っております。もっと自分を厳しく見つめて生きていくつもりです。

（九州大学　法　一年　小川幸一郎）

人の心を理解することの大切さ

今回の合宿では、班長をやらされたということもあって、人の心を理解するということがいかにむづかしく、また反面いかに大切なものであるか思い知らされました。人の心を理解もせずに行なう言動は何かしら空虚な感じがします。ただ、今でも残念に思うのは、班長であったため夜の検討会に

時間をとられ、私自身、皆の話を満足に聞くことができず、また自分も話をする機会が少なく、惜しい気がしています。

（中央大学　法　二年　飯田勝一）

毎日毎日を堅実に送りたい

学問に対する姿勢は、常に自分を緊張した状態に置かねばならないと考えていましたが、その反面、毎日毎日を堅実に歩む努力が足らなかったように思います。

今迄の私は、死にものぐるいの生活を送れないことに不満がありましたが、これからは「学問に王道はない」ということを肝に銘じて、毎日毎日を着実な発展のステップにするため、堅実に送りたいと思っています。

（鹿児島大学　法文　一年　東中野　修）

ありのままに自分をぶっつけていけた

どんなことを言おうと、どんな言い方をしようと、先生方並びに班員の方や、合宿に参加している多くの方が、真剣に受けとめて考え、話してくれたことがこの合宿では何よりも良かったと思う。こんな自分でも、ありのままにぶっつけていけたということがうれしかった。

（鹿児島経済大学　経　二年　山本圭三）

合宿で得たものを活かしていきたい

人生や祖国について真剣に考えなかったせいか、班別討論のさいに発言できず〝共に学び共に語ろう〟というこの合宿教室の趣旨に合致せず、ただ傍観者的態度であったことを反省し、今後の学生生活に、この合宿で得たものを活かしていきたいと思ってます。

（長崎大学　経　二年　坂東仁朗）

講義の底に流れるお気持ちをくもう

問この合宿で非常なウェイトをもって話された祖国日本の現状、ベトナム問題、国防と安保の問題、教育の問題、経済の題等々について、今までそれほど考えたことはなかった。それで先生方の御講義内容については聞くことすべて耳新しいことだらけで、ほとんどわからなかった。でも本当に大切なのは、先生方が日本の現状にいかに苦慮しておられるかということ、つまり講義の底に流れている先生方のお気持ちをくみとることではないかと思うのである。

先生方の御講義が、内容を正確に理解できなくとも、僕たちの心を動かし、強く訴えるものがあるのは、実に先生方の現実体験によって御講義がなされているからだと、身にしみて悟ることができました。

（岡山大学　医　一年　田中輝和）

真剣な態度で学問をやりたい

真剣な態度で学問をやりたいという力がわいてきたように思います。また、この合宿中に教えていただいた数々のことを、これからじっくり考えて行かねばならぬと念じています。

（神戸大学　教　二年　白坂隆重）

〃国のいのち〃を自然に感得した

先生方の御講義の内容が世間一般の見解と違うので面くらった。どうしてこんなに正反対の意見があって、一方が他方を説得出来ないかと思う。だがよく考えてみればこれは本当にむずかしいことかも知れない。

例えば国防について、世界の現実をみると軍備は絶対に必要という考えと、戦争は無いからその必要なしという考えがある。前者がどう現実を力説しても後者を説得する事はむずかしい。又逆も同様であり、こういう点からまだ少し迷う時もあるが仕方がない。自分で感じる方を取るしかないと思う。しかしパネルデスカッションの時、林房雄先生の歌でさらりといわれた〃国のいのち〃という言葉を、今までになく自然に感じることができた。

（九州大学　工　二年　阿南公幸）

御製を拝誦して天皇の御心を知りたい

僕が今度の合宿で感じたことは、天皇と御製のことでした。夜久先生の御講義をお聞きして、また小田村先生の言われる「天皇を語るならば御製を読んで、天皇の本当の御心を知らねば絶対に語る資格というよりも根本的姿勢を欠く」と言うことがやっと分ったように思いました。そして、慰霊祭のとき長内先生が拝誦された御製をきき、全体意見発表の折りに一橋大の北川君が、深く感動したといわれた言葉に、僕も共感をもちました。僕はこれから西洋史の専攻に進もうと思っていますが、御製によって、天皇の御心を知るとともに、出来得れば西洋の皇帝、王との比較研究をしてみたいと思います。

（早稲田大学　文　二年　広瀬清治）

班長として精一杯ぶっつかった

今回の合宿は班長であるというので、参加する前から非常に不安であった。体験的にみても人格的にみても、はたして皆に迷惑をかけずにやれるかどうか、気のめいるような思い

をした。だがある一面には使命感があり、どうしてもやらざるを得ぬ気持ちも働いていたから、ともかく精一杯やることに気を落ちつけてぶっつかった。班別討論がもし紛糾したらどうしようという心配も、今になってみれば杞憂だった感もする。しかし、班の内部が活発性を失い、深く問題を掘り下げることが出来なかったのではないかとも思われる。ややもすると問題が自分の力量以上に及ぼうとするのをどこかで制御していたようで、班の皆さんに対しても非常に申し訳ない気がする。だが、自分を失うことなく、どこかで班員の皆さんと心が通じたということを、ありがたく思っています。

（鹿児島大学　法文　三年　図師博隆）

友と心を通わせて行きたい

諸先生の講義を聞き、その国を思う強い態度、また固定観念にとらわれない自由奔放な心に感銘しました。また小柳先生の古典の読み方や古人の心を偲ぶ心構えというものにも感動いたしました。

五日間という短い時間ではあったが、名も知らなかった友と心を通わせて話をした班別討論や和歌相互批評を、これからももっと続けて行きたい。

（九州大学　法　一年　田中康裕）

平和を観念的に希求してはならない

「平和になる」ということを観念的に考えたり希求してはならない。観念的に考えることにより正しい判断を誤ってしまうことになる。

我々は、悲惨な戦争をなにはさておき否定しようとする。すなわち、人の命は最も大切なものである。その多くの命を犠牲にする戦争は即座にやめなければならない。そこでベトナム戦争においてはアメリカの撤兵を口にすることになる。しかし、現在の世界情勢において、アメリカの撤兵が何を意味するかも考えずに、「平和」という言葉にとりつかれていた自分を感じた。

終戦直後の異常な平和の中で成立した現憲法も、その改定を真剣に考えねばならないと思う。

（大分大学　教　三年　花木英明）

国のために死ぬなどとは思ったこともなかった

班別討論で「日本が危機に直面したとき、あなたは武器を取り戦うか」ということが話題になった。『何の躊躇もなくそうするであろう』というような答えが班の大部分を占めた。このとき自分は今まで全く経験したことのないショック

を受けた。自分は国ということを考えた事はなかったし、ましてや国家のため、大君のために死ぬということなど考えた事もなかったからだ。「死ぬのはこわいから、戦争へは行きません」と答えたかったのだが、それを言う事を避け、いろんな理由を考えては、それを遠回しに言おうと努めた。結局は、そんな態度で班のみんなに接していたので、自分の気持ちが皆に伝わろうはずはなかった。

そんな折、井上君より和歌相互批評で、そんな自分の態度を指摘された時、自分は赤面せざるを得なかった。井上君の態度が、僕のそれに比べてあまりに広大、寛大に思われたからだ。

（鹿児島大学　法文　二年　永石隆洋）

事実を事実として知る眼を養おう

思い切って、胸の内を吐き出すことが出来なかったことに心が残ります。物を考える、見る、そのときの我々の心の構え方をおぼろげながら知ることができたように思います。小田村先生が度々おっしゃった、事実を事実として知る眼を真に養わなければならぬと考えました。

（二松学舎大学　文　三年　松岡健二）

有用の人間になりたい

今までの自分の勉強不足、つまりあまり読書もせず、人生とか平和とかいう重要な問題を考えようとしなかった。しかし、この合宿で自分の無知を知った。この喜びを契機に今後一層努力し、世のために役立つ有用な人間になろうと思いました。

（長崎大学　工　一年　生原和芳）

日本を正しい方向へ向けてゆこう

合宿参加に際して、ぼくは自分の問題になんらかの解決がつかめるものと期待して臨んだ。その問題の第一は、ぼく自身大学生として何をしたら良いのか、また大学の在り方がこれで良いのかどうかということである。それから何か討議される場合、どんな問題にもはっきりと主張できる意見を持ちたかった。

五日間の合宿を終えて、これらの問題にかなり客観的観察力を養えたと思っている。この合宿では、自分一人の力ではどうすることもできない問題を、全国の仲間が集って、日本を正しい方向に向けてゆこうと努力しているのである。ぼくはこの合宿で、日本をこれだけ真剣に考えている人が全国津々浦々にいることを知った。このことはぼくにとってこの上

なくうれしいことだった。これらの人々が日本に満ちた時こそ、本当に日本が住み良い国になるのではないかと信じている。

（富山県立大谷技術短期大学　一年　桜井　正）

祖国を守るために戦うことは正しい

合宿第四日目の山本勝市先生のベトナム問題に関する御講義を拝聴して本当に感激しました。もう「感激した」という言葉以外どんな言葉も見あたりません。祖国を守るために戦うということは正しいことであり、戦争は死ぬからいやだというような人々に向かっては君の考えは誤っていることを堂々と主張したいと思います。

（神戸大学　経営　二年　井上雅圓）

真剣に生きようとする意欲

私は、今までは相手をうらやましく思うと己れのみじめさの余り、つい真心を受けとめようとせず、虚勢を張りがちであった。しかし、今度の合宿で日がたつにつれて今からの生活を真剣に生きようという意欲が湧いてきたような気がする。今日以後くだらぬ迷いにとらわれないようにしたいと思う。

（鹿児島経済大学　経　三年　横手満男）

国を思う人々のいることを力強く感じた

諸先生方の講義の底を流れる御精神に対して感動を覚えました。日本には、まだまだ国を思う人々のおられることを知り、力強く感じました。

しかし、一部の学生には社会思想に対する無気力さ、自治会などに対するあきらめも感じられて残念な思いを抱いたことがありました。来年もまた参加して勉強します。

（国士館大学　文　一年　秦　孝男）

第五班

日本人らしい生き方を続けたい

大学生活最後の合宿も間もなく終わると思うと、感慨深いものがある。一年の時、ただわけもわからず桜島合宿に参加し、それまでの自分が大変ちっぽけに思えた時の気持ちが、今しみじみと思い出される。そして、勉強しよう、誠実に生きていこうと誓って大学生活を過ごしてきた。その間には、大学での思想と自分の生きていこうとするものとのあまりにも大きな違いから、どう考えてよいわからなくなり、低迷し、

意気消沈して過した日々もあった。生きるということがこんなにつらいことなら、死んだ方がましだと思うこともあった。しかし、生きるということは心身ともに生きることである。それは自分自身の体験から確信をもっていうことができる。そして、三年半の大学生活を通じて、自分は日本人らしい生き方をしてきたことを心ひそかに誇らしく思い、今後もこの生き方を続けてゆきたい。

（九州大学　法　四年　古川　修）

目が輝きはじめた

この合宿で、まだ具体的に何を学び何を語ったかははっきり分かりませんが、ただ身体全体に湧き出てくるようなエネルギーを感じています。また自分でもはっきりと分るくらい目が輝きはじめたのを止めることができません。目は真実を語ります。真心を伝えます。世の中を正確に判断します。友達の瞳も同様に輝いています。何も語らずじっと座っているだけで、そこには心の通じあうものがあります。ここに来てやっとそういう目、瞳を感じることができ、ただただうれしく思います。

（長崎大学　工　一年　吉村三郎）

伝統的文化を基盤に独自の文明を

今の日本に一番欠けている事は、日本人たる自覚であると思います。現代の日本は、表面的にはたしかに近代化されてはいますが、精神面で日本人としての自覚を喪失しているために没落の過程を歩んでいる様に思います。我々大学生が、この危機を自覚し、日本の伝統的文化を基盤として独自の文明を創造的に発展させて行かないかぎり、日本は混迷の時代が続くと思います。

（拓殖大学　商　三年　野呂隆明）

体にこたえた

久しぶりの規則正しい生活は、だいぶ体にこたえました。いろいろな人と話ができたことが、第一の収穫だったと思います。この合宿はさまざまなことを考えさせてくれました。

（京都大学　法　一年　山崎博和）

生活に「くさび」を打ち込まれた

今、私の過去二年半程の大学生活を振り返ってみると、実に空白で実のないものに思われてきました。すべての問題からのがれよう、のがれようとしていた自分の姿が目に見えるように浮かび上がってきます。日本人として当然義務をはた

さねばならないことに対して、常に他人事の様に考え、自己逃避をしてきたからです。自分が日本人であることを忘れ、快楽にかまけて来た過去の生活が非常に残念です。浮浪の生活に一本の「くさび」を打ち込まれた、私にとっては一番大切なものを得たのです。

（下関市立大学　経　三年　中野国雄）

じみちな勉強をしたい

現在の学園生活は、学業中心で張りがない。それにはどうしたらよいか。合宿で得たものは、これらのことを話し合った班別討論であった。学園に戻ったら、多くの本を読み、その中から自分に最も適した本を見つけじみちな勉強をしたいと思います。

（亜細亜大学　法　二年　斎藤得三）

今後の生き方を学びとりたい

合宿に参加して、私たち学生が現在の日本におかれている立ち場を知らされると共に、今後の日本人の生き方を学びとらなければならない事を痛感いたしました。自分達がただ大学へ学歴をうるために行くのか、何を求めて入学したのか、また学生生活を充実したものにするにはどのようにしたらよいのか、班別討論において体験や希望を話し合い大変得るところがあったと思います。これからの学校生活が楽しみです。

（亜細亜大学　商　二年　鈴木雅教）

太子のお言葉が浮かんでくる

この合宿参加に先立ち「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を拝読致しました。この書物が私に与えた感動は、今の私には非常に大切なことのように思われます。この書物は、私共に一生をかけて読み給えと語りかけているようであります。この五日間、私はこの感動で素直に過ごしました。聖徳太子のみ教えに対して限りない敬慕の念を禁ずることができません。心を澄ますと太子の御言葉が一つ一つ浮んできます。私は太子の御魂にめぐり合った人生の機縁を心から感謝致しております。

（早稲田大学　政経　一年　稲毛修一）

心に残る〝日本人〟という言葉

僕がこの合宿に参加したきっかけは、日常の大学生活に疑問を感じ、何か自分の信念がないような気がしたので、友達に誘われるまま、皆と一緒に話し合ってみようと思いやってきました。

ところで、僕はこれまでの人生の中でこんなにも自信をもって御自分の考え方を述べられている先生方を見て、これほ

ど感動を覚えたことはありません。内容にはまだまだ不明瞭な所があり、「うのみ」にすることも出来ないと思い、帰ってから本当に考えて勉強してみようと思いました。僕の一番印象に残っている言葉は「日本人は日本人でしかありえない」、『日本人であるより先に人類の一員であるということは間違いだ』と言われたことです。当初僕はこの意見には反対の意見を主張しました。僕は「ナショナリスト」というより、むしろ「インターナショナリスト」であったからです。

しかし最後の御講義で「日本人は日本人であると同時に人間である」と言われた言葉は本当に心に残りました。

（明星大学　理工　三年　山本和男）

学問に対する態度を反省した

諸先生の御講義をお聞きして、私の学問に対する態度を大きく反省しなければならないと思った。表面的な勉強は、自分の生活において何も意味しない。真の知識を得て初めて活用できると同時に、問題にも真剣に取り組むことができるのではないか。

和歌を教わったことは、非常に素晴しいことでした。和歌を作ることにより、自分の真心を知ってもらい、相手の真心も知ることができるのだと思う。そしてどんな苦しい事にも耐えて行こうという固い決心が生れるのを感じました。

（福岡大学　工　二年　渡辺高明）

物を見る目を正してくれた

今までの自分は、目先だけしか見えない闘牛のような人間であったような気がする。赤旗を振っている連中を見ると、ぶっとばしたくなるような気にさそわれていた。自分が育ってきた環境のために本能的にそうした嫌悪があったのかもしれない。

しかし、この合宿に来てみると、みんなしてぼくが物を見る目を正してくれた。同じくアジ学生と対決するにしても、もっと正確に相手をみつめて進むようにしなくてはならない。

（岡山大学　教　二年　藤井安芳）

第六班

十七条憲法に感銘を受けた

小田村先生が「社会の重大問題を考える時自分自身の外に原因と対策を求める傾向が現代の社会に横行している」また「日本人よりも先に人類であるという考えは間違っている」といわれたことが思い出される。それから、班別の輪読で聖徳太子の十七条憲法を読んだ時、千数百年前に書かれたもの

であるにもかかわらず、まるで現代の混迷の時代に対して書かれたものであるかのようにひしひしと身に迫ってくるのが感じられた。

（広島商科大学　商　二年　中西弘幸）

どう生きてゆくべきかがわかった

「合宿で何がわかったか」と聞かれたら「これから自分がどう生きてゆくべきかということがわかった」と答える。班別討論の際に友が意見を述べるのに、自分だけ意見を発表できなかったのは非常に残念だった。現在の自分はあまりにも大学生としての知識を欠いていたことを痛感した。

（亜細亜大学　法　一年　吉住信一郎）

真剣さが足りなかった

合宿での諸先生の御講義で出てきた憲法問題、ベトナム問題等が非常に大切だとは思うが、何かとりつきにくく、こんなことよりも明日からの生活をどうしたらよいかを話したいと提案した。そこで友達と話し合った結果とりつきにくかったのは、自分に真剣さが足りなかったことに起因していることがわかりました。今後は真剣に物事に取り組んでゆくだけだと思っています。

（富山大学　工　二年　浜岸悦生）

ベトナム問題に対する考え方が変わった

いま僕の頭には、山本先生の「ベトナム問題について」という講義が一番残っている。先生の話の中に出されたいろいろな資料は、僕がはじめてお聞きするものが大変多かった。先生がきびしい口調でおっしゃられた「アメリカがいまやっていることには悪いところがあるかもしれない。しかし彼らが行なっているのは侵略戦争ではなくて、侵略阻止をやっているのである」という言葉が思い出される。僕はいまベトナム問題に対する考え方が変わったと感じている。

（鹿児島経済大学　経　二年　徳地正治）

決意が固まった気がする

私はこの研究会を漠然と右翼団体かなと思って参加しました。しかし諸先生の御講義を聞き、諸先輩の話を聞き、友と語らううちに私の迷いも疑いもすっかり晴れた気がします。先生方の国を思われる心のこもった言葉を聞いて、私達が全精神を傾むけてやるべきものが何であるかがわかったような気がします。友と語らううちに自然と和歌が詠めた時、一層自分の決意が固まった気がしました。

（鹿児島大学　法文　一年　松崎　茂）

自分の真心を訴えたい

人が真心をひたむきに訴えようとする時には相手の心を必ず打つものだと実感した。諸先生、諸先輩は、さまざまな問題を一生懸命訴えられた。そこにはとても私には見出せない激しさ、真剣さと真心が感じられた。この真剣さを僕も欲しいと思う。他人に対して自分の真心を訴えることができるようになりたい。

（九州大学　工　二年　志賀建一郎）

真心のこもった態度で取り組みたい

日常よく耳にする「言葉の重要性」、「人に対する心の姿勢」、「書物に対する心の姿勢」の重要性がしみじみ感じられた。古人の心情を現在の自分には体験できないが、今後真心のこもった態度で取り組みたい。日常生活にもこの態度を生かしたい。

（京都大学　文　一年　梅田敏文）

「和」の真意を知った

聖徳太子についての御講義において和の真意を知り、これからの勉強に光を与へてもらったような思いがしました。私達は五、六年たったら部下を率いて国の危急に備えねばなりません。その時には、強制された「和」では何の役にも立たない。心の根底で結ばれ合ったものでなければならないと銘記しておくつもりです。

最近人間不信に陥っていた私をまともな人間に戻してくれたのは班別討論や消灯後に友と語り会ったことでした。

（防衛大学校　一年　工藤敏生）

腹の底から力が湧いてくる

最終日の全体意見の発表を聞いた時、腹の底から力が湧いてくるのを感じた。生き生きとした感じである。それまで、私が面白くないと思っていたのは、他人に責任があるという感じが抜けきらなかったためで、昨日班長が「君自身がほんとうに求めようとしていないからだ」と言った言葉が今はっきりとわかった。

（九州大学　医　一年　遠藤政幸）

真剣に生きることの重要さを学んだ

古典の重要性を初めて知ったような気がしてならない。微力であっても、これからは古典に触れて、考えなくてはならないと思う。さらに「真剣に生きる」ことがいかに重要であるかも学んだ。現在の気持ちを持続させたい。

（宮崎大学　教　一年　吉満英男）

語り会う喜びを知った

この合宿で私は語り合う喜びを知った。ここで聞いた先生や、友の話には同感できないものがあったし、班別討論の時も、ただ一人意見の相違を感じることもあった。その場合でも、何のためらいもなく発表出来たことは嬉しい。

（神戸大学　法　二年　安藤幹雄）

第七班

真心をもって物事に取り組みたい

この合宿において、日本の混迷とこれから進むべき方向を教えられたが、そのままでは何にもならない。すべては我々の心構えにかかっている。先生方の日本を憂える気持ちはよくわかったように思う。我々は真心をもって真剣に物事に取り組み、行動に移さなければならない。

（九州大学　法　二年　松永栄治）

現憲法を再検討したい

班別討論ではあまり発言出来なかったことが心残りです。しかし人の意見に真剣に、謙虚に耳を傾けることができました。僕は憲法問題に最も引きつけられました。今まで法学部の学生として学び考えてきた現憲法に対する考え方を、根底からひっくり返されてしまいました。現憲法は占領時下において作られたものです。しかも私達は現憲法の下に生きているのです。だからこれからいや今すぐの課題として「憲法」の再検討をしようと思います。

（明治大学　法　二年　高木茂平）

韓国学生と心が通じた

この合宿で社会の中で如何なる姿勢で生きたらよいかという事を学んだ。自分の意見に固執せず他人の意見を聞く際にも、相手の気持ちになって考えるようにしたいと思っています。

また私は韓国の方々とよく話し一緒に歌いましたが、異国の人とは感じられなくなりました。国境などは隣家との間にある垣根のようにささいなものと感じます。これは〃心が通じた〃からだと思う。韓国学生も同意見であったし非常に嬉

しくなりました。（東京大学　理Ⅰ　一年　西村隆夫）

祖先の魂の中に指針を求めたい

この合宿で、日本人として、また一人の人間として如何に生きるかという姿勢を与えられた。その指針を古典や和歌にこもる祖先の魂の中に求めてゆきたい。

（鹿児島経済大学　経　一年　東　広義）

揺さぶられるような身心の震え

夜久先生の御講義をお聞きして体験した、あの揺さぶられる様な身心の震え。そこに私は、本当の思想を感ずることができました。（早稲田大学　商　一年　古賀勝次郎）

国を思う真剣さに打たれた

諸先生方の国を思うその真剣さ真心にヒシヒシと胸打たれ尊くおもわれました。（九州大学　医　二年　上山信一郎）

友と師を得た合宿教室

正直にいって僕の学生生活から合宿教室で学んだものを引くと、ほとんど何も残っていないような気がする。本当に話し合える友もこの合宿で一緒に勉強してきた友達であり、尊敬できる師を得たのもこの合宿においてであった。

僕にとってはこの合宿教室で学んだことは、日々の生活の支えであり、力であった。もしもこの合宿を知らなかったらどうなったであろうかとつくづく思う。

（京都大学　法　四年　井上慎一）

古典の良さを知った

今まで古典に接することがありませんでしたが、この合宿で古典のよさを知りました。帰ってから読みはじめたい。

（明星大学　理工　四年　川瀬五十夫）

心から友の言葉に耳傾ける態度を

ほんの些細な事、それがいかに当然な事であっても、心から友の言葉に耳を傾ける態度が非常にその友達に力を与えるということを身をもって体験した。

また短歌を作る難しさ、思っている事を表現する難しさを切実に感じた。我々がこの苦しみをもって古人の和歌をよむ時、それが、古人の心を知る力源となるという友の言葉を実感できたことがうれしい。

（富山大学　工　二年　山田　滋）

一人の人間が戦争と平和を演じる

小柳先生の御講義の中に「一人の人間が戦争と平和の両方を演じるものであり、そのことは人生の事実は複雑であるということでもある」という箇所があった。これは合宿の底に流れる「日本人として日本の国を感じ、日本の国を考える」という態度に通ずるものであると思う。

私は古典を読み和歌を作ることによって、純日本的なものへの限りない愛着と誇りとを新たに見いだした気がして嬉しくてしかたがない。強烈な意識とともに、大きな安心感を覚えるのである。またすべての問題を自分の問題として考えるという態度の厳しさを思うとき「誠を尽くす」ということの困難と重大性を痛感させられずにはいられない。韓国学生との対談にしても、厳しい現実に直面した国民の甘さを許さない態度を考えるとき、決して韓国のみではなく我々の問題として如何に大切なものであるかを充分に認識する必要があると思うのである。

（防衛大学校　三年　大隈末雄）

第八班

心をこめて古典を読みたい

古典や歴史を知識として学ぶのではなく、その中に心を没入させて読まねばならないことを今更のように痛感しています。聖徳太子の御本を手はじめに先人の魂のこもった古典を心をこめて読んでゆきたいと思う。

（上智大学　法　二年　津下有道）

正しい事を行なう勇気を知った

雲仙、阿蘇と過去二回の合宿を体験したのに、自分のやっている事が段々分らなくなってきた。今回は、去年の何分の一も自分には意見を出せなかった。口から言葉が出ず、とてもつらかった。ただ一つうれしかったことは、他人のため、正義のために常日頃闘い続けている人が同じ班にいるのを知ったことである。たとえ小数であっても正しきは正しき故に断固実行しなければならぬという言葉を聞いた時、本当にうれしく思った。

（中央大学　法　二年　樋泉克夫）

人生と密着した学問をしたい

自治会の改革に立ち上がり活動してきた友達とこの合宿にきました。組織力もなく理論的にも弱い私達になにか示唆が与えられるのではないかと思って参加しましたが、新たな力が湧いてくるのを感じました。さらに日本人として人としての学問、人生に密着した学問をもっともっとしなければならないとつくづく感じました。

（長崎大学　水産　一年　松岡　淳）

自分を鍛える闘志が湧いてきた

四泊五日の短い合宿でこれからの生きていくべき態度、物の見方、情緒の大切さ、政治のあり方、教育のあり方、また歴史、古典に対する心構えといったものを教えられた。とくに短歌にふれることにより、古い時代もいまの時代も日本人の持っている精神というものが全然変わっていないということを、はじめてこの合宿で知った。

合宿が終わって自分に宿題が課せられたと思う。友を通じ学問を通じ自分を鍛える一種の心の錬磨を心掛けたい。そういうファイトが湧いてきた。

（亜細亜大学　商　二年　小笹清志）

自分の殻を破ることができた

班別討論や諸先生方の講義をお聞きすることにより、自分が感じたり、考えたりしたことを恥も外聞もなく堂々と述べなければならないと感じた。引っ込みじあんに陥りがちな自分の殻を破って、友人と大いに語らうことによって自分自身も成長、前進してゆくのではないかと思った。

この合宿に参加して、「真の大学生活」というものを自分自身のものとしてとらえる事ができた。我々の学校は、創立してまだ二年目、学生総数も僅か百二十人足らずだが、この合宿で得たことを基礎に本当の友をつくり、悔いのない大学生活を築き上げてゆきたいと思っている。

（鹿児島工業短期大学　一年　林　広美）

陛下の御製に素直に感激した

今までの私は偉大なものに頭を下げるとか、同年輩の人に尊敬の念をいだいてつきあうことが素直にできなかったように思われます。しかし、今上天皇の終戦当時の御製二首を夜久先生にお読みいただいた時、今まで肩を張っていた力が抜け、素直な気持ちになることができました。

（一橋大学　商　一年　北川文雄）

日本人ならでは理解できない世界

この合宿で私は今までの自分の毎日の生活なり、勉学に対する態度が間違っていた事を強く感じました。平凡に生活を送り、一時の快楽に身をまかせていた自分の姿が、現在合宿の終わった自分の目からみれば、みじめなものだったと映るのです。まじめに自分を見つめ兄第、母親、師、国を真に思っていなかった自分に気づいたのです。いま何かしらムチで強くたたかれたような精神的励みを得たような気がします。

私は「海行かば」の歌を聞いて、涙がこぼれるような湧き上がる感動に襲れました。それは亡くなった父を思い出すのです。何故そうなるかは自分にもわかりません。不思議とそう感じるのです。「海行かば」の歌自体に日本人に何かを訴えるものがあるような気がするのです。またこのことは当然短歌の世界にも言えることなのです。死を前にして遺した和歌を読んでもわかります。日本人ならば、日本人ならでは理解出来ぬ世界があるのだと思えます。天皇の御歌にはいつも頭が下がります。何故あのような純粋なお気持ちを国民に向けて下さるのだろうか。本当に立派な人だと思います。自分の感情を十分に書けませんが、本当にあのような天皇という人を我々の上にいただいている日本人は、何よりもまして幸福だと思います。

（慶応義塾大学　法　一年　小山浩夫）

祖先のみ霊が実感できた

古典、神話を大切にすることを学び、国を思うということを知り、友の情けや師の有難さを感じたことは、よりどころなく、無気力に生きてきた私に救いを与えてくれた気持ちがします。

四日目の夜の慰霊祭に参列し、私は自分が忘れていた祖先の御霊を再び実感することができました。

（九州大学　工　二年　福岡和文）

人の性の善を信じたい

私には「愛」というものがすべての根源だと思える。朝の集いのおり、ふと目にとまった朝顔の花に心ひかれた。花一輪を深く愛する心が同時に隣人愛、祖国愛、人類愛につながるのではなかろうか。花を愛する心と祖国を愛する心は決してかけ離れたものではないと思う。私は信じたい。人の性の善なることを。

（玉川大学　工　二年　大塚卿之）

新しい歩みを始めよう

私は今一時も早く、家に帰りたい気持ちです。勉強をせねば、心を鍛えねばという焦りが、「家に帰ったら……」と僕の心を急がせるのです。そして私は、多くの友に合宿の話をして聞かせることでしょう。天皇の御歌を拝誦したことや慰霊祭のことなどを語った時の、昔の珍しい遺物を見るような目をした、それらの友の顔が見えるようです。私の話しに共鳴してくれる友が果たして何人いるでしょうか。私の周囲には、精神のよりどころを忘れて、しかも、それで充分としている、いやそういう自分こそ正しいと信じこんでいる人々の何と多いことでしょう。戦後に育った私たちは、何かを忘れているのです。そして、それを知ろうとしないのです。

私はこの合宿で、日本の置かれている地位と日本民族というものを学びました。そして、毎朝、国歌の美しい調べにのる国旗を仰ぎ、慰霊祭で歌った〝海ゆかば〟に毛の逆立つような感激を覚え、天皇の御歌に涙のにじむのを禁ずることができなかったのです。友と語ったこの感激をどうして他の同胞に語らずにおれましょう。同じ国土に育ち、同じ言葉を話す仲間です。どうしてこの感激が解ってもらえぬはずがありましょう。

小柳先生にはものを書きながら読むという、本当の学問の仕方を教えてもらいました。班の世話をして下さった名越先生も、「論文を書くことで本当に思想を鍛えているのだ」とおっしゃいました。私は学生の中に、扇動に踊らされているにすぎないあわれな存在があるのを知っています。感情に流されるのではなく、それをしっかり身につけるような、学問を始めようと思います。

合宿の閉幕を前に
もろもろの師友の言の葉胸に秘め新しき歩み今ぞ始めむ

（九州大学　農　二年　蒲牟田高雄）

（編集者注）

前の文を執筆された蒲牟田高雄君は、合宿中も全班員に心から慕われた人であった。私達がこの感想文集を編集しているさ中の九月十四日、心臓病で急逝されたという悲しい知らせが届けられた。何という悲しい知らせであろうか。御両親、御兄弟のご悲歎はいかばかりか、また班員諸君の落胆もはかり知れないものとお偲びいたします。ここに同君が書かれたすばらしい感想文の全文を掲載して、今は亡き、前途有為であった同君のみ霊に心から哀悼のまことを捧げます。

第九班

天皇の御心に触れることができた

夜久先生の御講義を聞いて、心の中に大きな変化が起こった。日本の進むべき道、私自身の進みゆく道がぼんやりではあるがわかったのだ。これまで実に小さな利己心にとらわれていた生活が悔やまれてならない。

今上天皇が終戦のおりにお作りになられたみ歌によって、天皇の国民の上を思われる御心に触れ、自分の心はひらかれた。自分の身の上よりも国民のことをひたすら思われる天皇の御心をしのぶあまり、夜久先生が胸つまらせて絶句された時、天皇が日本におられ、国民のことを思っておられることをこのうえなく有難く感じた。また祖国のために尊い生命をささげられた祖先のみ霊に感謝するのは当然だと痛感した。

（西南学院大学　文　二年　小野吉宣）

心のいらだちを解放してくれた合宿

大阿蘇の山は美しく、日の丸は朝もやの中にくっきりと浮かんでいた。ここに集まった全国の友等のまじめな瞳の輝きは、ただならぬ緊張をかもしだした。静かながらも、確かに日本人のいのちがひろやかに息吹いていた。そして、班別討論での夜おそくまで語り合う言葉は、なごやかで心やすらぐもので満ち満ちていた。ここに、今の世の錯乱した心のいらだちを解放してくれるものがあった。

（鹿児島大学　教　四年　北島照明）

心を打ちあけて話し合った

諸先生方の御講義をきき、いままでの自分の思想、意思などを反省することができ、たいへん良かった。また、班別討論において、色々の大学の方と真剣に心を打ちあけて話し合ったことが非常に勉強になった。

（亜細亜大学　法　一年　野地純一）

真心とは何かを実感できた

四泊五日の合宿を終わって感じたことは、真心をもって人に接するということであった。他人の話を聞く場合、ともすれば自分の考え方にこだわっていた。だから班別討論でも自分の考え方に固執して意見を述べていた。

しかし、和歌の相互批評のときには何のこだわりもなく、その歌をよんだ人の心になって和歌を理解しようとしている自分に気づいた。私はこの気持ちが真心をもって人に接する

ことであると実感した。

（明星大学　理工　三年　平井隆洋）

人生を真剣に考える態度ができた

人生について真剣に考える態度と、祖国日本を思う心を強く植えつけられた。これがこの合宿で得た大きな成果である。

これまで聞いたことのない講義が多かったので十分整理されていないが、今後しっかり整理し勉強していきたい。また、和歌創作で気がついたのは、和歌が真に人の心を表現するものであり、和歌を作る態度で物事を見れば、かくされた真実のもの、すぐれたものに気づくものだということを知った。

（富山大学　工　二年　藤田哲次）

言葉を固定化してしまう不安

これまでの自分の生活に欠けていた「真心」、「心を大切に」ということを教わり、心から感銘した。しかし、自分はこれらの言葉を固定化してしまう不安をひしひしと感ずる。固定化してしまう心に気をつけて生活しなければならない。

（関西大学　法　三年　柴田義治）

自分をさらけだすことの難しさ

班別討論で自分が依然として心の壁をつくって議論している気がした。自分としては、純真で飾らずありのままをさらけだしたつもりだが、討論が終わってよく考えてみると何かしらむなしさが残っている。自分の言葉の真意がどうもみんなにわかってもらえてないような気がする。自分では純真で謙虚であると思っていても、言葉にするとありのままに友には伝わらない。自分の真意を伝えることのむずかしさが解った。

（九州大学　経　三年　平山正憲）

和歌は日本人の芸術的表現

自分は何もわかっていないのだと痛切に感じた。この合宿で、日本についての諸問題を知り、愛国心にめざめ、そして国旗、国歌に新たな気持ちをもつことができた。また、大自然の恵みにはぐくまれた日本の微妙な心情をこまやかに表現する和歌を知って、これこそ日本人の芸術的表現であると感じた。

（鹿児島大学　法文　一年　山本　徹）

反発を覚えた合宿

諸先生の講義を聞いて、情熱とか、まごころということが学問とか、現実政治とか、天皇制とか、憲法とかに結びついて行く事に賛成できなかった。さらに左翼や共産主義を絶対いけないものだとすることに感情的になっているのではないかと思え、反発を感じた。

ただ友達に接する態度について小田村先生が「全体意見発表」の締めくくりとしておっしゃった御話には感動しました。本当にその通りだと思う。そのような先生が何故、政治とか、天皇制とかに関して、あのような考えを持たれるのか、私には理解できなかった。

（京都大学　経　一年　林　利行）

混乱と迷いの生じた合宿

「あえてするに勇なれば即ち殺、あえてせざるに勇なれば即ち活」「無為にして天下治る」私はこうした老子の無為の思想に深く傾倒し、自分の生活もその考え方に基いて生きてきました。

しかし、この合宿に参加して、全く私とは反対の生き方の美しさをも感ずることができました。それはこの合宿での先生方のまぶしいばかりの情熱の美しさ。もう一つは山田先生が紹介された「吾死なば後につづきてとこしへに御国護れよ四方の人々」という歌を残して死んでいった若い学徒兵のいたことを知った驚き。私もこの先人の御心を引き継いで人のために何かしなければならない、そうも思いました。

しかし、私はどうしても人間の力を信じる気になれない。人間は自然の前にいかなる力も持っていない、という思想を捨てきることができなかった。私の気づかなかった生き方の美しさを知りつつも、自分の思想をも捨てきれないで混乱と迷いが増すばかりである。

（岡山大学　法文　三年　保住咄夫）

物事を正確に見きわめる修練

一つの問題を考える時、物事の外面性にとらわれず、心を内に沈めるようにして考え、そしてその本質を見きわめなければならない。

私は教育の誤りというものの恐しさをつくづく感じ、今後は自分が一層謙虚になり、物事を正確にみつめる修練をしなければならないと痛感しています。

（学習院大学　経　三年　角　俊暲）

第十班

真剣に考えることの素晴しさ

この四泊五日の合宿は本当に緊張の連続であった。心身共に疲れたということが偽らざる気持ちである。一日々々を本当に考えて過ごすことができたと思う。先生方が熱をこめて語られる御講義を聞いていると、あたかも私一人に向かって話しておられるように思えてきた。そして今迄自分が考えてきたことが、何と浅薄なものであるかが痛感され、真剣に考えるということはどういうことなのであるかがわかってきたように思われる。真剣に考えるということは本当に苦しいことであるが、それはまた、実に素晴しいことだということも身をもって体験することができた。物事を話しあう際にも相手の心になって、相手のいわんとすることを考え、それに対して自分が真心をもって応える。そういう心を常にもつことが何よりも大切であると思う。

（慶応義塾大学　経　四年　小山紹夫）

頭が下がった先生方の真剣な態度

書こう書こうと力んでみても、思うように書けません。ただ次の三点ははっきり断言できます。

一、先生方の真剣な態度と信念には頭が下がったこと。
二、すばらしい友人を得たこと。
三、〃積誠の心〃がいかに大事なものであるかということ。

（鹿児島大学　法文　一年　高木道弘）

生きていることを改めて発見する思い

この合宿だけは何回参加しても、そのたびごとに自分の生きる道に対して強く奮い立たされる何ものかを発見する。そこには、我々の真に求めている、何ものかがあるからであろう。それは、止めることも、押えることもできない祖国への愛情である。マスコミやジャーナリズム等で毒された祖国への思いを打払い、回復する場であるからだ。国民同胞としての思いがこの合宿の場では、実に生き生きととりかわされているからだ。清らかにして熱い祖国への思いがなんのためらいもなく湧き出してきて仕方ないのだ。自分と友とが本当に信じられるようになり濁った考えや思想に対しては、敢然として憤りを発せずにはおられず、ぴんと張った心の糸に何も

かもが、ビリビリ感じられてしようがない。そんな時、自分の生きていることを改めて発見する。実に鮮かな思いが自分の胸中に溢れ、はつらつとしてくるのだ。こういう思いは日本人の一人一人に感じられるものだということを信じている。

（鹿児島大学　教　四年　徳田浩士）

日本の現状をはじめて知った

私はこの合宿で現代のマスコミはかなり偏って報道していることをはじめて知りました。諸先生方の御言葉をお聞きするたびに、日本の現状が分り、マスコミの不正確さと怠慢を知り、このままでは日本はかつてのローマ帝国のようになりはしないかという不安にかられ、日本人一人一人がもう少し愛国の精神を養う必要があると痛感しました。

（亜細亜大学　商　三年　有馬幸一）

頭の中に光がさし込んできた

初参加の私にとって、諸先生方の御講義は耳新しいものばかりで、三日目ごろから頭の中がひどく混乱してしまい、それまで自分なりに小さくまとまった価値観世界観がくずれさってしまいひどく面くらいました。しかし三日目に和歌をつくり、四日目の夜に批評をし合った時に、頭の中に光がさし込んできたような気持ちになり、それまでのもやもやしたものがとれてしまいました。和歌には実によくその人の心があらわれていると思います。和歌相互批評によって、自分がいかに利己的であり、自分自身のことばかりしか考えていなかったこと、また、他人の言葉をもっと尊重して、その心をくみとらなければならないことを学んだのが最も根本的な点でした。

真心ということも、信頼ということも考えてみました。今回の合宿では自分自身のあり方を省りみるだけで精一杯で、日本の現状を考えてみるというところまではいきませんでしたが、それはそれでよいと思ってます。閉会式の時には胸がいっぱいになり、涙をとめることができませんでした。

（長崎大学　経　二年　佐藤健治）

自衛隊のあり方を再認識させられた

合宿に参加してみて私が得たものの一つは、私たちの班長が昨年韓国を訪問したときのお話を聞き、韓国がいかに緊迫した戦時態勢下にあるかを知り、今まで自分が考えていた自衛隊のあり方を再認識させられたことです。

もう一つは、和歌をつくる喜びを見出したことです。全体講評の前に、ずっしりした歌稿を手にし、その中に自分の歌

を見つけたときの、あの照れくさいような、うれしいような気持ちは何ともいえません。それだけが歌をつくる喜びだとはいえませんが、とにかく私の心の中に、これからも和歌をつくってゆきたいという気持ちが生まれたのは、何よりも得がたいことだと思います。（防衛大学校　三年　宮本健治）

自信めいたものがわいてきた

大きな収穫を与えてくれたこの四泊五日間は、私にとって生涯忘れることができないでしょう。諸先生の熱意あふれる真剣な講義、その態度にも心打たれるものがありました。和歌の創作は私にとって重荷ではありましたが、豊かな情意の練磨にとって、それは最良の方法だと信じます。これからも和歌創作によって自分の心を磨いていこうと思います。何事にも未熟な私に、一つの自信めいたものがわいてきたのは確かです。（鹿児島経済大学　経　一年　相徳和義）

日本人であることを自覚した

「ベトナム戦争」、「日韓問題」などを考える場合、当然日本人として、自分はどう考えるかということに、最終的には考えが及ばなければならないと思った。今までこのように考えなかったため、新聞を読んでも正確に読めなかったが、今度から正確に読めるような気がする。

また天皇については御製を読み、お人柄をしのばねばならないと思うし、聖徳太子のご本や古典の勉強をしっかりしなければならない。これらのことを実践することにより、日本人としての自覚をより強固なものにしていかねばならぬと思った。（九州大学　工　一年　千田　博）

一人一人に同胞感を感じた

合宿教室の終わりに当たって思うことは、日本民族の一人一人に同胞感を感じたということである。しかし、これは決していたずらな国粋主義に陥ることでもなく、反対の見解を持つ者の口を封ずるものでもない。誤りは正し、正しきは確信をもって実行し、真に日本民族の平和と幸福と利益を考えて行動することが大事であると感じた。（中央大学　法　三年　徳永耕一）

ニイチェの言葉が自分のものになった

ポスターを見て、一沫の不安をいだいて来た合宿でした。というのは、この合宿がこれまで聞いたことのない内容の合宿でしたから。しかし、今は合宿に参加して本当に良かったと思ってます。特に小田村先生と木内先生の講義で、今まで

に私がニイチェの「ツアラトゥストラ」を読み心に残っていることが、先生方の確信ある言葉によって、自分のものになっていったように感ぜられます。

（福岡大学　工　三年　川浪登美夫）

第十一班

自分の殻を脱して友と語り合いたい

自分の日頃の生活態度を振り返ってみると、自分は絶えず何かにぶつかって生活しているのだが、それにぶつかった時、いつも二つの道の選択に迷っているようです。その二つの道とはある程度勇気のいる道と回り道との二つなのです。多くの場合回り道をしてしまい、そして、後で苦しみ、この次からは！と反省するのです。しかし、いつのまにか反省さえもしなくなっていた自分に、合宿で気づいたのです。

私は班長をやらせてもらいましたが、最初はともすれば、部屋を離れて考えこみがちでした。でも、班員の素直な意見や「忙しそうですね」と声をかけてくれる班員たちの思いやりに答えなければならないとつとめて部屋に居るように心がけました。これからも殻の中に閉じ込もりがちな自分を克服して友と語り合いたいと思います。

（長崎大学　経　二年　白石　肇）

国のことを真剣に考えるのは当然

私はこの合宿で「国のことを真剣に考えることは、右翼でもなんでもない。日本人として当然であり、また日本人なら真剣に取り組むべきことである」と気がつき、頭を一つたたかれたような気がしました。そして、今まで自分は、国家とか、平和とか、国防とかについて、なんと浅薄な地に足のつかない議論、いや言葉のもてあそびをしていたのだろうと思い知らされました。

私が最も感銘したことは人の「まごころ」を知ったということです。そして「まごころ」を実践するには自分を飾るな、友人の悩みなどの相談を受けた時は、既成の言葉や話で解決するのではなく、自分の体験から感じたことを相手の身になって考えて行なえ、という長内先生のお言葉をいただいたことは何よりも大変うれしかった。私はこれを今後の学生生活のみならず大きく人生の一つの指針としてゆこうと決心しております。

（早稲田大学　教　一年　戸辺　武）

これほど深く物を考えたのは始めて

合宿を終えて、今最も強く感ずることは、これほど真剣に深く物を考えさせられたのは始めてだということです。班別

討論で友が「自分は人間如何に生くべきかを胸を開いて話し合える友を求めて合宿に来た」と深刻に自分自身の心情を吐露するのを聞いているうちに、今までのその日暮しの大学生活と、皮相的なものの見方に強く反省させられました。それにこの合宿で特に興味を覚えたのは、和歌を作ることでした。

私はこの合宿を契機に「正確に素直にものを見ること」「まごころをもって人に接すること」を肝に銘じて、これからの大学生活を送りたいと思います。

（明治大学　商　二年　豊島典雄）

生きるための指標を得た

ぼくにとって、この合宿の最大の収穫は、班員との心の交流であった。真剣に自己の生き方を考え、求めようとした。

ぼくは、合宿に参加するまでは、人間と動物の違いさえわからなかった。しかし、この合宿でぼくは、生きるための指標を得たと思う。それは、たびたび聞いた真心という言葉であった。

聖徳太子の言葉「人皆党あり、亦達れる者少し」を常に頭において、これからの人生に対処してゆきたい。

（九州大学　工　二年　阿部清人）

作歌の喜びを知った

大学では教わることのできないことを教わり、また大学の友だち以外の者と話しをして大変勉強になりました。ぼくは初めての人と話をする自信はなかったのですが、勇気を出して話をしたら友にもわかってもらえ、大変ためになりました。和歌を作るのははじめてのことで、作れないのではないかと思いましたが、いろいろ考えてつくり作歌の喜びを知りました。

（日本大学　農獣医　一年　野口秀夫）

真心の通い合うことの尊さを実感

夜久先生は御講義の中で、今上天皇が国民のことを思って、戦争を終結された御歌をお詠みになりながら声をつまらせていらっしゃいました。私も天皇の民の上を思われる深い心のこもったみ歌にまぶたの熱くなる思いでしたが、それとともに夜久先生の姿に、本当に尊いものを見た気がしました。涙があとからあとからあふれでて来ました。全体意見発表の時にも、皆の話されることもよく聞こえず、ただ夜久先生の姿が、まぶたの裏に焼きついていました。私はこの思いを発表したかったのですが、壇上で何も言えなくなるような気がし

てじっと坐っていました。真心をもって語りかける人に、我々は真心をもって答えずにはおれない。天皇陛下の真心と夜久先生の真心がぶつかって光を放っているようでした。真心の通い合うというのはこんなに尊いものなのかと感じ、それをはっきりとこの目で見ることができたような気がしただけでも、この合宿は尊かったと思います。

（九州大学　医　一年　小柳左門）

生きる道を見い出した

ずばり、この合宿は今までに体験したことのない異例の合宿でした。今までの自分が恥ずかしい思いです。友達に誘われて、何となく参加したのですが、日頃考えていることをこんなに真剣に多くの友に話すことができ、また多くの先生方の講義を聞く機会を得ることができ、本当に参加してよかったと思います。はっきりしたものではありませんが、これからの人生に、何かしら生きる道を見い出した感じです。

（鹿児島経済大学　経　一年　石野良孝）

「何かあるもの」を植えつけられた

この合宿で私が学んだもの、それは質的にも、量的にも大きな教訓として自分の内なる経験にしみ渡り、今後人生の諸問題に対する決心、誓い等に決定的とまで言えるような「何かあるもの」を植えつけてくれたような気持ちです。

最後に一言いいたいことは『ああ、良かった。ほんとうに立派な合宿教室であった。この真剣な態度を持続し、友らと一体となって、力強く前進しようではないか』ということです。

（中央大学　経　二年　杉　盛全）

深く胸を打たれた

この合宿を終えるにあたり、私は今までいかにだらしなく学園生活を送っていたかを反省させられるとともに、祖国日本を憂い、祖国のためにその尊い命をささげて下さった方々に深く胸を打たれました。私たちの祖先が今日まで築き上げてきた伝統と文化を土台に、これからの日本を立派な国にするという大きな目標に向かって前進していかなければならないと思います。

（鹿児島工業短期大学　一年　稲留信男）

受け売りでなく、真の姿をみつめよう

第一日目の講義から「事実」という言葉を深く考えさせられました。私は今までに、いろいろな思想を耳にしてきました。私は私なりに「事実」を話してくれる師というものを探

がしました。マルクス主義が正しいと考えたこともあり、逆に反感も持ちました。しかしこの合宿では「事実」は自分で感じ取らなくてはならないということを強く感じました。受け売りではない、真の姿をみつめなければならないということを……。

班別討論で初めのうちは自分の考えを述べても、それは飾りをつけた言葉でした。しかし時がたつにつれて、これでは時間がもったいないと思い、無意識のうちにそういう言葉が消えていったように思います。

（皇学館大学　文　二年　山脇敏夫）

何事にも責任をもってやろう

私は政治や社会問題等を論じ合う時、よく左寄りの者は自分の責任を回避してすべてを社会の責任に帰していると批判してきました。だが、その時の自分を今考えてみますと、世の中が乱れているのは、左寄りの人間の責任なんだといって、自分も結局同じように責任を回避していた事に気がつきました。今後は何事を行なうにしろ、もっと自己の責任においてやっていきたいと思います。

（玉川大学　工　二年　細田邦泰）

第十二班

筆記を止めさせられた御講義

諸先生方のお話は、私が安易に求めるような解決をすぐお示しにならず一見突っぱねていられるようでした。私自身に「物を考えさせよう。活字で本に書いてあるものがすべて真実ではない。どれが真実で、どれが偽りかを君自身で判断しなさい」と無言のうちにいましめておられるのではないかと思いました。

また夜久先生の御講義で「終戦の時、陛下がマッカーサーにお会いになり、開口一番『今度の戦争は全て私の責任であり、これからは日本の復興に協力して下さい』といわれた」と述べられ、陛下の御心中を察せられるあまり絶句されてしまった時、私はハッとして筆記することをやめてしまったのです。ただ、知的に理解する態度で記憶に止めておくつもりでノートしていた自分に気付いたのです。その時、夜久先生に本当にすまないという気持ちが一杯で、先生のお顔を正視することができませんでした。

（九州大学　工　四年　稲津利比古）

地についた生き方を

この合宿は非常に貴重な体験を与えてくれました。人生における邂逅というものに不思議な心地がし、また感謝の念を感ぜずにはいられません。人生に処していく上で自分の拠って立つ基盤を教えられた思いがします。

今までの私は自分の足下を確認せず、宙に浮いて漂っていたような気がします。今は自分というものをしっかりとつかみ得たように思います。地に足がついた生き方は、自分をとりまく一切の事実から出発しなければならない。それは自分が日本人であり、学生であるというまぎれもない事実です。この事実に深く思いをひそめ、その自覚の上に立って思索し行動していかねばならないと思います。おおらかな、雄々しく豊かな心を持って真剣にきびしい現実に立ち向かいたいと思います。

（鹿児島大学　法文　二年　松木　昭）

聖徳太子、親鸞を知った

今までの私は醜く、汚なく、弱いと感じ、救いのない日々を送り、ふさぎがちだった。しかし私はこの合宿生活を通じて聖徳太子を、親鸞を知った。これらの人々は人間の本性を痛感し、悲嘆しつつも、なお人間を信頼し、道を求めてきびしく歩いて行かれた人たちである。この人たちは私たちに永遠に生きる道を教えてくれているのです。

この合宿で、真実と偽りとを見分ける目を少しでも持てたことを本当にうれしく思います。あとは実践あるのみです。正しいと思うことを実践することによって、頭だけではわからない真実がわかるようになると思います。

（富山大学　文理　二年　井原　稔）

今上天皇の御歌にふれて

初めて体験した四泊五日の生活は素晴らしいものであった。諸先生方の熱のこもった御講義や阿蘇山での和歌創作、友の一人一人の言葉に耳を傾むけ、自分のつまらぬ話を聞いてくれた班別討論などの一つ一つをいつまでも忘れることはできないであろう。とくに和歌を通じて、古人の心を知り得たことは、今までの和歌に対する私の考えを変えてしまった。夜久先生の御講義の中で

世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にほへるおほうみのはら

という御歌にふれて、このように世の中を念じておられる陛下を敬うことはきわめて自然のことだと思った。

（予備校生　大田黒　裕）

古典によって心が開かれた

古典と和歌の講義を除いて、ほとんどの講義は私を説得し得なかった。また慰霊祭でも宗教的な雰囲気にひたることが出来ず、足が痛かった。

ただ私が良かったと思うのは古典によって心が開かれたことである。聖徳太子の御言葉「人皆党あり、亦達れる者少し」が胸に響いた。私は思い上がっていたのだと反省した。心が開けることによって心の余裕を持ち得たことは真に幸福だった。心が広がった気が今はしている。

（九州大学　工　二年　田口輝彦）

日本人であることを再確認した

毅然として意を貫ぬく国文研並びに大学教官有志の先生方の心に接し、自分も日本人であると再確認したことにたとえようのない喜びを知りました。そして多くの友と語り明かしたこの五日間の事が、走馬燈のように私の胸の中をかけめぐる思いがしています。もっともっと語り、感激し、学びたいと思います。

（国士館大学　体育　二年　宮下藤雄）

誠心とは具体的にどういうことなのか

人に誠心をもって接するということは、相手の気持ちを本当にくみとろうという心の姿勢であると国文研の先生はおっしゃられる。班別討論で話題になった学園問題、ベトナム問題、憲法第九条問題などを論じる時、人に接する誠心とは果たして何であろうか。私は学園問題を論じるとき「自分は学園に対して何をしうるか」また「自分は学園に学ぶ一員であり、学園生活に責任をもつ一員である」という心構えが心の底になければならないと思う。そういう心構えがなくして学園問題を論じたならば自分の言葉は空々しい机上の空論でしかないであろう。

憲法第九条問題も「自分は国防に対して何をなし得るか」、また「自分は必ず日本を守る」という決意が心の底になければならない。ベトナム問題でも、こういう態度で考えなければならないと思う。

（長崎大学　教　三年　椛島有三）

私の精神に光明を与えてくれた

内外の諸問題に如何に対処するかということは究極的には自己の精神をいかに確立するかということにあると思う。この合宿は私の精神の確立にひとすじの光明を与えてくれたと

思う。

「自己とは何か」という問題について諸講師が熱烈な愛情をもって私達に示唆されたことをありがたく思うと同時にその示唆の厳しさを強く感じる。

たゆまない求道心と強い情熱をもって青年のいのちを燃やし尽くして生きようと思う。

（大分大学　教　三年　中原義人）

天皇に敬愛のまことを捧げたい

この合宿に参加し、本当に日本の将来を憂えている諸先生や友人に接して自信が湧いてきたように思います。国の乱れを糺すには、悠久の建国精神から受け継がれてきた天皇に敬愛のまことを捧げるとともに国民協調の精神に立ち帰ることが根本だと思う。

（京都大学　文　一年　筒井清忠）

心のこもった言葉を語りたい

今まで考え及ばなかった多くのことで頭の中がいっぱいである。日本の国家利益や天皇のことなど、日本人なら当然深く考えるべきはずなのに、私は今まで簡単に考えすぎていた。諸先生方や同じ部屋で話し合った友だちの、ひたむきな心のこもった言葉を思い出す。今後は私も本当に心からの言葉を語るように努めたい。（鹿児島大学　法文　一年　金津洋雄）

聖徳太子の御言葉に感動した

私の最も感動したのは、十七条憲法にみられる人間性を鋭くとらえた聖徳太子の御言葉であった。「人皆心あり。心各々執あり。彼是とするときは即ち我は非とす。……彼の人瞋（いか）ると雖も還って我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も衆に従ひて同じく挙へ」という御言葉には、我々が人と付き合う時に最も重要な点を示されていると思う。我々はともすれば、自分だけが正しいと思い、議論をする場合も自分の意見のこじつけに終始しがちである。私も班別討論では他人の意見を深く考えずに、自分の意見をこじつけていっていたことが、この言葉に接したときはじめてわかり、本当に恥かしい思いがした。これからも「共にこれ凡夫のみ」という言葉を自覚してゆこうと思う。

（東北大学　工　一年　河合忠雄）

第十三班

はじめて知った、人と人との接し方を

諸先生の御講義をお聞きして、はじめて人と人の接し方を知った。友人と語り合う場合、相手の身になって真剣に考える

という心構え、態度がいかに大切であり、さらに祖先との付き合いがいかに重要であるかを教えられた。とくに親に対する接し方には、全く注意さえ払わず、むしろ抵抗してきたが、これからは素直な気持ちで接するよう努力していきたい。

言われてみれば当然なことが、自分の心の中になく、またあっても意識せずに生活を送ってきたことを後悔している。今後は個人の殻にとどまることなく、現実を直視し、今まで友人に対して持っていた友情らしきものを真の友情にするよう努力しようと思う。

（東京工業大学　理工　三年　大岡　弘）

この感激を先生や友らに伝えたい

この合宿を紹介して下さった佐藤慎一郎先生はじめ多くの友らにこの感激を伝えたい。私がこの合宿に参加して、胸中に味わった喜びを、学んだ一つ一つのことがらを心をこめて伝え、一緒に進みたいと思う。

（拓殖大学　商　二年　高浜史朗）

友の心に自分を投げ出してゆきたい

人は友を求めねばならない。友と共に生きねばならない。それ以外に私たちの人生がどこにあるだろうか。ぼくは友を求めたい。友と語りたい。そこにこそ人生の真のよろこびがあるだろう。どんなに苦しくともつらくとも、友の世界に、友の心の中に、自分を投げ出さなければならないのではないか。人との付き合いにおける心のさゆらぎ、それが人生ではないか。

これからの私は、ひたすらに友の心の中に、自分以外の大きな世界の中にふくらんで燃えてゆく以外にはないのだ。

（岡山大学　理　三年　伊藤三樹夫）

自分の殻を破って生きてゆきたい

とにかくこの四泊五日の合宿を自分なりに力一杯やった。親鸞の言葉に心ひかれ、また「人皆党あり、亦達れる者少し」という聖徳太子の言葉を知り、今後はあまり自分の殻に閉じ込もらないで生きていきたいと思う。

（富山大学　工　二年　望月保宏）

自分の進むべき道がつかめた喜び

きびしい緊張の連続であった。私は今日までこのような会に参加したことはないし、語り合った経験もない。始めのうちは不慣れな自分が不安であり、また全然顔を合わしたこともない友と親しく語り合っていくことに、人見知りする自分

がとけ合わないような気がした。しかし、この五日間、緊張した中で友と積極的に話そうと努力し、そのつらさにたえて自分をありのままにさらけだした結果、友の生き方に触れることができ、今後自分の進むべき道がぼんやりとでもつかめたことを非常に喜んでいる。個人が一人でいくら努力しても実現できることには限界がある。したがって私達は、友らとともに強い意志と謙虚な気持ちをもって対処していくことが大切であり、それによってより大きなものを実現することができると思う。

（宮崎大学　教　三年　黒木和徳）

日本人の心情を守り育ててゆきたい

諸先生や先輩方の熱心、かつ真剣な御態度に接して、私は「まごころさえ持っておれば相手が誰であろうと気持ちが通じ、真の友を得られる」という確信を持つことが出来ました。また私は日本に生まれ日本に育ったことに誇りと自信を感じております。万葉の歌に、また今上天皇の御歌ににじみ出ているあの尊い心情こそ、我々日本人が今後も守り育ててゆくべきものであり、そのためには真の勇気をもってこれからの人生を送ることが、祖先の願いに答える道だと考えております。

（早稲田大学　商　三年　阿部孝郎）

青春の喜びを感じた

諸先生方の講義は、私の心を揺さぶり、いままでの疑惑や小心さをみじんに打ち砕いた。私はこの阿蘇合宿で初めて青春の喜びを感じた。この感動を私一人のものとせず、学園に帰って友達に語り、また今までの自分ではなくなったことを示したい。

（鹿児島経済大学　経営　三年　松永　浩）

自分の考えの狭少さを痛感した

私はこの合宿に参加し、本当によかったという気持ちで一ぱいです。感じたことは余りにも多く、まだ完全に自分のものになっていないので心配です。講師の先生方が私にとって専門外のことをあれほど深く考えられており、日本の将来についても真剣に憂えておられることを知り、私は自分の考えの狭く小さいことを痛感いたしました。学生として、国の内外の情勢などに広く目を向けねばならないといわれ、本当にそうだと気づくありさまでした。よく「本をたくさん読め」と言われ、実際にどんな本を読んでよいやらわからなかったのですが、小柳先生の十七条憲法の解説などを聞き、祖先のすばらしい言葉にふれるため日本の古典を読みたいと感じました。

（亜細亜大学　商　一年　吉田悦郎）

本当に自分は生きていたのか

合宿を終わるにあたり一番深く痛感したことは、自分の見識の狭さです。本当に自分は今まで生きていたのだろうかとさえ思われます。諸先生方の講義、全国から集まった同じ年代の青年の意見に、張り切れんばかりの生き生きとしたものを感じ、大変恥ずかしい思いがします。しかし、これからは合宿で知った友らとともに一生懸命勉強していこうと決意しました。

（玉川大学　文　一年　河村文夫）

第十四班

じーんと胸にくる日本人としての感激

慰霊祭の時「海ゆかば」の歌を歌いながら胸がじーんとしてくるのを僕はどうしようもできなかった。涙がにじんでくるのを押えることもできなかった。僕には、「日本人とは何か」を口で説明することはできない。表現することもできない。しかしこのような感激、じーんと胸にくる思い、これこそ日本人にしか理解できない真情ではなかろうか。これこそ自分が日本人であることの証（あかし）ではなかろうか。日本の危機が叫ばれている。だが日本の青年学生の心情にこのような気持ち、言葉では表現できないが、じーんと胸にくるものが存在し、持続される限り日本は滅びないと僕は信ずる。

（長崎大学　教　二年　安東　巌）

〝すまなかった〟と友にあやまりたい

今までの自分はあまりにも先走り過ぎていたと痛感する。やたらと理論を並べて、先輩の心から国を思っておっしゃられる意見を聞いても、表面だけしかくみ取らず、その底にある心に気付かなかったのである。それでいて今まで自分は「日本を愛している」と自負していたのかと思うと情けなくなってくる。何事も理論だけではだめであり、心の底から湧いてくる何かがなければいけないのだと教えられた次第である。ほんとうに友情のきづなを結ぶために自分はどうすればいいのか、ということを班の人たちが身をもって示してくれた。今までの自分の言動が空虚に感じられていた時だけに僕はほんとうにうれしかった。「これだ！」と思わず心の中で叫んだ。先輩の真剣な態度にひきかえ、今までの自分は何と身勝手だったことか。すまなかったと現在の僕は友にあやまりたい気持ちでいっぱいである。「親友が欲しいならまず自分が良き友になれ」といわれた先輩の言葉が改めて思い出される。僕はこの合宿で人生の真の指標を見つけ得たように思う。

（九州大学　法　一年　水永正憲）

国民同胞感の体得に自信と勇気を

理想は、ただ高く掲げておくだけのものであってはいけない。それを実際に行なわなければならない。私は体で感ずる人間同士の付き合いを深めることに人生の目標をおき、その積み重ねの上に日本人同士の本当の国民同胞感を体得したい。私はそれを理想としてきた。だが自分の力は弱い。それだけに日々の生活に私の理想を体現する努力をとかく怠りがちであった。だが、この合宿でこの理想に向かって進む自信と勇気を与えられた。（富山大学　工　四年　中田一義）

「背私向公」に確信を得た

私は明治神宮外苑における学徒出陣のフィルムを見て胸が熱くなってどうしようもなかった体験があります。しかし、現実の私の生活は、そうした感動とは程遠く、安易で熱意のない状態ですごす日々の方が多かった。学徒出陣に感動する心に自分で確信がもてなかった私も、この合宿で聖徳太子の「背私向公」というお言葉で確信を持てるようになりました。私を滅すのではなく、どうしても脱却できぬ小我を脱け出そうとする努力が大切なのだと、このお言葉ではっきりわかりました。（下関市立大学　経　四年　梅谷道明）

胸打たれた真剣な話し合い

班別討論で自分の思いを素直に話し尽くすことのできなかったのは残念で、班の方々にも申し訳ないと思っています。しかし友人の真剣な話しには胸を打たれました。

（鹿児島大学　文理　四年　福寿一男）

天皇に対する考え方が変わった

私はこの合宿で物に感動する心を体験し、その喜びを知ることができた。

たとえば、慰霊祭で神を天から呼ばれる儀式では、実際に神が降りてこられたような感じがしました。また夜久先生の御講義の中で、今上天皇が終戦直後にお詠みになられた御歌

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとゞめけりたゞたふれゆく民をおもひて

を読んだ時、僕は胸がしめつけられ、涙がこぼれるような感動を覚えました。このような感動を体験したことは僕にとって非常に有意義なものでしたし、今までの天皇に対する考え方が大きく変わり、日本の民をこれほどまでに考え思って下

さっていたのだと強く感じました。

（明星大学　理工　三年　田中祐二）

心に残った十七条憲法

小柳先生の御講義を聞き、初めて聖徳太子のみ心に触れ、十七条憲法の全文を読んで、日本の偉大な文化遺産を再認識した。とくに第一条で「和を以て貴しと為し、忤ふことなきを宗と為す」という大きな理想を掲げられ、ついで現実生活を深く考えられたお言葉に示される確信のうえに立って同胞協力の目標に達しようとしたことは実に立派だと思うと同時に、国の基本法としての〝憲法の表現〟について考えさせられた。やはり憲法は日本国民の伝統と意志に基づいた文章で表現することが正しいと思う。

（鹿児島大学　法文　三年　中西和夫）

国を憂える多くの友を知り得た

今度の合宿で感動したことは方法こそ違え、国を憂えて国を少しでもよくしようとする多くの友達を知り得たことです。私はその友らを常に心に留め、友らとつながり協力することによって、今後力強く行動してゆくつもりです。

（亜細亜大学　経　二年　間庭憲一）

まごころの美しさを知った

合宿での諸先生のご講義に、私は理解できない難しさを感じていました。ただ最終日の小田村先生のお話で、それまで班別討論などを通じて考えたことが統一されるように思いました。それは「まごころ」の美しさというものだと思います。今回の合宿で、ただ一つのことでも感じ得ることがあったのを嬉しく思いました。

（山口大学　農　一年　吉田正樹）

友と付き合える喜び

友の誠意に導かれ、また新しい友を知り得たこの合宿に大きな喜びを感じています。幼年時代より今まで人と付き合うことを嫌い、一人で仕事なり、遊びなりすることが多かった僕が、この合宿で多数の人々と付き合えるようになったことを感謝しています。次回は必らず新しい友と一緒にくることを約束します。そして自分の考えに自信を持ち、物事を真剣に考える態度ができるようになりたいと思っています。

（鹿児島経済大学　経　三年　三園敏則）

第十五班

心と心の触れ合いに感激

昨日の私の日記にはこんな文字が大きく書かれています。〝心と心の真の触れ合いに感激〟と。私は私達の大学の学生こそこの合宿に参加すべきだと痛感していますが、学校へ帰ったらこの合宿のすばらしさを月刊誌に発表したいと思います。中学、高校で学んだ講義はすべて理屈づめで組み立てられた理論であるのに対し、今回の講義は強烈な精神から出た理論のように感じられました。

五日間で人生、真理を探求しあった心からの話し合い、私の心にひしひしと迫ってくる内容の充実した講義を聞いた喜びとレクリエーション、登山等の楽しさが泉のようにこんこんと湧き出てやむことを知りません。それらは明日への原動力として私自身を絶えず激励してくれることでしょう。

（防衛大学校　二年　太田文雄）

和歌が忘れられない

常日ごろ、過去に生きた人々の心を思って、新しい歴史の建設者になってゆかなければと考えていましたが、先生方がよんでくださった和歌が強く心を打ちました。名越先生や西川さんなどの和歌も心に残って忘れられません。また小田村先生が祖先の御霊に真剣に仕え、日本の現状と将来を憂えていらっしゃるお姿に接して、私も力強い青年になってゆかねばならないと決意させられました。

（九州大学　医　二年　猿渡良平）

観念的平和など実につまらぬもの

僕がいままで接したことのない意見が次々に諸先生から、友達から出てきて、自分の考えの甘さが痛感された。自分と非常に異なった意見をうのみにすることはできないが、それらの意見を参考に自分の考え方を検討してみたい。

たとえば〝平和〟の問題にしても、いままでの観念的平和など実につまらぬものであることがわかった。人間の奥深い情を信じて、理想の平和な世界を作りたいという気持ちをすてたわけではないが、そこに「厳しい男らしさ」が必要であるということ、ある場合には「武」も必要であることを実感としてもった。

合宿で十五班の一員として心おきなく行動出来たことと韓国の学生と親しくなれたことに、とくに強い喜びを感じている。

（東京大学　理Ⅰ　一年　田代民治）

頭の中で整理ができつつある

いまの私にいえるのは、この合宿にくるまで、漠然と頭に入っていたものに、ある分類ができつつあるということです。政治や経済、思想問題などについて頭の中で整理ができつつあります。トインビーのいった「次の歴史は東洋より生まれよう」との言葉が胸に響いてくるのです。私はいま同じ班で生活を共にした友だちに「楽しかった。ありがとう」と告げたい。厳しさの中で結ばれた男同士の友情は今後とも永く続くだろうし、続けるよう努力していかなければならない。

（九州大学　法　一年　小山達生）

正確な表現ができるようにしたい

自分の心にとくに強く残ったのは、木内先生が「今や文明の転換期であり、日本は日本人本来の信頼関係の上に立った新たな政治体制を作らねばならない」といわれた言葉である。

次に、自分は思想や感情の表現があまりうまくないので、今後言葉の修練を積み重ねて正確に表現出来るようにしてゆきたい。その意味でも和歌ともっと真剣に取り組んでいかなければならないと思う。

（明治大学　政経　二年　繁永正博）

正しい心で本物を見きわめよう

僕は合宿中、班長として班をまとめなければならないということをとくに考えることもなく、お別れの日が来てしまいました。

川の水が山から海へ流れるように、ひとときも止まることなく、水たまりに低迷しとどこおることもなく一気に海に注いでしまった、そんな感じがします。

正しい心は、水の流れのように、素直に語られ、流れてゆくだけで、本物を見きわめることができるのです。すこしもあせらずに、必ず海にたどりつけるのだと感じています。

（富山大学　工　四年　岸本　弘）

本を読む態度を教えられた

私は合宿に初めて参加して、教えられ、学んだことはたくさんありますが、まず本の読み方について、今迄ただ本を乱読し、読み流していたことを反省させられ、著者のいわれんとすることを著者の気持ちになって読んでいなかったことがわかりました。本を読む時には、一字一句大切に、その文字、文章にこめられた著者のいわれんとすることを素直な気持ち

で読まなければならないと思いました。
友との付き合いにしても、今迄は表面的な妥協や外交辞令みたいなものにとらわれて、真の友情ではなかったと反省しています。今一度自分自身で考え直してみたい。

（亜細亜大学　商　四年　才川　晋）

真の学生生活を送りたい

僕はいまほんの一部分だけを見て物事を判断していたことを反省している。真心を尽くして話し合えば短時日の間でも親友とよべる友ができ、自分の考え方や心がわかってもらえることを知りました。
また僕は二年間会社に勤めていたため、社会人と同じような態度、言葉なりをつかい、真の学生生活を味わうことができずにいたが、この合宿はいつまでも心に残る思い出であり、残された大学生活を立派に送りたいと思う。

（明星大学　理工　三年　新野貴司）

胸中に燃えるファイト

合宿は初めての参加でしたが、規律正しい生活の苦しさとその中から感じた喜びは何とも云えないものでした。
真剣に御講義を聞き、友と討論し合った中から、今後の学問や人生に対する自分の態度に、よりはっきりした指針を見つけだすことができ、胸中に火のようなファイトが燃えています。

（熊本大学　教　三年　永井幸男）

〃心を尽くすこと〃を大切にしたい

自分の考えや行動に真心が伴っていなかったことを痛感しました。そしてあらゆる社会問題を利害に重点を置いてとらえる一般的風潮の中にあって〃心を尽くすこと〃を大切にしてゆきたいと思っています。

（中央大学　法　三年　野口明宏）

自分の進む道がはっきりした

今迄整理し切れず、もやもやしていたものが今度の合宿によって整理できるようになったと思う。班員や他の班の友と接して、自分の意識の低さを知ったということも自分にとって貴重な経験だった。今回の合宿で今後自分の進む道がはっきりしたように思う。

（熊本商科大学　商　三年　境　隆晴）

第十六班

自分の傲慢に気がつく

岸本さんのオリエンテーションの意見発表を聞いて、自分が傲慢になっていたことに気づきました。岸本さんが「近頃周囲の人々の暖かい思いやりを感じることができるようになった」といった言葉に、理解し合える友だちだけでなく、周囲の人々との付き合いにも心を砕かれたことを感じ取ることができ、何ともいいようのないしみじみとした気持ちになりました。

私は特定の人々との付き合いには力を入れながら、そうでない人々との付き合いについては、社交的なものぐらいに考えてきたように思います。これはまさしく、聖徳太子がおっしゃられた〝自他の二境を分つ〟ということの現われであったと深く反省させられました。

（早稲田大学　法　二年　斎藤　実）

自分の考えで解答を見い出したい

日常生活の中においても、合宿教室と変わらぬ緊張した規律ある生活と、真剣に物を考える思考態度を持続させたい。私はこれまで、他人の思想を借用して、あたかも自分の考えであるかのように装う傾向があった。しかし、真に自己の人間形成を念願するならば、自分の考え方で解答を見い出すよう努めなければならない。自分の体は他人の足で支えるのではなく、地についた自分の足で支えなければならないからである。

（九州大学　法　二年　小松大輔）

日本の美意識と西洋の合理性の調和を

僕は将来建築の仕事にたずさわるつもりです。明治になって、日本の伝統的建築が西洋の建築様式とぶっつかり押し流され、それによってもたらされた混迷が現代にも影響を与えていると思います。その混沌の中から本当に日本人の性格、心情にあったものを選び出し、それを作りあげようと思います。永遠に続く日本古来の美意識と、西洋の合理性との調和が今後の課題だと思います。

（九州大学　工　一年　内海英祐）

合宿で得たものを自分のものにしたい

私は今まで人生や学問に真剣に取り組んできたつもりだった。しかし、それは焦点のあわない近視状態であったことがはじめてわかった。この合宿でいろいろな問題や自分の進む

べき問題がはっきりと示されたような気がする。友達と心をひらいて時を忘れて語り合った四泊五日は、本当に充実したものであった。私はこの合宿で得たことを一刻も早く自分のものにするよう努力していきたい。

（亜細亜大学　経　二年　大場一知）

真の日本の精神を学びたい

私はよくアルバイトをします。またよく遊びます。だが、こうした生活は、私の心を満たしてくれませんでした。この合宿は、こうした私をむち打ってくれました。お金を多く手にし、それによって多くの物を手にする。そうした生活は私達若人の心を満たし得ないのです。若人はもっともっと掘りさげられたものを見きわめたいのです。私は真の日本の精神を学び、体得するため「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を読むつもりです。（長崎大学　経　二年　日下部　隆）

世事に無関心すぎた自分を反省した

合宿教室を顧みて、本当に自分が情けなくなった。しかし、情けないというだけでなく、自分をどうしなければならないかということを真剣に考えます。世の中の問題に対して、余りにも無関心すぎる自分がどうして日本人であるというえるか本当に反省しました。日本に起こっている憂うべきことを、ただ嘆いているだけでなく、どうしてよくするかという気持ちが湧いてこないかぎり役立たないと思います。

（玉川大学　文　一年　田中五造）

合宿で再会できるよう勉強したい

この合宿に参加して自分の勉強の足りなさ、いいかげんさがわかって、非常にみじめに思っています。夜のふけるのも忘れて語り合った友らの姿を胸に刻んで、来年の合宿でまた会うことができるように勉強したいと思います。

（中央大学　商　一年　小山吉継）

ぐいぐい引き込まれた討論

この合宿で「心の通い合い」、「真心」、「真剣さ」というものを知り得た貴重な経験は、何年たってもハッキリと想い浮かべることができると思います。またパネルディスカッションなどで諸先生方の真剣な討論にぐいぐい引き込まれてゆく自分を感じ、本当に勉強してゆきたいと思いました。

（鹿児島工業短期大学　一年　樋口義一）

一人前の日本人になりたい

諸先生方のお話を聞いても本当に自分のものになっていないのが残念です。しかし、今後は自分でしっかりしたものをつかんでいこうと思います。まだまだ駄目な自分を鍛えるため、とにかく実践し、一人前の日本人になりたいと思います。

（鹿児島大学　教　二年　水垂照明）

一人でも実行できる人間になろう

強行スケジュールではあったが、一生懸命やった後のすがすがしさを感じる。自分の思うことを言葉にして他人に伝えることは難しいことだが、今までより心をこめて伝えられるようになったといえると思う。

今後自分は、たとえ一人でも物事を実行しようと決意している。人間は情けないもので、他人と一緒に行動するときは大概のことができるが、一人になるとできないことが多い。たとえ日常の小さなことでも一人でりっぱに実行できる本当の人間、ファイトのある男になろうと思う。

（鹿児島経済大学　経　一年　有馬健二）

古典を読むことの必要さを痛感した

諸先生方のご講義を聞いてこれまで経験したことのない感動を受けました。大学での講義を、単位を取るためのものであるかのごとく錯覚している根本原因は、勉学に対するあやふやな態度にあると思います。また学生が討論する場合も、自分で考えようとせず、学者、評論家の発言をそのまま受け入れて発言し、自分を見つめることを怠っていたのではないかと思います。私がこの合宿で得たものは、先ず自分を見つめる努力を続けてゆくこと、次に、偉人や古人の表面的なものだけでなく、その心を知ろうとすることが大切だということでした。そのためには古典を読むことが絶対に必要だと感じました。

（福岡教育大学　教　二年　北山　孝）

第十七班

真剣に生命とぶっつかった満足感

きびしい合宿生活ではあったが、常にすがすがしい感情が保たれていたのは、おそらく、全国から集まった青年、学生の真摯な情熱と、それを真正面から受け止めて下さった諸先生方の真心があったからであろう。私にとっての驚きは、日

本が絶えず新鮮な再発見という形で現われてきたことだ。現在の疲労は、初めて真剣に生命とぶつかってみたという満足感に裏打ちされている。今はただ離別だけが淋しい。しかし触れ合い結び合った魂は決して断たれるものではないと信じている。

（鹿児島大学　教　四年　中俣勝義）

思い切って気持ちを打ち明けた

合宿参加前の自分は、日々の生活を真剣に過ごしていなかった。それで自信がなく、自分をさらけだすのが恐ろしかった。だが合宿生活を経るにしたがって、これでは合宿に参加した意味がない、帰っても何も心に残ることがないのではないかと考えて、思い切ってありのままの自分の気持ちを友に打ち明けた。とたんに非常に気が楽になり、自分もまた友達の言葉を相手の気持ちになって考えうるようになった。

（富山大学　経　四年　吉沢清次）

聖徳太子の御精神に学ぶ

現代の日本は、余りにも日本の良き伝統について無関心であり、また現在の日本の基礎を築いた我々の偉大な先達に対して認識がなさすぎる。現在自分がこうして存在していられるのも、これらの偉大な先達の高遠な思想と情熱と真心の賜物であると私は考えている。

私は日本の歴史を考えるとき、やはり聖徳太子が、日本の進路を決定し方向づけて下さったと思います。太子は、日本というものを失わずに仏教思想を摂取した天才的な政治家であられた。現在日本をなくさずに西洋文明の良さを摂取しようとするならば、やはり太子の御精神に学ばねばならないと思う。

（日本大学大学院　経　二年　高岡敏夫）

日本人としてやるべきことを実行したい

「罪には二つある。一つは人間としてなすべきでないことをやること。一つは人間としてなすべきことをやらないことだ」これは太田耕造先生が合宿のあいさつの中で述べられたお言葉である。僕は何もやらない、無関心であることがいい事だとは思っていなかったが、また悪い事だとも思っていなかった。しかしこの考え方は改めなければならない。日本人としてやるべきことを見つけ、そしてそれを実行しなければならない。そうしなければ僕は日本人として罪人になると思います。

（熊本大学　教　四年　高瀬邦一）

学問と人生とは同じことなのだ

四泊五日の合宿が終わろうとしている今、自分は国民同胞感というものが如何に大事であるかということを感じ、これ

からの自分は今迄の自分ではないのだと思いました。私は今迄学問と人生とは別々に論じ合っても間違いだとはいえないと思っていました。（勿論学問は人間あってのものであるとは思っていましたが……）しかしこのような考え方ゆえに他人と議論するとき、自分の知識を振り回すことだけに終始することが多かった。私は、この合宿ではじめて間違っていたことに気がつきました。同じ日本人なのだ、同胞なのだという意識で考えていくことを知った今、青年らしい真摯な態度と国民同胞感に裏打ちされた学問を学んでゆきたいと思っております。

（中央大学　法　四年　長尾光雄）

語り合って通い合うものを感じた

今までで一番楽しい合宿であった。もともと人と話すことが嫌いで、煩わしいとさえ思っていた自分が、今度は自然な形で班にとけ込むことが出来た。人と語り合って通い合うものを感じ得たことはうれしかった。いままで心を通わすこともなく、すれ違って来た多くの人があったことを思うとまことに残念でたまらない。

（鹿児島大学　文理　四年　黒木清亜）

自分の気持ちを伝えられなかったのが残念

今度の合宿は、実に早く過ぎ去ったような気がする。第一日、第二日目のことなどなにか遠い昔の出来事のように感じられてしかたがない。昨夜遅くまで友と語りあったが、友の天皇に対する気持ちを十分にくみとり、自分の気持ちを正確に伝えられなかったのは心残りである。いまはただ心身ともに疲れている。快よい疲れではあるが……。

（九州大学　経　四年　片岡　健）

心の触れ合いを感じ自信を持った

人生、学問、祖国等について真剣な意見を聞くことが出来たことは有難かった。またお互いに心の中をさらけだして語り合い、〃心のふれあい〃という最も大切な経験を得て、人生に対し自信を持ちました。

（国士館大学　政経　四年　荒塚国男）

第十八班

真心の交流の素晴らしさ、美しさ

私はこの合宿で人間の心ほど美しく、純粋なものはないと痛切に感じた。集団生活の中ではともすれば他人の気持ちを無視して、自分だけ認められようとする強い心が働きがちです。これは個人の持つエゴイズムを正当化しようとする人間のずるい一面の現われであって、そういう集団では魂の触れ合いは不可能です。この合宿で、私はいい加減な妥協を許さない、かといって他を無視するのではない、まごころの交流の素晴らしさ、美しさというものをしみじみ感じました。

（鹿児島大学　教　四年　岩屋秀男）

体験の重要さを学んだ

この合宿に参加して、根本的な問題を投げかけられたような気がします。現在日本が直面している問題、隣人と接する態度、学問の学び方等、具体的体験の重要さ、また他の大学生との接触によって、友達の置かれている立ち場を知ることができたのも大いに参考になった。

（亜細亜大学　経　四年　鳥海利明）

日本文化の尊さを教わった

この合宿における最大の喜びは、人生を深く考える友にめぐり合えたことでした。また、常に大きな視野をもち、多方面から物事をみつめることがどれほど重要であるかということを学ぶことができました。さらに和歌や講義などを通じて日本文化の尊さを教えていただいたことも忘れられない。遅ればせながら、私も先人の書をひもといて勉強していきたいと思う。

（順天堂大学　体育　四年　田中誠一）

連帯の糸に結ばれた

真剣で真面目な人達に接し得たことは何にもましての喜びであった。生きていく上の根本的な問題である人間関係はどうあるべきか、これまで自分は他人との間に絶対的な断層があると思っていた。しかしこの合宿で真剣かつ真面目な人達との間に一つの連帯の糸に結ばれたような気がした。

和歌の御講義に接し〝まごころ〟に触れたということは私にとって大きな収穫であった。私は人間関係で最も大切なことは〝まごころ〟をもって接することであるということを身をもって感ずることができたのである。

（早稲田大学　文　四年　柳井鉱一）

自主的に物を考えさせることに共感

この合宿の根本思想が右寄りのものではないかという気持ちを持っていたが、この考えは完全にひっくり返され、とまどっています。この合宿の趣旨である〝共に学び共に語ろう学問と人生と祖国を〟というスローガンの背景に、一つの考え方を強要せず、自主的に物を考えさせようとしておられることを知り、強い共感を覚えました。

私はまだ本当に天皇とか祖国とか祖先のみ霊というものがわからない。天皇を尊敬し、祖先のみ霊に頭を下げるというところまではゆかないが、いつの日か私も天皇を敬愛し、祖国を愛することができるのではないかと思っています。

（鹿児島経済大学　経　四年　本村健三）

正道のあることを知らせよう

私はいかなる種類のマルキストでもないが、多くの人々が現実を逃避しているのに対し、マルキストたちは自分の信ずるままに行動していこうとしていることを学びたい。それ故に彼等は別の意味で憂国の志士なのだと私は考えたいがそれらの人たちは間違った道を歩んでいるのだから、こちらの方に、本当の正道があるということを知らせてほしいのです。山男ならば、友が遭難しているのを見て座視することができないと同じように。（日本大学大学院　経　二年　内藤　勝）

人生の方向が決められた

この合宿で自分は人生の方向が決まり、すこしも躊躇せずに突進できる姿勢が与えられたと思う。そしてこれまで得た多くの友人、先輩とともに同じ目的に向かい、手をとり合って進んでゆくことが出来ると信じる。日本人の心情が一日も早く呼び戻され、同胞感が回復されるよう念じつつ、来年からは教師になって生徒に接してゆきたい。

（鹿児島大学　教　四年　田淵勝次）

自分の言葉で思想を表現したい

合宿の終わった今私は何かを言い残したというような気持ちがしない。何かすっきりしたさわやかな気持ちである。私は思想とは私の生きてゆく心の姿勢であり、借り物でない自分の言葉によって表現されねばならないということを感じている。

（九州大学　法　四年　春藤純生）

合宿体験を一生の信念としたい

お互いに心をさらけ出して、合宿を悔いるところなく終えることが出来たことは、今迄の生活の中で最も有意義な価値あるものだったと思う。今後ここでのあらゆる体験を、残された学生生活に生かすとともに将来一教師として一生の信念としたい。

（熊本大学　教　四年　堀切勝之）

楽しかった腹を割っての語らい

参加第一日目の自己紹介の時など緊張のあまり顔色が青くなったほどであった。しかしさまざまの大学の友達と数日を共にして話し合いの場を得たことは何よりも得難い体験であった。合宿生活、団体生活の経験に乏しかった私にとって、共に腹を割っての語らいはまことに楽しいものであり、日頃尊敬している西郷隆盛の著者である林房雄先生に班別討論で思いがけずお話していただいたのも仕合わせでした。諸先生方の国を愛されるご心情は、私のこれからの生き方に徐々に影響をおよぼしはじめると思います。

（国学院大学大学院　神道　一年　中地丈夫）

第十九班

（女子班）

くずおれない心の持ち主になりたい

初めて班長という大役を任され、最初のうちは何だか怖しいような、自分の気持ちも整理されないままに、自分の不安な感情を打ち消すのに精一杯でした。でも閉会式を迎えようとしている今、協力して下さった班員の一人一人に、心から感謝したいと思います。いろいろと不安の連続でしたが、拙いながらも班長をやらせていただけて本当に良かったと思います。胸が一杯で、涙があふれ出そうです。

余り感動しない、というより感動してもそれをそのまま表に出すことを避けようとすることがよくありました。何か自分の素直な気持ちを押し殺そうと、変に強情を張ることが度々でした。しかし班長として、一人一人の心の中まで理解しようと一生懸命になればなるほど、自づと自分の心の中まで洗われていくような気がしました。人の心を知ろうと努めると同時に、自分の気持ちが整理されていくようでした。

この合宿でのいろいろな経験を生かして、一人の強い女性になりたいと思います。何か自分の上に起こったとき、そのときは動揺してもよい、けれどすぐ立ち直れるような本当の意味でくずおれない心の女性になりたいと思います。

（学習院大学　経　三年　小田村静代）

日本人としての自覚を作りあげたい

この合宿を通じて自分の心に響いたことの一つは、小田村先生の〝宙に浮いた、物の考え方をなくそう〟というお言葉でした。現在までの自分のことを振り返ってみると、事実をはっきりと把握せず、どちらかというと、観念的な物の考え方をしていた点が多分にあったのではないかと反省させられました。また他の先生方の御講義からも同じような思いを再三再四感じ取り、この私の反省はますます確かなものになっていったように思います。

もう一つは〝自分は日本人である〟というはっきりした自覚がなかったということです。今後その自覚をどういうふうに心の中につくりあげていくかが、私にとってこれからの課題であると思っています。

（鹿児島大学　法文　一年　高山由姫子）

涙がこみあげるような感激

昨年の合宿では自分の感じていること、思っていることを伝えることができませんでしたけれども、皆が私の話すことを一生懸命に聞いてくださったことがとても嬉しかった。そして今年はどうやらこうやら自分の感じていること、思っていることを伝えることができ嬉しく思っています。また今上天皇の御歌の御講義を聞き、陛下の国民を思われるお心に触れることができ、涙がこみあげるような感激を味わっております。

（共立女子短期大学　文　二年　山田苑枝）

何か一つでも心に留めておきたい

多くの講義を短期間に聞けたことを有難く思うと共に、多方面にわたって考えざるを得なくなったことが本当に苦しかった。この合宿を、これまで深く考えず、事実を知ろうとすらしなかった生活から脱却する転機にしたいと思う。全体意見発表を聞いていると、「この合宿でこれからの学生生活、人生をいかに生きるべきかがはっきりした」とおっしゃる方が多かった。こんな方が本当にうらやましく思えた。私はまだ、祖国を考え、見つめていくために、またもっと広い視野から物事を判断するため、さしあたって自分のしなければならないことは何かをつかもうとしている段階である。現在ではまだ私の心の整理ができていないけれども何かが出てきそうな気がしている。環境が変わると感激を忘れてしまいがちな私であるが、何か一つでも心に留めておきたいと思っている。

（岡山大学　教　二年　孝忠加津子）

真心からほとばしり出たお言葉に感動

この合宿で身をもってわかったことは、まことの心から発せられた真の言葉は必ず相手の心を動かすものであるということです。まるっきり無知といっていい自分がなぜあのようなむずかしい御講義に感動できたのか。それは先生方の真心からほとばしり出たお言葉があったからだと思うのです。物事に真剣に取り組み、真心からでた言葉によって真の心の触れ合いができるのだということが、ひしひしと身にしみて感じられました。今まで自分のことだけしか考えることができずにいた自分が非常に恥ずかしく思われます。

（日本経済短期大学　経営　二年　沓沢千津子）

日本人に生まれた幸福

今まで経験出来なかったいろいろのことが経験出来ました。友と話し合ったりする時も、今まで感じなかった何かしら暖いものを感じました。これは真心のこもった言葉だったからでしょう。今まで全く知らなかった友とも一夜のうちに気心が知れ、なんでも打ちあけることが出来たのはほんとうにうれしいことでした。また一日一日を真剣に生きてゆかなければならないと身にしみて感じました。夜久先生の御講義を聞き、天皇陛下が国民をいつも思っていらっしゃることを知り、ほんとうに日本人に生まれて幸福だとつくづく感じました。

（実践女子大学　文　一年　青砥道子）

この感動を無駄にしたくない

他人に詰問された経験がなかったので、私が不用意に出した言葉について注意を受けると、荷物をもって帰りたいほど友が恨めしくなり、自分が情けなかった。自分の思うことを素直に秩序だって話せる友が羨しかった。心残りであるけれど私は心を開けなかった。

世評をうのみにして、ある先生をコチコチだと色めがねをかけてみていたことが恥ずかしい。この合宿の先生方のお言葉にこめられた祖国日本を真剣に思っていらっしゃる真心に胸がふるえ、先生のお姿がかすんでき、涙がこみあげてくるのをどうしようもなかった。果たして今まで、こんなに私の胸を打つような師にめぐり合い、また接したことがあったろうか。この感動を決して無駄にしたくない。身近な国語問題、母親の責任の重大さをいかに皆がまじめに考えているかということも知った。

（鹿児島大学　教育　一年　厚地順子）

祖先や祖国に無関心だったことを反省

私の今までの生活では得られなかった貴重な体験をしたという気がします。オリエンテーションでの「真剣に生きよう」との友の言葉に胸を打たれてから五日間、ただ無我夢中でした。先生方の御講義をお聞きするたびに、自分の不勉強、無知を思い知らされ悲しくなり、日本人であるのに陛下や祖先の真心、さらには私の生まれた祖国についても無関心であったことに恥ずかしくなりました。自己中心の小さな殻に閉じこもっていた私にはどの御講義をお聞きしても、ほとんどと言っていいくらい理解できず、ただ先生方のお心の深さに胸がつまる思いでした。そして、あらゆることにあせりを感じていた私にとっては、班の方たち、国文研の先生方のお話をお聞きして涙が出てきました。うちとけられたのは三日ほどたってからでしたのに、なぜか自分の心中を素直に話せることができたのです。

（玉川大学　文　一年　今滝須美子）

第二十班

（女子班）

私はすばらしい世界に飛び込んできた

期待と恐怖のからんだなんとも複雑な気持ちで臨んだ合宿でしたが、友達の全体意見発表を聞きながら、自分がとてもすばらしい世界に飛び込んできたことを痛感しました。今日、感動をありのまま発表する友の姿に、ぐいぐい引き込まれ、いつまでもこの気持ちを続けたいと思いました。感動とは、こういうものでしょうか、涙が知らず知らず流れてきます。わずか四泊五日の友達だけど、ずっと昔からの知り合いのような私達。〝自分で求めなければならない、自分から心を開いて友達に接していかなければならないのだ〟ということを悟りました。もう一つ、自分の心の真実を話すということのむずかしさ、自分の心に忠実であろうとする精神的な苦しさを体験しました。（玉川大学　文　一年　金井ゆみ子）

思いやりをもって人に接したい

小田村先生は最後に「友達に対して偉い人だと思うと自然に尊敬の念が出てくるし、またそのような人に対して尊敬の念を抱いてもよいと思う」とおっしゃいました。そして、その

ような人々が私達の真の友人となりうるであろうと述べられましたが、そのことがいよいよ自分自身の心で感じられるような気がしています。私達は〝友人〟ということを余りにも安易に考えていたのではないでしょうか。友人とはいかなるものかについて真剣に自分自身の心に問うことが、人と人との付き合いをさらに深味のあるものとするように思います。

諸先生方の講義の内容もさることながら、お話をなさる時の態度に、いつも私達学生に対してあたたかな思いやりのお心を感ずることができました。そして、尊敬できる人というのは、あらゆる面において思いやりを失わずに接する人をいうのではないかと感じます。と同時にそのような心の姿勢で常に物事に対処していくことがいかに難しいことであるか、しかもそれが人生においてどんなに大切なことであるかを実感しました。

（早稲田大学　政経　四年　河原倫子）

湧き上がる日本に生まれた喜び

初めての参加で、はじめのうちは身も心も緊張してしまって、先生方の御講義のひとことをも逃してはならぬと固くなっていましたが、次第にその中に一貫して流れる心がわかるようになり、微かにほっとした気持ちを味いました。

和歌を通じて、古人の心が自分の胸にひしひしと迫ってきたときの感動はいい尽すことができません。また、自分というものから全く抜け出られて日本国民に深い慈しみの心をお持ちくださる天皇様のことを知るにつけ、つくづくと日本の国に生まれたことに誇らしい喜びの湧き上がってくるのを感じます。自分ももっともっと素直な清い心で生きたいと思います。

（岡山大学　教育　三年　三宅教子）

きびしく自己を鍛えたい

班別討論において痛切に感じられたのは、余りにも現在の自己に甘んじているということであった。それこそ井の中の蛙の如き自己に気がついたからである。友のしっかりした考え方、意見にはただただ敬服するのみであった。これを機会にこれからは、できるだけ自己をきびしく鍛えねばならぬと決心した。

（鹿児島大学　教　四年　上熊須とし子）

この感激を持続してゆきたい

あまりにも感激することが多かったからでしょうか、今の私は心の整理ができていない状態です。帰りの汽車の中で、あるいは家に帰って一人になってから、じっくり考えてみるつもりです。混沌とした心に、はっきり浮かび上っていることは、国家について、学問について、人生についてこんなにも真剣に取り組んでいる方たちのいらっしゃったことを知っ

た感激です。大変むずかしいことでしょうが、この感激をいつまでも持ち続けてゆきたいと思います。

（共立女子短期大学　文　二年　寺田和子）

さわやかな気持ちで帰宅できる

心の中に焼きつけられた四泊五日の合宿―さわやかな気持ちで帰宅できることをたいへんうれしく思います。阿蘇での体験を生かして、これからの毎日を真剣に送っていきたいと思います。人と人との心の触れ合い、何んともいえない温かさがじんと伝わり、本当によかったと思います。

（三重高校事務職員　幡掛和子）

貴重な体験を生かしてゆきたい

和歌を通じて真心というものがいかに重要なものか考えさせられました。小田村先生の「人間であると同時に日本人である」ということは考えさせられたすえにようやくわかってきました。私にとって、この合宿は生涯忘れ得ぬ思い出となり、この貴重な体験をこれから生かしてゆきたいと思います。この合宿で得た人との接し方、自分の生き方を実践してゆきたいと思っております。

（山脇学園短期大学　食　二年　宮崎恵美子）

素直な気持ちで母に学びたい

合宿に参加して、私の物事に臨む態度がどうであったかを顧みますと、家庭生活ではまず母に大変申し訳ない気持ちでいっぱいになり、悲しくなってしまいます。母が日常の躾（しつけ）、学問、裁縫などを教えてくれる時、私は自分の気のむくものであれば受けいれますが、そうでないと母の意を踏みにじっていいかげんに聞き流し、心にとめようとしなかったわがままな態度が悔まれてなりません。私が母に対してこのような気持ちをもつのも、この八年間父亡きあと母一人で私達兄妹を育ててくれたことを思うからです。しかし、私達が成長した今、母のこれからの生きがいを考えますと何かしら胸に迫るものがあります。

この合宿で木内先生を囲んでの女子班の討論会の際、これからの母を力づけられるのは、私が素直に母に学ぶということだけだということがはっきりわかりました。それをもっと早くわかって実行していたらどんなにかすばらしいことでしょう。

私は今母との例一つをとって書きましたが、この真心のこもった態度が、ものに向かい学ぶ態度だと思うのです。

（鹿児島大学　法文　一年　内倉良子）

第二十一班（女子班）

この感激を持続し、友や家族に伝えたい

かつて私はことばという手段による限り、人と人の心は絶対に通じ合うものではないと思っていた。しかし、それはその人が、自分の心を相手に伝えるのにどれ程熱意を入れているかにかかっているのだと知った。相手の立ち場にたって、一体今何を言いたいのかをわかってあげる思いやりが大切です。年令や国情や言葉の違いを越えて、人間同志はこんなに理解し合えるのです。まして同じことばを使う日本人に、私がここで得たことを伝えられないことがあろうか。合宿を終え、おそらくこの感激を持続するのは苦しいことかもしれない。現実に負けそうになるかもしれない。しかし、合宿で得たことを早く自分のものとして、友人や家族に伝えていきたいと思う。

（玉川大学　文　一年　小藤洋子）

人のため国のために役立つ人間に

参加する前には、いろいろ迷うことも多かったのですが、四泊五日の合宿を終えた今、参加してほんとうによかったな、という気持ちでいっぱいです。何よりもうれしいことはよき師とよき友を知ったということです。またそのことによって自分が少しでも今までの「自己中心」から進み出た考えを持てるようになったことです。和歌をつくる喜びを知ったことも大きな収穫の一つです。ほんのささいなきっかけで参加した合宿なのに、いまこんなにも私を感動させ、こんなにも私の心を震わせているのかと思うと不思議な気がします。少しでも人のため、国のため役立つ人間になりたい。こんな自分に心から喜びと生きがいを感じる日本女性になりたいという気持でいっぱいです。（鹿児島大学　教　一年　武島延子）

さわやかさと喜びでいっぱい

この五日間、緊張と苦しみの中にひたすら直き心を持つことが救いであると思い、心をこめて精いっぱいやりました。全力を尽くして真剣にやれば、必ず道は開けるものです。そういう気持ちを友もわかってくれ、親しい、そして厳しい語り合いができて、今はそのさわやかさと喜びでいっぱいです。日常、このような素晴らしい、日々を持つことはできないかもしれません。しかし、自分がどんな立ち場に立たされようと、この合宿で学んだことがきっと私を支えてくれると思います。ともすれば、もろくくずれて行きそうになる自分の心を、もっと強く鍛えたいと思います。

（東京女子大学　文理　四年　梅田咲子）

力強い真実の姿勢を与えてくれた

私は今、言葉には書きあらわせない程の深い感動と、その感動を味わうことの出来たよろこびを、身体全体でしみじみと感じております。小田村先生が最後に「心身を打ち込んである事をした時、それが遠いことのように思われもし、また一瞬のことのようにも思われる」とおっしゃられたお言葉が本当に実感できたようです。そして、この合宿のスローガンである「共に学び共に語ろう、学問と人生と祖国を」という言葉が鮮明に思い出され、私の胸の中にいつ迄も生きていくことと思います。あの大阿蘇を背景に、するするとあがりはためいた日の丸の旗とともに。これから世の中に出ていくにあたって、力強い真実の姿勢を与えてくれたこの合宿に参加出来たことを心から感謝しております。

（西南学院大学　文　四年　古川慶子）

今何が出来るかを考えてみたい

聖徳太子の十七条憲法や防人の歌などをお聞きして国のため、公のため自分自身の悲しみや私情を乗り越えて雄々しく生きてきた人々の心を感じた。慰霊祭の時、その人達と直接お会いしているような気がして、涙がこぼれそうになった。私の今立たされている立ち場で何が出来るか真剣に考えてみたい。「背私向公」―観念的なものではなく、一つ一つの行動に現わしていけるようになりたいと思う。

（九州大学　薬　二年　浜田博子）

和歌の素晴しさに接し得た

合宿当初、祖国を心から敬うためには和歌の道があると教えられた時、どうしても納得がいきませんでした。しかし諸先生、先輩方の真心あふるる言動の中に、本当に素直な人生に対する真剣さを見い出すことができ、その真心の表現である和歌の素晴しさに、初めて接することができました。この五日間は感激の連続であり、自分の心の狭いのに気がつきました。この感激を少しでも多くの友に、私なりに努力し伝え、反映させてゆこうと決心しております。

（法政大学　文　一年　白鳥佐千子）

日本女性の道を正しく進んでいきたい

私はこの合宿で今まで自分が考え、してきたことが末端にとらわれて大筋をつかんでいなかったこと、広い視野に立って物事を見、考えることが本当に大切だということがわかりました。

日本の社会で女の人が占め得る場において、女性は女性としての道を正しく進んでいかなければならないと痛感しました。合宿で体得したいろいろな体験を思い起こし、今後人生を生きていくうえで、この感激や教訓を生かしてゆくように努力すれば、それだけでこの合宿にきた意義があったと思っています。（共立女子短期大学　文　一年　島田寿子）

常に学問を怠ってはならない

不安をいだきつつ合宿に参加しましたが、こんなにすばらしい体験をしたことをほんとうに幸いに思います。諸先生方の御講義を聞いて、ときには理解に苦しむこともありましたが、私自身にとって大きな収穫だったと思います。人間は常に学問を怠ってはならないことをつくづく感じました。また対人関係において「真心」というものがいかに重要なものであるかを考えさせられました。

（鹿児島県経営者協会　森永貴子）

第二十二班

（社会人班）

天皇を尊敬する近代の国民を育てたい

私はこの会を全然知らなかったが、参加して本当に良かったと思っている。まず、自分のこれからの生き方、姿勢というものがはっきり決まったように思う。教育者として、これまでどんな教育をしてきたであろうか。無国籍者、無目的の人間、革命予備軍と世上にいわれる青少年を育てて来ていたのではなかろうか。自国を本当に愛さない者に、平和が守れ、国際協調ができるであろうか。もしできるとしたら、それは奴隷の平和であり、奴隷の妥協ではなかろうか。この合宿の体験を通して天皇を尊敬し、わが国の伝統や文化を愛し、美わしい風俗習慣を守る次代の国民を育てるべく、決意を固めた次第である。

天皇がなぜ尊崇せられねばならないかということについては、歴代天皇のみ心の表白である御製をよめばよくわかることを初めて知った。西洋の王侯は、石で築いた城に住んで、なおかつ殺戮の歴史を繰り返してきたのに、わが国では無防備ともいえる、御所に住まわれてほとんど災難もなかった。このことはまことに象徴的で、天皇とわが国民の心のつながりを表わしている。天皇は尊ばれ、敬われねばならないと切に思う。

（熊本県山鹿市大道中学校　中満重明）

日本の国のよさを生徒に教えたい

私は高校に勤めているが、現代の高校生が知育の面だけ強調され、人間としての生き方というものについて全然といっ

てよいほど教えられず、どうかすると天皇制反対、偽りの平和主義などの考え方をいつのまにか身につけているのをみて暗膽とした気持ちになる。

一方同僚の教師の中に日教組の方針に従っている人がいるし、その人達が主導権をとっているのをみると、自分のような青二才の考えていることの方が間違っているのかと不安になり、自信を失いがちであった。しかし私は合宿を終えてやはり、自分の考え方は、未熟ではあるが正しかった。少なくとも大きく迷って道を誤ることはないと断言できるだけの自信をもつことが出来た。今の私の心の底に湧き上がっているよろこびを何と表現したらよいのか。これからは折にふれて生徒たちに日本の国のよさをわかりやすく教えてゆきたい。

（福岡県立香稚高校　田中利一）

ひとしお身に泌みる教師の責任の重大さ

最も苦手で敬遠していた和歌が実は、私の属している研究会の本年度の研究テーマ「日本を知る」の問題を解くカギになることを知った。万葉時代の古人の歌が、現代人の心を打つこと、また歴代天皇の御製が「まごころ」の表現であること、つまり日本人のもつ伝統的な「まごころ」を知ることができたことはまことに有意義でした。また鑑賞するだけでなく、創作することがどれだけ大切なことかがわかりました。

若い学生と接し、新しい祖国のいぶきを感じとることができてうれしい。ほとんどの参加学生が新しい学問の方法を学び真剣に生きようとしている姿を見るにつけ、教育の大切さがひとしを身に泌みてくる思いで、私達教師の責任の重大さを改めて感じた。

（熊本市立京陵中学校　田辺隆秀）

こみあげてくる使命感

私が何を為すべきか、どう処すべきかをこの合宿で学んだ。歴史に触れ、古人の魂に触れ、教師の深い真心と憂国の念に触れることにより、こみあげてくる生命の充実感と人生の使命感を覚える。この自分の感動を友に伝えたいと思う。

（高千穂相互銀行　松田夏哉）

日本人としての目標に向かって前進しよう

今日まで自分は、日本人としての目標をもたなかったが、この合宿で日本人として同一目標をもつことができ、それに向かって前進しようという決意を固めることができたことが何よりの収穫であった。また万葉の歌や歴代の天皇の御歌をよむことが、いかに大切であるかを知ったのも大きな感激であった。

講師の先生方から多くのことを教えて頂いたが、本当に知

るためには自分が理解したことを、現実に生かす創意と叡知が必要であると思う。だから諸先生方から教えて頂いたことを、自分の職場において目標を見失うことなく勇気をもって現実に対処したいと決意している。

（熊本市立春竹小学校　西川康徳）

韓国学生に圧倒されるような思いがした

班別討論で韓国の学生諸君を迎えて話し合ったさい、韓国の人々が如何に国家意識、民族意識に燃えて国家建設に努力しているかという生き生きした言葉に接し、何かこちらが圧倒されるような思いがした。「反共道徳」が学校教育の中の大きな柱を占めているという、はっきりした国是にいたく感心した。

日本の伝統を忘れ、戦後の風潮に流されて生きる喜びさえ失おうとしているとき、古人の偉大な言葉に触れるとともに尊い文化遺産を受け継ぎ、将来の日本を背負う子供たちの教育にあたる者として何か大きな力と勇気が与えられたことを喜んでいる。

（熊本市立城南中学校　夏野憲章）

心の底に湧き立ってくるファイト

韓国の学生たちと討論したとき、この人たちが目を輝かせて日本のよい所を受けとめ持ち帰り、友達に語り伝えようと耳そばだてているのをみて、心を打たれるものがありました。私もこの人たちを見ていて、良き日本人として良き国をつくってゆく礎とならねばと感じました。明日からの仕事に一段とファイトを出して立ち向かっていく気持ちが心の底に湧きたってくるのを感じています。

（入江興産株式会社　宮崎　肇）

強く正しい子弟教育に心血を注ぎたい

初めて合宿に参加して、先ず第一に、いかに自己の勉強が浅薄であったかを痛感させられた。学問と人生についてはよく討論する機会はあるが、祖国について語り合う機会は、過去海軍兵学校で学んだ時以来初めてであり、先逝きし同期の諸兄にも、誠に申し訳なく断腸の思いである。

この合宿で「日本の将来の方向づけについて」、「今後の教育信念について」などの問題に関して、何かその核心になるものを見出したように感じる。

今すぐ理解出来るものではないが、心強き友の支えと尊き、

師の導き、また自己の研鑽により、日本人としての世界観を打ち立て、より強くより正しい子弟教育に心血を注ぎたいと思う。

（八代市立第一中学校　林田忠義）

祖国の前途に明るさを感じた

今迄、各地に起る大学騒動等により、学生にいだいていた不安も、各大学から参加した真剣な学生に接するに及んで、非常な頼もしさを感ずると共に、祖国の前途に対して明るさを感ずるようになった。この合宿で学び、つかんだものを合宿が終わって、各自の大学に、あるいは職場に帰っても持ち続け、さらに隣人に一人でも多くこの心を伝えて行くよう合宿に参加した全員が心掛けたい。

（福岡県立八幡西高校　村田英雄）

学問は生活態度の中にもあるはず

本合宿教室の根本思想が、企業体にも通ずることに心強さを感じた。スリッパのぬぎ方や講義を聞く姿勢の中にも学問はあるのであって、何もそうむずかしい高い処にあるものばかりではない。諸講師も学問は自分自身にあり、生活態度にあると、実にわかりやすく教えられたにもかかわらず、乱れたスリッパを揃える人は少なかったし、講義を聞く態度もあまり感心できなかったように私には思われる。今後、私は企業体の中に生活態度の厳しさと規律を確立するために努力してゆこうと決意している。

（宮崎トヨタ自動車株式会社　蔵満寅夫）

祖国日本の繁栄を祈念

四泊五日の間に多くの良き師に接し、多くの自信あふるるひとみの学生に接し、語り、聞き、学び、祖国日本の輝かしい伝統と文化について聖徳太子の御心、万葉の心など日本の良さを改めて自覚し、いかに生くべきか、その基本的姿勢を確立させていただき深く感謝する次第です。祖国日本がますます栄えることを深く心に祈念し努力する所存です。ありがとうございました。（熊本県植木町立山本小学校　松永公保）

第二十三班

（社会人班）

合宿の成果を生かして勉強してゆきたい

まったく緊張の連続だった。しかし、現在の心境は参加してよかったという一語につきる。私は教師として一応の信念は持っていたつもりだが、何か一沫の不安もあり、ひそかに悩んでいた。それがいますっきりとして、新しい勇気が湧き

出てきたような気がする。この気持ちを一層確かなものにするため、この合宿の成果を生かしながら、今後も勉強を続けてゆきたい。そして私の本分である教育の道に精進し、次代をになう国民の育成のために微力を尽くしたいと思っている。

（熊本市立湖東中学校　加賀山興隆）

情熱をかきたてられた

誠意あふれる諸先生方の御講義を拝聴し、ともすれば迷いがちな私に、日本人として人間として進むべき道をお示し下さり、明日からの生活の支えと生きがいを与えていただいたことを感謝しています。若人のいぶきの中に、すくなからず郷愁を感じると同時に、情熱を強くかきたてられました。

（八代市立第二中学校　村上正孝）

悩みがいっぺんで吹き飛んだ

日本人として生きてゆくために、私達が心がけねばならないことを友と一緒に語り合い、また師に教えをいただいたこの合宿教室は初めての経験であった。

聖徳太子の御精神を学び、歴代天皇の御歌をよむことにより、真の歴史を学びとることが出来るということを教えられて、私のこれまでの悩みがいっぺんにふきとんでしまい、なんともいえないさわやかな心になった。合宿で見た若々しい大学生の姿を思い出し、強く正しく生き、生徒の指導に当たりたいと固く決心した。（熊本市立白川中学校　森川　力）

教師としての使命感を教えられた

現在の私達にとって、最も要請されていることは、教師としての使命感を確立したうえで教職者としての専門的知識や教養を身につけるということですが、この合宿研修会で、その大切なものを教えられたように思います。とくに正しい人生観、世界観の追求、機械文明に対する精神文明の問題について大きな示唆を与えていただきましたことを感謝するとともに、これを契機に今後さらに深く掘り下げた勉強をしてゆきたいと思っています。（熊本市立桜山中学校　岡　徹平）

「我関せず」では国家の運命を誤らす

小田村先生は「家と国家が祖先の努力と犠牲によって受け継がれてきた」といわれました。このお言葉はとかく小市民として家のみを守り続けようとして、小さい殻の中に引きこもろうとする現在の我々に国家意識を呼び起こし、広く日本人としての同胞感を奮い立たせられた。

国家のことや政治のことは他人ごとで我関せずといった態

度が、いかに国家の運命を誤らせるかを強く感じ、何事も切実に受けとめ、真面目に考える積極的な心構えを持ち続けなければならないと思う。確固たる人生観と強い信念をもって子供の心と触れ合う教育をする。そこに本当の日本の教育者の姿があると信ずる。

（熊本県人吉市立大塚小学校　西山喜雄）

自分の心によみがえる日本民族の心

この合宿に参加するに当たって、いくらかの問題を持っていたが、私のこれらの問題に対する姿勢が非常にあいまいだったことに気づくと同時に確信のようなものが与えられたように思う。私自身ややもすれば合理主義にとらわれた生活を送りがちなことに不安を感じていたが、この合宿で遠い祖先から受け継がれてきた日本民族の心が自分の心によみがえってくる思いをいだいた。（熊本市立大江小学校　高山良策）

人を感動させるものは真心である

真に自分のものでない知識で議論し合い、結論を出そうとする余り、そこに至る過程を大切にすることを忘れていては発展は望めないのだと感じました。また人を感動させるものは単なる言葉ではなく、そこにこめられた真心あることを学んだ。これらの経験を生かすことに努めたい。

（熊本市立江南中学校　広瀬和夫）

純粋な気持ちで友らと接することができた

共に学び、共に語った四泊五日の合宿も今日で終了するわけですが、大変感動しました。それは「ウソ」のない純粋な気持ちで多くの友らと接することができたからです。とりわけ感動したのは、自由に討論できるパネルディスカッションで、これこそ民主的討論会といっても過言ではないと思います。私にとって班別討論や和歌創作も非常に勉強になりました。

（入江興産株式会社　岡本博幸）

人生に生きる基本的な態度を学んだ

諸先生、国文研および合宿参加の皆様本当にありがとうございました。共に学び、共に語らせていただき、多くの知識を得るとともにいかに生きるかという基本的な心構えを学ぶことができました。私はこれからの人生をこの心構えをもって進んでいきます。

（京都市飲食業　中川英男）

主体的な世界観を身につけたい

私は自分が今迄もっていた受け売りの知識や浅薄な考え方がはずかしく思われ、諸先生方のお話や生活態度から、深い考えと体験を通した言葉が、いかに説得力をもつものであるかを深く感じました。今後、自分自身で考え、自分の身体で体験し、主体的な世界観を身につけるよう努力します。

（熊本県八代市福祉事務所　西山敬直）

第二十四班

（社会人班）

真の自主性と真心を教えてゆきたい

夜久先生が御講義の途中で終戦の詔書にふれられた時、私は息づまり涙のこみあげる一瞬を感じました。先生と共に泣きたい気持ちをじっとこらえその瞬間を耐えていくのがやっとでした。焼けおちた町かどで、古びたラジオを通して聞こえてくる終戦の詔書を読まれる、陛下の御声に聞き入りながら、当時中学生だった私が、父母と共に涙にむせんだのを、今想い出したのです。忘れ過ぎていった二十年、今日ほど身のひきしまる感激を心の底から味わったことはありませんでした。今後この合宿で得た真の自主性と人の真心を子供達に教えてゆきたいと思います。そして、私達の生きているすばらしい日本に感謝し、祖先の偉大な文化を学び取る態度を子供の時から培い、力強い日本人を育てたいと思います。

（熊本市立託麻原小学校　北原　孝）

涙して拝誦した天皇の御歌

合宿最後の講義の中で、夜久先生が胸つまり絶句されましたが、私も呼吸がとまり涙をぽたぽた落としてしまいました。今迄にこれほど今上天皇の御歌を味わって拝誦したことはありません。日本人の魂が宿っている古典や和歌の勉強が最も重要であるということが実感され、毎日子供の教育にたずさわっている私には本当に実践できる自信と喜びを得ることができました。

（熊本市立泉ケ丘小学校　川嶋政喜）

自分の進むべき道がわかりかけた

初めてこの合宿に参加し、いままで知らなかった多くのことがわかり非常に感激しています。というのは人間として、いや日本人としての生きる道を教えられたことです。今後、自分の進むべき道は何かということがおぼろげながらわかったように思います。これらのことを教えてくださった諸先生や友達が私よりも一層の熱意と自信をもって日本の将来を語

り合っておられたことは、生涯忘れえない思い出になることでしょう。

これからは偏ったイデオロギーなどにとらわれることなく、広い視野で日本の現状を見つめていけそうな気がします。

（吉川工業株式会社　高橋秀隆）

惰眠から目覚めさせられた

夜久先生の御講義を拝聴して、長いようで短かった合宿の日々が脳裡によみがえってきた。『共に学び共に語ろう、学問と人生と祖国を』のスローガンのもとに集った青年達がかくも多きにのぼり、しかも真剣にこの合宿と取り組んだことは実に驚異に価するものであった。それは確かに、私にとっては惰眠から目覚めさせてくれる一大衝撃であったと信じます。

（鹿児島県経営者協会　池之上　卓）

合宿で得たものを友に伝えたい

働く仲間と研究会を作り勉強してきましたが、いつも感じることは真実をどうして見わけるかということでした。小田村先生、木内先生をはじめ諸先生方の御講義を聞き、私のもっている問題点をあまりにもすばらしく指摘され、お前の悩んでいることはこうだろう、そこはこのような姿勢で取り組むのだ、これが真実なのだと教えられ、ただこの身の未熟さを感じました。物事を見るのは、知識でなく心なのだ、お前の「真心」なのだというこの合宿で得たものを私のつたない口からグループに伝へ、明日からの勉強の新しい力としてゆきたいと決意しました。（東京都荒木義一事務所　吉田道雄）

合宿で得たものを子供たちにも分け与えたい

真実を希求し、真実を学ぶことはさほどむずかしいことではない。ただその真実を人に伝え、人をもまた真実に触れさせることは非常にむずかしい。それには自分自身が広く知識を吸収、消化して完全に自分のものにしておかなければならない。この点について諸先生方に心から敬服し、厚く感謝します。自分のつまらなさをつくづく知らされ情なく思うが、できるだけ勉強して一人でも多くの子供たちに合宿で得たものを分け与えたいと思う。

（熊本市立城西小学校　海野尾祐全）

教育の崩壊を救うもの

国家に対する忠誠の倫理が欠けていては教育の支柱を失ったも同然である。現在の日本の教育は日本人を言わず、日本国を言わない。国旗を軽視し、国家を否定する、まことに不

可解な教育が今日まで続いているのである。
日本の文化的伝統についての探究に努め日本精神の真髄に触れ、日本の教師としての資格を身につけなくては、国を興す教育を期待することは不可能である。教育は国の大本であり、教育正常化は国の急務である。教育の崩壊を救うものはほかではない我ら教師である。

（熊本市立東野中学校　土屋正照）

教育を再認識し、使命感を確立したい

私はこの合宿に参加して、狭い視野の中で狭義の教育しかしていなかったことを痛感した。私たち教師は教育の根底となる日本文化を理解し、真の日本人であるという観点から教育を再認識し、使命感を確立して真の教育をしなければならない。「教育の正常化」という言葉の根底は、そこにあるのではないかと思う。

（八代市立太田郷小学校　西田　豊）

もっと厳しい規律を

この合宿に参加してみて、いかにして美しい国土と日本の文化伝統を守ってゆくべきかを考え、国を憂えている学生が多いかを知り、大変嬉しく心強く感じた。
しかし、集合、消灯時間等団体生活の規律の面で厳しさに欠けていたように思う。室内、便所掃除などの仕事を共にすることによって本当に心の結びつきができるのだと思う。国土を守るために自から銃を取ることのできる若人であってほしい。そのためにはもっと厳しい訓練が必要だと思う。

（熊本県植木町立鹿南中学校　永田憲二）

研修のきびしさに良い教訓を得た

四年前の雲仙合宿参加が契機となって、日教組とは別の立ち場の教育の正常化をめざした熊本市教育研究会を結成し、現在では千二百名にのぼる同調者を得るに至った。しかし、私達の会が大きくなったという安心感で、私自身気のゆるみがあり、日本精神復興運動に対する真剣さが足りなかったことを、合宿に参加してみて痛切に感じます。国文研の先生方のあの真剣さ、午前一時、二時過ぎまで研修のあり方を検討されるきびしさに良い教訓を得ました。

（熊本市立城東小学校　貴島武之）

第二十五班（社会人班）

涙がにじみ出てきた慰霊祭

厳しい日程だったが、充実した内容に張り合いを感じ、合

宿を終えたいま、短い自己の人生に何を求めるべきかがはっきりしてきたようです。

教育の現場では、日本を考え論ずることに何か反動とか、民主々義に反する人間とさえ見られる傾向があるが、ここでは進んで日本のことを考え、古典や和歌に親しみ、班別討論では、相手の立ち場を考え、その言葉に耳を傾け、自分の心をさらけ出して語り合う中から、年甲斐もなく人間の生き方を教えられ、祖国の行く道をさらに深く考えさせられる機会を得た。またこの合宿では祖国のため若き命を捧げた同胞のみ霊をまつる慰霊祭をとり行なったが、とめどもなく涙がにじみ出てきてどうすることもできなかった。私の友はシドニーの海深くガダルカナル島、比島、中国大陸でみんな散っていった。私はそのみ霊の前に日本を守ってゆくことを誓った。

（熊本市立出水中学校　淵上久孝）

真心を知るために目を開き直そう

日本の各時代に生きた人々が、正しいものの見方、考え方のもとに国家を隆盛に導いてきた事実を知った時、先人の偉大さをうかがうことができた。今までその偉大な人間性に触れることのできなかった自分をそこに発見した。自分のこれまでの人生に深い反省を促すと同時に今後の人生に指針を与えてくれたことをしみじみと実感した。しかも、現実のきびしさに立ち向っていく力の根源となる何かを学び得たように思えてならない。真心を知るために自分の目を開き直すことがいかに大事かということを痛感した。

（八代市立八代小学校　本田逸郎）

国民的な意志の集中が必要だ

韓国の李団長と親しくお話ができて大変うれしかった（戦前私が京城にいたため）。韓国の義務教育の教科の中に、反共道徳というのがあり、反共を国是としているのにひきかえ、わが国の現状はなんとも情けない。反共をわが国の国是とせよというのではないが、国家的問題に対し、国民的な意志の集中が必要であると思う。いかなる問題に意志を集中するかについては国民がお互いに語り合い考え合ったうえでわが国の進路を一日も早く決定することが大切であろう。

（八代市立第三中学校　水本正和）

涙のにじむような感動

学校の現場では、ただ自分の信じる所に従って、それなりの行動しかできなかったが、この合宿で数多くの同志がいることを知り、非常に心強く感じました。諸先生のお教えに数多くの感動と共鳴を覚えましたが、最後の夜久先生の講義

で、今上天皇の御歌

身はいかになるともいくさとゞめけりたゞたふれゆく民を
おもひて

に触れて涙のにじむような感動を覚えました。この天皇の御心にそえる国民の一人として、私に与えられた教師の道に精進し、この感動と精神をひろげていきたいと思います。

（熊本県八吉市立第一中学校　東　千徳）

教育のあり方を再検討したい

現代日本の最も重要な課題は、この合宿のパネルディスカッションでとりあげられたとおり、憲法の問題、教育の問題ではなかろうか。林先生は現憲法を憲法とは思えないといわれたが、全く同感である。憲法と同じく教育基本法もまったくおかしい。教育勅語にかわるものとしてつくられたといわれるが、教育勅語が日本と固く結びついて発想されているのに対し、教育基本法はどこの国にもあてはまるもので、日本を愛し、立派にするようなものでは決してない。この基本法で最近まで教育してきた教師の一人として、講義を聞きながらひしひしと胸迫るものを感じた。若い大学生諸君を見るたびに申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

（熊本市立江原中学校　藤森正巳）

人生や日本を考えるのが私の課題

四泊五日間をよく耐えたと思う。合宿で語られる言葉の強さに胸を打たれ、本当に疲れを覚えた。そして学問、人生、祖国を語るに当たって、今までのありきたりの意見では通用しないことを知りとまどいを覚えた。なかなかついてゆけないところも一、二あった。だが、これまでの考え方ではいけないということがわかった。漠然とではなく、もっと突っこんで具体的に人生や日本の現状と将来について真剣に考えてみたい。これがこの合宿生活を体験した私に課せられた課題であろう。

（熊本県五木村立三浦小学校　新居　健）

ヴェトナム問題に正しい見解を持ち得た

日本の憂うべき現状を真面目に考えたこともなく、毎日を過ごしてきたことを恥しく思います。しかしこの合宿に参加したいま、物事を見る目、考え方が少しは身についてきたように思います。ヴェトナム問題にしても、その実状を知らずに、ただアメリカを批判していた自分の言動は結果的には自国の不利につながることに気がつかなかった。山本先生のご講義をお聞きしてから、ヴェトナム問題に関して私なりに正しい見解を持ち得るようになったことは大きな収穫であり、

感謝しております。　（株式会社高田工業所　上野岩男）

いままでの自分から抜け出すことができた

今回の合宿教室に参加して一番良かったことは、将来自分の進むべき道に大なる指針が与えられたことです。緊張の連続であったが、日本人である喜びを感じ、いままでの自分から抜け出ることができた喜びを今後自分の仕事に生かし、さらに日本の現状と将来について、本質をみきわめない軽々しい態度で批判することなく、正しい方向に向けるようにできればと思っています。　（吉川工業株式会社　安西雄志）

祖国愛を取り戻せた

本合宿に参加させていただき二つのことを強く感じた。その一つは現代思想の基調である広義の左翼思想の害毒から脱け出して、青春時代、台湾の戦野で、死を凝視した当時もっていた祖国愛を取り戻せたことである。今後日本人であるという誇りを胸中に、人生に処していきたい。

二つは若い学生諸君と起居を共にし、意外に堅実な態度や行動を見せられて、マスコミの報ずる現代学生像のイメージが崩れ去ったことである。しっかりした学生諸君に接し得たことは本合宿の大きな収穫であった。

（熊本市立白山小学校　柳沼貞雄）

人生の目標を見きわめる好機だった

今合宿を終了するにあたり、受付に足を運んだ時の不安は消え失せ、今までの人生になかったいくつかの収穫を得たことを喜んでおります。とくに人のまごころに触れ得たことは何よりの喜びでした。繁栄する社会の中にあって、一人一人の人間が機械の一コマとなり、日本的情緒の失われてゆきつつあるとき、すがすがしい人のまことが今もなお、この合宿の中に漲っていることに驚きと喜びを感じました。今迄の荒んだ、情緒に欠けた生活を省み、今後の人生の目標をしっかり見つめる極めて良い機会であったことを感謝します。

（熊本市立竜南中学校　石村俊明）

目が大きく開かれた

第一に感じたことは、小田村理事長の最後のあいさつにもあったように真に国のことを考え、自分を見つめ、生きる道を学ぶことができたことである。この研究会が国の発展に尽くす心構えをつくる団体であることを知り得たことは、本当に心強い。

第二に、この会は身分、職業、年令の区別なく同志として、

しかも学生青年を主体としての心の通い合う体験を体得し得たことである。国文研諸氏の周到な計画、運営、熱心な助言と道を求めて止まぬ健康で真面目な若人の姿に接し心からの安心感を覚えると同時に、教育者として発奮せねばという感でいっぱいである。

第三に、諸先生によって「大きく目が開かれた」ことである。新憲法、新教育にしても、国際情勢や国防問題にしても、今まで一方的に聞かされたり、勉強してきたことについて本当に「日本を守る」立ち場から思考することに自信を与えられた。

第四に、今まで勉強が足りなかった和歌の道について創作のきびしさ、短い歌の中に作者の真情をくみとることのたいせつさが強く胸を打ち、生きる道が教えられたことを喜んでいる。

（熊本市立大江小学校　渡辺昭平）

第二十六班

（社会人班）

・万葉集と取り組んでみたい

和歌創作に少し抵抗を感じていましたが、山田先生の和歌創作の講義を聞いて、和歌がどれほど人間の純粋な感情を歌いあげるものであるかがよくわかりました。古人の心に接するには和歌をおいてはないと思います。万葉集の名もなき歌人、防人の歌に切々たる人間の血の通い、苦しみを乗り越えていった姿が身近に感じられて、再び万葉集を根をすえてやってみたいと思う。

緊張の連続であったこの合宿の経験は、今までの教員研修になかった人生に立ち向かう姿勢を与えてくれたと思います。多くの困難に出会った場合は、聖徳太子の「和を以て貴しと為し、忤ふこと無きを宗と為す。人皆党あり……」のお言葉を思い出してやっていく覚悟です。

（熊本県菊池市立隈府小学校　富永昭二郎）

教育正常化への決意も新たに

教師生活の二十年目に朝ごとに国旗を掲げて心を浄め、学問と人生と祖国を語り合った国文研の合宿は、確かに私の人生観を大きく前進させた。

現在日本の重要課題として教育の問題があげられるが、この問題は教師の姿勢を確立することが先決である。今日の教師の多くは、階級闘争を標榜する日教組の傘下にあり私自身もその一員である。しかし、私はこの研修会の講義、班別討論から、一日も早く教育の正常化に努力しようという決意が、大阿蘇の火のように激しく自分の体内に燃えてきているのを感ずる。

日程の中に、慰霊祭が組まれたことは本当によかった。今

日の教育には、子供の精神を統一して厳粛、敬けんな心情を育てる場が皆無である。したがって落ち着きがなく粘りのない子供に育っている。これからの教育の場に精神を集中して、自然に襟を正さないでいられないといった場をもつようにしたいと思う。

（熊本県人吉市立人吉西小学校　氏川昭二）

「民の上安かれ」と祈られていた陛下

私は終戦を満州のハルピンで迎えて武装解除を受け、まる三年間捕虜として、シベリアで過ごした。当初終戦を大変うれしく思ったが、入ソ以来マルクス主義の洗礼を受け、戦争を起こした指導者をのろい、戦死した戦友を犬死とあわれみ、天皇制をも批判した。その時も今上陛下は『身はいかになるともいくさとゞめけりただゞふれゆく民をおもひて』『海の外の陸に小島にのこる民の上安かれとただいのるなり』と、われわれの身をご心配下さっていたのである。ただただ自分の愚かさに涙があふれるのみである。

この合宿で得たもの、それは右往左往していた自分の心が、きれいさっぱりと清水で洗われたようになり、自分の向かうべき道が真っ直ぐに切り開かれたことである。

（熊本市立京陵中学校　郡　保雄）

陛下のお気持ちを決して忘れまい

この合宿は戦後なすところなく、眠り続けてきた私の心を強く激しく、きびしく揺り動かしてくれました。

日の丸が晴天にはためき、各地から参集した若人たちの姿をみて、終戦当時の自分が思い出されました。戦時中、特攻隊員として終戦を迎え、何より一番に思ったことは、天皇陛下のお身の上が一体どうなられるかというそのことばかりでした。しかし、いま陛下の御歌や終戦の詔書を拝誦してまことに感きわまるものを覚えます。祖国を思われ深くご心配されておられた大陛下のお気持ちを決して忘れてはならないと思う。

（熊本市立黒髪小学校　宮田末吉）

若いエネルギーに心強さを覚えた

混迷している教育界と常日頃感じていたものの、真剣に考え語ることもせず、なすこともなく過ごしてきたことに対して、自分の不甲斐なさ、不誠実さが悔やまれてならない。清浄な教育界実現のための礎石になろうという決意が湧いてきました。久々に若い人たちのエネルギーに接し、後に続く者が多数いることに心強さを覚え、新しいファイトが生まれました。

（熊本県植木町立五霊中学校　中原哲哉）

国家のために尽くしたい

私にとって真剣そのものの五日間は悔いない研修であったと思う。教育界の正常化が今盛んに叫ばれていますが、真剣に物事を見つめる目を養い、自信をもって残り少ない人生を国家のために尽くしたいと思います。自分自らの毎日の生活がはっきりと理解された今、この体験を自らのものとして今後の人生に処していく覚悟です。

（熊本市立尾ノ上小学校　福富明憲）

合宿を機に大きく変わった自分

いま五日間の最後にあたって、多少の疲労を感じているが、時の経つことの早いのに驚かないではいられない。小田村理事長の言葉に「緊張の連続を味わったことであろう、合宿第一日目がはるか遠い日のできごとのように思われてくる…」という一語があったが、全く同感である。私は合宿前の自分と現在の自分が何か大きく変わったような気がしてならない。それは人間精神の無限性を感じるようになったし、誠心をもって日本の国のために、また人々のために微力を尽くしたいと思うようになったからである。

（熊本市立砂取小学校　山本昶光）

皇室に対する新たな感激

この合宿で精神的に得たものは数多いが、とりわけ皇室に対する新たな感激が最も大きい。終戦後から今日まで、世間の考え方は非常に大きく変化した。それに対して激しい反発も覚えないほど、自分自身も押し流されていたのではないかと思う。しかし、先生方のご講義をきくたびに涙がにじみ出てきた。とくに心を打たれたのは、終戦に際しての陛下の御製である。これを読んで感激しない日本人がいるのだろうかと思った。

（熊本県砥用東中学校　北島道治）

日本の道統の真髄に触れた

日本の道統の真髄に触れ心を洗われた気持ちがします。平素、英霊の精神をいかに継承具現するか悩んでいましたが、いま自分の目が開かれた思いです。自らもその一人である日本国民として、国のいのちの流れの中に、生き抜きたいと思います。

（日本遺族会　企画部長　板垣　正）

短かかった五日間

初めの二日間は非常に長く感じたが、それ以後はだんだん慣れたせいもあり、あっという間に五日目を迎えたような気がします。私の班は年齢の若いのは私一人で何だか説教されにきたようでした。また教員が多かったせいもあって、一般的な話しではなく、現場の、それも「教え方」などに話し合いの重点が置かれたため、私にはちよっと理解できない点もありました。青年は青年同士のほうが楽しかったのではないかと思います。次回の班編成では留意して下さるようお願いします。

（新日本協議会　神成正志）

指揮班　写真班

人の和の尊さを思いしらされた

今度の合宿では、指揮班という大役をやらせていただいた。三百三十余名もの人々を指揮したり、指示を与えたりする経験ははじめてのことであった。今後こういう機会に恵まれるようなことはないかもしれないのだから、この大役をやらせていただいたことを非常にありがたく思う。

合宿期間中は、終始運営委員の方々と行動を共にして、教えられるところが多かった。運営委員の方々は、毎夜十二時を過ぎても二時間も三時間も、合宿運営について討議されたのだが、その討議たるや、一見するところ、各自が勝手放題に文句をいい合っているようにも思える。だが、合宿をなんとかうまく運営しようという各人の気持ちは、聞いている私にも痛烈に迫ってくる。そして、翌日になれば、割り当てられた仕事に最大限の力を傾注しておられるのを見て、いたく心を打たれた。今更ながら「人の和」の尊さ、かけがえのなさを思い知らされたような気がする。そして、今回の合宿も、諸先生方や国文研の方々の思いに支えられてはじめて、うまく運営されたのだと思うと、ただただ頭の下がる思いである。

（早稲田大学　政経　四年　今林賢郁）

強く印象づけられた木内先生の御人格

今合宿は、写真班をおおせつかり、先生方の御講話の一つ一つをじっくりかみしめて聞く時間的余裕がなかったので、表面的な感想しか持ち合わせ得なかったのは残念である。

木内先生が班別討論へ参加されて、学生の質問に親切に応えておられる姿をファインダーからのぞきながら、学生の身になって考えて下さっている先生の御人格が強く心に印象づけられた。

（九州大学　法　四年　島津正数）

韓国学生団世話役

祖国韓国のために何をなすべきかを考えた

「共に語ろう学問と人生と祖国を」―ある切実さを持って何時迄も僕と共に生きるであろうこの言葉。この中に含まれている数々の思い出と緊迫感。指導される諸先生方、また真剣に学ぶ若人、それに優秀な社会人グループ。混迷する社会相の真っただ中で燃えつづける一すじのともしび。私はここにまざまざと日本本来の姿をはだで感じた。そして肯いた。私の脳裡には祖国の姿が色々な姿で、色々な感想を伴いながら往き来した。なによりも己れを整理し、何を為すべきかを真剣に取り組まなければならない。最後に韓国学生団との交りにほほえましきものがあったことを、皆様に深く感謝します。

（亜細亜大学　経　三年　金　泳国）

見学参加者

胸打たれた学生諸君の態度

この合宿は、主義主張に相違こそあれ、自分の考えを十分に述べ、討論し、そこに日本人として進むべき道を見出してゆく合宿だと思いました。以上の観点から学生諸君の態度や各班における討論はまことに真剣そのもので、我々日本人の進むべき道はいかなる道であるかを探求しているその姿に、私は深く胸打たれました。

（亜細亜大学　学生部　三谷文雄）

日本の明日を創造するエネルギー

私はこの合宿で伝統の断絶による精神の空洞化とその根の深いことを痛感しました。最近の日本の素晴らしい経済発展と政治、文化の面のアンバランスの原因は結局、日本人がその伝統文化を軽視し忘却したことにあると思う。「日本への回帰」という姿勢の中に、新たなる日本の明日を創造するエネルギーが内在するという確信を得た次第です。この合宿に参加して邂逅の意味をしみじみと味わっております。

（亜細亜大学　学生部　山本忠士）

言葉遣いと作法についての希望

国文研の若い方々のまことに献身的なお仕事ぶりに感服しました。この方々の言葉遣いと挙措について、小生の希望を申し述べたいと思います。

まず言葉遣いについて。公の場で「ボク」という一人称を

使うこととか、また敬語の使い方に間違いの多いことなど、戦前のしつけをうけている私のような中年以上の者には少なからず驚かされました。たとえば、小田村先生の敬語法の見事さを、この人たちがどうして学んでおられないのか、不思議に思われるほどです。

挙措についても、お辞儀をする時に、頭は低く下げながら、両腕はブラブラさせている人とか、基本的な作法を身につけていないことに気がつきます。まず形から入ることが、私ども日本人の昔からの修業法でした。剣道、茶道、等々みなしかりです。そして、それは私どもの先人の深い智慧のように思われてきます。

国文研の苦い方々は、やがて会の中堅として、多くの後輩に接することとなるでしょう。わが国の道統を、その精神においてのみならず、その形式においても、十分に受け継いでいただきたい。その点でも、後輩の模範となっていただきたい。その立派なお仕事ぶりとご努力に感謝しつつ、このことだけを希望いたします。

（順天堂大学医学部　助教授　鈴木満男）

受け継がれている亡き友らの意思

お若い頃の国を思う情熱をそのまま持ち続けていらっしゃる国文研の先生方を目のあたりにお見受けし、戦いに散ってゆかれた方々の激しく語られたお言葉などが次々と思い出され、その方々の御意思が立派に受け継がれている事をしみじみと感じました。

（山田美智）

民族生命とともに生きる充実感

合宿生活を通じて、集団の中に位置して生きる安心感、国家民族の生命と共に生きる充実感を、一人の日本人として日本に生まれた誇りをしみじみ体得しました。

（時事評論社　堤　真由子）

一段の発展を願って

この合宿教室に見学者として参加する機会を得て、四泊五日間国民文化研究会の方々及参加学生諸君の真剣な姿を拝見して、本当に頭の下る思いと頼もしさを味わい感激しました。常日頃から〝日本の現状はこれでよいのか〟と憂慮している一人でしたが、私も小さな規模の会社経営に追いまくられ、気持はそうでも、矛盾だらけの日々を徒らに過してきたのが現状でした。今回会社の仕事を思い切って離れて、四泊五日間の合宿に加わって、私は新たな勇気と矛盾のない生活に向って一歩近づける機会を与えられ、参加してつくづくよかったと思っています。

実は私も敗戦直後、心ある独身者・大学生諸氏と〃文化国家建設〃の一翼をと念願して、ひたすらに〃日本の良さ〃に人生をたくし、若い力を結集していろいろな活動をしたことがありました。当時の日本は、たしかに〃日本の良さ〃も〃優秀性〃も忘れていたようである。しかしその当時心配していた事が現実になっているのが、昨今の日本の現状であることは、各講師の方々のお話の中でもはっきり指摘された。この現状を打開する原動力は、なんといっても若い力、特に学生諸君であり、この合宿に参加された学生諸君が、この短いながらも充実した体験を有効に生かしてもらいたいと念願するものである。

最後に国文研活動が、その目的達成の為に努力せられるにしても、憂慮すべき方向に進んでいるいまの日本の現状との時間的な差ということも考えていただいて、有効な活動にならなければ、せっかくの目的も努力も徒労に終るおそれのあることを憂えている一人として、いまの日本のきびしい姿を思いうかべながら、謝意にあわせて、一見学者としての所感を結びたいと思います。

（千代田株式会社　代表　吉井八郎）

合宿中に創作された「短歌詠草」

――「しきしまのみち」――

短歌詠草について

合宿教室の参加者全員に短歌創作を義務づけてから、今年は八年目に当たる。今年のように三百名を越える大合宿において、しかも大部分は初心者を含む人々に、一時間程度の導入講義によって作歌させるということには、疑問を持たれる方があるかも知れない。たかだか教養講座的な趣味の養成に終わるという懸念がなくもないからである。しかし、合宿教室全体の流れの中で、短歌創作の占める意義と効果については、この十年間の経験によって、われわれはほぼ確信を持つことができるようになった。

合宿教室第二日目の夜、国文研の山田輝彦会員によって導入講義が行われた。同氏は特に現代における人間の最も大切な情意の衰弱について触れ、近代の思想史を一言にして述べれば、「理智が心情の領域を侵略してゆく痛ましい歴史である」と断じた。続いて若干の技術的な指導と、万葉から現代にいたる具体的な作品についての解説が行なわれた。特に防人の歌から戦没学生の遺歌まで、死に直面した人が、いかに「私」の世界から「公」の世界への心理的移行のプロセスを率直に、正直に表現しているかという点に中心が置かれた講義であった。この中から参加者はひとしく「まごころ」のみが万人を納得させることを、身にしみて感じとったのであった。

合宿第三日目の午後、阿蘇登山が行なわれたが、その前後五時間ほどが作歌の時間にあてられた。平均一人五首として、約千五百首ほどの彪大な歌稿が集まった。これらの作品の中から、国文研の会員十名ほどが分担して約五百首を抜き出した。第四日目の朝からプリントにかかり、午後四時からの全体講評までに、二十六枚の歌稿が刷り上がった。この事務局のスピイディーな処理は全く陰の力であったが、ともかく自分の作品を含む部厚いプ

リントを手にして、参加者の一人一人は、この合宿に積極的に参加しているということを否応なく知らされざるを得なかった。山田輝彦氏による全体講評は、いくつかの問題を含んだ歌を取り上げての具体的指導であった。そこでは、この合宿における歌の相互批評が、決して他人の弱点をあげつらうことではなく、むしろ詠んだ人の心になって考えてみる、という心の姿勢にかかわるものであることを納得せしめられた。こうして、批評の対象とならなかった大部分の歌は、夜の班別に別かれての相互批評の時間に持ち込まれ、班員相互の心の交流のきっかけを作る大きな役割りを果たしたのである。

以上によって、われわれが合宿教室に短歌創作を組み込む意図がほぼお分りいただけたと思う。繰り返していえば、まずおたがい一人一人が、自分の心に、人間らしいみずみずしい心情を奪回すること、次に自分の生活体験を正確に表現し、正確によみとる修練によって、正しい思想生活の基本を培うこと、さらに、古典への開眼のきっかけが作られること、などがあげられるであろう。特に表現の喜びを知るということは、一つの新しい「経験」の獲得でもあり、感想文の中にも、その喜びにふれて書かれていたものがかなり多数あった。

今ここに、感想文集を編集するに当たり、すべての歌についてもう一度丹念に読んでみた。勿論一回の習作の中から抜いたものであるから、幼い表現のものが多いが、この全体の歌群の中からひびいてくる生命の交響は、現代の世界で失われている最も大切なものを、改めて凝視するきっかけとなるであろう。選択の基準は、技術的な巧拙よりも、正確で率直な心情の表現に重点を置いた。

なお今度の合宿は、スケジュールの割り振りから、一回しか短歌創作が行なわれなかった。合宿の最後に執筆する感想文の終わりに、できれば歌をそえてほしいという主催者の要請に答えて、かなりの人がいい歌を残していってくれた。それらの中からも、心打つ数多くの歌が収録できたことを喜ぶものである。ご一読賜わらば幸いである。

短歌詠草（しきしまの道）

第一班

阿蘇登山にて

鹿児島大　土岐直彦

波打ちてつゞく草原の遠近（をちこち）に薄茶の牛の草を食む見ゆ

九州大　永尾貴一

牛群るる草千里ケ浜にたゝずめば小雨ふりきてわびしかりけり

亜細亜大　大塚達朗

堂々とそびゆる山を見あぐれば緑の木々にかこまれてあり

東京工大　内田厳彦

大阿蘇の草原ゆけばをちこちにのどかに牛の草をはみをり

出陣の御歌を聞きて

明治大　向田正志

御講義で読みあげられし故人（なきひと）の御歌の調べ胸にせまれり

中央大　佐藤正史

合宿の友と登れば大阿蘇の大地のいぶきひしと感ずる

長崎大　園田敏之

草千里幼きころの印象とすこしも変らず我を迎ふる

九州大　小川清

広大なる阿蘇の姿をながむればおのれの心の狭きを思ひぬ

玉川大　長谷川純一

古（いに）への人も見たりけむ阿蘇の山のその偉大さに我は驚く

鹿児島経済大　東条久

かすみたる大阿蘇の峰をふり返りふり返りつつ山を降りきぬ

第二班

長崎大　楠元佐知生

阿蘇の野にひとりたたずむ石仏をバスの車窓にみつつ祈りぬ

防衛大　大矢勝三

大阿蘇へ心はせつつ登りしが歌もつくれずバス下りゆく

慶応大　相沢通雄

のび〳〵と阿蘇につどへるわれら皆今日のよき日を楽しくすごしぬ

京都大　福島義治

童謡を大声あげて歌ひをる友の姿のすが〳〵しく見ゆ

小田村先生の御講義を聞きて

聞く度に心の洗はるゝ心地する師の君の話の有難きかな

東京大　中村隆象

日の本をわれ背負はむと思へども力足らはぬわれをかなしむ

金沢大　羽喰守秀

外輪の山々の端を赤色にうつすら染めし阿蘇の夕焼け

阿蘇の山を一人歩まれる小田村先生の姿をみて

九州大　淵本忠信

いかにせば師の御心は安まらむ己が小さきをすまぬと思ふ

亜細亜大　長谷川　賢　司

登り来て下見おろせば眼下には緑の原の広がりてあり

長崎大　熊谷　幸　雄

高原に冷たき霧の広がりて丘に動かぬ馬の影見ゆ

慰霊祭に参加して祈るとき、神風特攻隊の記録映画を思ひ出して

岡山大　斎藤　利　明

わが国を命をかけて守りたる祖国の御霊安らかにと祈る

我もまた守りてゆかむこの国を拙き力のかぎりつくして

第三班

九州大　小川　幸一郎

愚かなる己の姿顧みず言ひ張るわれをかなしく思ふ

岡山大　田中　輝　和

父母に阿蘇の集ひの喜こびを告ぐる筆跡に力こもりぬ

新しき班の友と初めてうちとけて語りあひし時に詠める

東京大　石村　善　悟

消燈の時過ぎぬれど話尽きず庭に出ててぞ語り続くる

庭に出でて語らひあへばなにとなく心通へる心地するなり

鹿児島大　東中野　修

風をきるバスの中より馬をみて大阿蘇の山に別れをつげぬ

明治大　青木　良夫

声きけばあはれと思ふ夏蟬よせめて鳴かなむいのちある日を

鹿児島経済大　山本　圭三

阿蘇山の火口のふちにたたずめばその大きさに心うたるゝ

九州大　阿南　公幸

さはやかによみ上げらるゝ歌ききて国の命をわれは感じぬ

中央大　飯田　勝一

み友らと肩くみあはせ歌ひゆく夜のつどひは楽しかりけり

おのがからすてよといはれし先輩の御言葉強くわが胸をうつ

長崎大　坂東　仁朗

討論で言葉少なき我をみて勇気をだせと友ははげます

神戸大　白坂　隆重

合宿の終れる今日の阿蘇山はくつきり浮び見守るがごと

玉川大　姫野　道夫

来年もまた来るのかと問ふ友にきっと来るぞと答ふるわれは

第四班

韓国学生と接して

九州大　田中　康裕

戦ひたる国より来たる学生のひかるひとみはきびしさありけり

言の葉のちがひをこえて伝はり来国を思へる強き心の

国士館大　秦　孝男

外輪の内に広がる阿蘇谷の緑の色の美しきかな

阿蘇で修学旅行を思ひ出して

神戸大　井上　雅円

絶えまなく煙はき出す大阿蘇の姿かはらず今も昔も

鹿児島経済大　横手　満男

中岳の火口の上に登りつけば涼しき風に心なごみぬ

二松学舎大　松岡　健二

ふるさとはいづこならむと中岳の頂きに立ち思ひをはせたり

大谷技術短大　桜井　正

大阿蘇に日本をになふ若人があまた集ひて学び語りぬ

大分大　花木英明

語らひの疲れもいつしかいえにけり草原わたる涼しき風に

長崎大　生原和芳

石とばし大地ひびかす大阿蘇の山より太き心もちたし

鹿児島大　図師博隆

力なきわれをも御霊は目守るらむ己のかぎりを尽すのみなり

天皇の御製拝誦を聞きて

早稲田大　広瀬清治

大君のみ民の上にかけらるゝ深き心を始めて知りぬ

大君の深き心を知りぬればわが国民のありがたきかな

大君の深き心を知らずして空論交せる人もあるらむ

国民よ今こそ聞けや大君のうけつぎませる深きこころを

友どちと阿蘇合宿に集ひきて君の御心知りてうれしき

朗々と読み上げらるゝ大御歌の調べぞ我の胸に迫り来

御心のありがたしとふ友どちの強き言葉に我もうなづく

井上君の和歌に答へて

鹿児島大　永石隆洋

人の意は言葉にてこそ通ふなれ言葉に人のまことこもれば

第五班

長崎大　吉村三郎

大空に煙たちのぼる中岳の雄々しき姿を胸にやきつく

岡山大　藤井安芳

阿蘇の野をともにあゆみつゝ今日こそは胸のおもひをすべて語らむ

早稲田大　稲毛修一

天と地の光の中に立ちてありわが命をば尊しと思ふ

下関市立大　中野国雄

阿蘇の山を一歩一歩とふみしめて登れば大地の魂を感じぬ

拓殖大　野呂隆明

マルクスの唯物論もこれからの世界にあはず姿消すとふ

京都大　山崎博和

足びきの阿蘇の山々光受け天地をささへそびえ立つ見ゆ

福岡大　渡辺高明

雄大な阿蘇の姿を仰ぎみて若人の意気高くあがりぬ

九州大　古川修

生命あるかぎり戦ひて日の本の国のいのちを共に護らむ

御霊祭り祖先のいのちにつながりて生きゆくことのうれしかりけり

亜細亜大　斎藤得三

阿蘇の野に集ひ語れる友達と名残り惜しくも今別れゆく

班別のコンパにて

亜細亜大　鈴木雅教

阿蘇にして最後の夜と思へばかおのづと高まる友の歌声

明星大　山本和男

日の本を守りたまひしみたまらを今宵まつらむこころ新たに

第六班

九州大　志賀建一郎

心開き思ひのほどを述べたしと思へどつたなし我の言葉は

白煙の登り立ちゆくふかみよりほゆるが如き大地のうなりす

富山大　浜岸悦生

音もなく大地の底よりふき上ぐる白き煙は不気味なるかな

鹿児島大　松崎　茂

友を得て語らふうちに我が思ひ湧き上がるかな火の山のごとく

防衛大　工藤敏生

煙湧く阿蘇山に立ち大観峰をかすかに望めば心ときめく

広島商科大　中西弘幸

高々と吐き出す煙も勇ましくさながら天をささふるごとし

神戸大　安藤幹雄

霧こむる草千里ケ浜青草の上かけりたし馬にまたがり

京都大　梅田敏文

ゆらゆらとしっぽふり行く親牛の後を小股に子牛追ひゆく

緑なす斜面に集ふ子馬等の唯一心に草を食みつつ

加藤先生のお話しを聞いて

亜細亜大　吉住信一郎

先生の熱意に満ちたお言葉に裸のつきあひはこれぞと思ひぬ

宮崎大　吉満英男

やまなみにこだまする歌よ肩くみて友の心は一つになりし

九州大　遠藤政幸

今仰ぐこのかぎりなき空のごと我の心はすみわたりけり

鹿児島大　徳地正治

この一夜あくれば友はちりぢりに去りゆくと思へば話つきせず

第七班

韓国の訪日学生団の友に韓国の国家目的について問ふ

京都大　井上慎一

我国の目ざすゆくてはこゝにありときつと答ふるその目のするどさ

我ら又み国のゆくへを真剣に憂ひてゆかむと切に思ひし

鹿児島経済大　東広義

白煙の目にしむ阿蘇の頂をはじめて見たり疲れはげまし

早稲田大　古賀勝次郎

原水駅にて

合宿へ急ぐ汽車旅原水の昼顔の花我を喜ばしむ

東京大　西村隆夫

太古より白煙上ぐる大阿蘇に偉大なる自然の生命を感じぬ

事情あつて子供をよそに預けている叔父の家を訪ねた時

富山大　山田滋

子を思ふ悲しさ語る親心胸にせまりて言葉つまりぬ

明星大　川瀬五十夫

大阿蘇に白き列なし登りゆく友らさながら蟻のごとしも

明治大　高木茂平

牛馬の草食む姿ながむれば吾走りたし草千里ケ浜

防衛大　大隈末雄

煙わく力強さに我が胸の思ひも高まる阿蘇の山べに

九州大　上山信一郎

はてしなくひろがりつゞく草原をわがもの顔に牛は歩めり

九州大　松永栄治

ともどもに励ます友のあまたあれば楽しかりけり阿蘇の合宿

第八班

合宿の前に

一橋大　北川文雄

全国より集まり来たる友どちと語りあかさむ心ゆくまで

亜細亜大　小笹清志

高原に寝そべる牛の草を食むのどかなる姿幸せなるかな

玉川大　大塚卿之

いくとせのあめかぜうけつゝいかばかり変りきぬらん阿蘇の岩肌

班別討論の後に

鹿児島工業短大　林　広美

ひぢつきて語らふ友のまなざしのかがやき強くわが胸をうつ

長崎大　松岡　淳

とりめぐる緑が中に中岳の固き岩根ゆ煙湧く見ゆ

初めての班別討論において

慶応大　小山浩夫

語らひも何やらかたく思はるる合宿の室の集ひの中に

上智大　津下有道

去年の夏一人で登りしふるさとの懐しき山に友らと登れり

九州大　福岡和文

大阿蘇にみ友らあまた集へるを遠き故郷の父に伝へたり

中央大　樋泉克夫

大阿蘇を守る外輪山のごと吾も日本を守らむと思ふ

九州大　蒲牟田高雄

もろもろの師友の言の葉胸に秘め新しき歩み今ぞ始めむ

第九班

昨年の友に会ひて

関西大　柴田義治

一年を過して会ひし同輩（ともがら）の元気な顔に胸はなごみぬ

西南学院大　小野吉宣

去りがたき心にながむる広き野にのどけき馬の悠然と立つ

京都大　林　利行

山ひとつ越え行き見ればはるかなる阿蘇山より煙のぼりつ

鹿児島大　北島照明

草原をさっと吹きすぐる風のまゝに流るる霧をしばし眺むる

富山大　藤田哲次

赤黒き火口の壁にもうもうとのぼる白煙の雄大なるかな

明星大　平井隆洋

むれあそぶ馬の背中に小雨降る草千里ケ浜にぬれてたゝずむ

鹿児島大　山本　徹

底知れぬ力を秘めてけぶりふく阿蘇のみ山は我が前にあり

亜細亜大　野地純一

草千里みどり広がる阿蘇の野にハイカー遊びて馬はしりさる

学習院大　角　俊暲

煙立つ阿蘇の火口を見下ろせば自然のわざに血潮わきたつ

九州大　平山正憲

先生の心根しのびくりかへしくりかへし聞くそのみ言葉を

岡山大　保住晄夫

大阿蘇の燃ゆる思ひを胸に持ち生きゆけますらを父祖につゞきて

第十班

亜細亜大　有馬幸一

しずみゆく夕日ながめつゝたたずめば遠くに

蟬のなく声聞こゆ

長崎大　佐藤　健治

火口より仰げば今しわきおこる阿蘇の煙に天もくもれる

防衛大　宮本　健治

緑なす外輪山に囲まれて山はだ赤き阿蘇の中岳

鹿児島大　徳田　浩士

あをあをと緑したたる大阿蘇のすすき野原を風走るなり

九州大　千田　博

火口よりどっと吹きだす白煙の夕暮の空に高くのぼれり

福岡大　川浪　登美夫

地の底のごうごうと鳴る音きけば我が足もとはくづるるかと思ふ

鹿児島経済大　相徳　和義

もうもうとふきあぐる煙を車中よりながめし友らの瞳輝く

阿蘇山頂で旧友に偶然再会して

鹿児島大　高木　道弘

三年前ともに来たりしこの地にてふと会ふ友よなつかしきかな

中央大　徳永　耕一

いにしへのすめらみことの御言葉は閉せる我の胸を開きぬ

慶応大　小山　紹夫

ひぐらしの声のさびしく聞えきて阿蘇の山々暮れゆかむとす

第十一班

日本大　野口　秀夫

大阿蘇に集ひし若き友どちの力合はせてともに行くべし

中央大　杉盛　全

来るたびに阿蘇の火口のその奥にこもれる力を尊しと思ふ

明治大　豊島　典雄

うすぎりに頂かくれしつとりと露にぬれたる阿蘇の山なみ

玉川大　細田　邦泰

あの阿蘇のみ山のごとく我心広くあらねばと強く感じぬ

皇学館大　山脇　敏夫

せまりくる蒼き峰々阿蘇の山ましろき煙今日もふきをり

九州大　阿部　清人

岩の間に顔をのぞかす火口より湧きたつ雲のみ空蔽へり

夜久先生の御講義を聞きつつ

九州大　小柳　左門

声つまりまぶたをとぢてかなしみをこらへむとされしみ姿尊し

民の上に思ひはせたまふ天皇のかしこき御歌をありがたく聞く

長内先生を囲んでの最後の夜の集ひにて

長崎大　白石　肇

高らかに詩を吟じらる師の御声部屋いっぱいに響きわたりぬ

をとなしき友も大声はりあげておのが校歌を歌ひゆくかな

鹿児島工業短大　稲留　信男

ひざまじへ語りし友のその姿むねにきざみて帰らむ我は

早稲田大　戸辺　武

大阿蘇の研修はいま終れども吾忘るまじよき師よき友

鹿児島経済大　石野　良孝

友どちと心うちあけ語りつゝこれからやるぞと心定めぬ

第十二班

長崎大　花島　有三

岩はだをのぼりて火口にたたずめば白煙の流れわれをつつめり

鹿児島大　金　津　洋　雄

しづかなる万緑の野に一人立ちふるさとの人思ひ出すも

鹿児島大　松　木　昭

胸の内確かめるごとく語りゆく友の言の葉心に残れり

○

あざやかに胸に残れりおおらかな友の心になごみしおもひは

師の君より教はりし道ひたむきに心かたむけ生きていくべし

阿蘇研修の最終日によせて

国士館大　宮　下　藤　雄

別れてもいかで忘るべきみ友らを明日の日本のゆくて思へば

富山大　井　原　稔

厳しくも己が心をみつむれば醜きすがたに絶望おぼゆ

醜くもなほひたすらに道求めし古人の姿に心打たれぬ

真剣に我が身を案じ再会を求むる友の言葉をききて

修猷館高校卒　大田黒　裕

次の夏大学生となつて来よとはげます友に胸ふさがりぬ

慰霊祭にて

九州大　稲　津　利比古

ほの暗き祭壇にむかひ祖先らのみ霊なぐさむ今宵尊し

ひもろぎにみ霊降られしと思ひつつ声高らかな朗詠を聞く

「海征かば」を皆と歌へば胸内の思ひ高まり涙出で来ぬ

大分大　中　原　義　人

ゆく道の遠くひとすぢつらなればまごころこめて生きむとぞ思ふ

祖国防護の決意を述ぶる友の言葉をききて

京都大　筒　井　清　忠

力なき我にはあれど友どちとすめらみくにを共に護らむ

九州大　田　口　輝　彦

かたらひに心のひらくるおもひして今さはやかに家路につかむ

全体意見発表を聞きて

東北大　河　合　忠　雄

切々と己が心を語りゆく友らの意気に心ふるひ立つ

第十三班

亜細亜大　吉　田　悦　郎

のんびりと阿蘇の山べに草をはむ牛馬の群のうらやましきかな

大学教官有志協議会の諸先生のあいさつを聞きて

東京工業大　大　岡　弘

体験よりにじみいでたるみ言葉の奥にひそむる苦しさはいかに

鹿児島経済大　松　永　浩

心うつ師のみ教へを胸に刻み早く帰りて友にかたらむ

岡山大　伊　藤　三樹夫

はるかなる阿蘇のすそ野を友どちの声も高らかにバスはゆくなり

むくむくと湧き上りくる噴煙に大地のいぶきの力を感じぬ

地の底にこもる力のあふれ出て永遠に燃ゆるか阿蘇の火の山

早稲田大　阿　部　孝　郎

岩を踏む足のいたみに級友と登りし頃を遠くしのびぬ

玉川大　河　村　文　夫

大阿蘇をとりまく外輪の山なみのひめし力を

我に与へよ

宮崎大　黒木和徳

大阿蘇をはじめてふみしよろこびをいかに伝へむわが友達に

富山大　望月保宏

大阿蘇の自然の中でこの五日友と一緒に語らひにけり

合宿をふりかへりて

拓殖大　高浜史朗

師のみ教へを学舎にかへり仲間らに心ひきしめて語らむと思ふ

またくると心にきめて友どちとわかれををしむ今日のわれなり

第十四班

岸本兄のオリエンテーションの折に

富山大　中田一義

切実に我身を忘れて語りゆく友の言葉に涙流るる

長崎大　安東巌

三日前は互いに知らぬ友どちが肩くみあひて写真とりあふ

献詠の代りに「海ゆかば」を歌ふ時にあたりて

歌ひつつ涙こぼれぬ国の為命を捨てし英霊思へば

イスラエルへ立ちし先輩を想ひて

亜細亜大　間庭憲一

最後の晩共に過せし床の中にユダヤ人民の精神を語る

鹿児島経済大　三園敏則

底知れぬ谷より湧きくる白けむり岩に立ちをる我をつつめり

下関市立大　梅谷道明

同胞の散りにしいのち偲びなむわが生きてあるはみをやのためぞ

明星大　田中祐二

放牧の牛馬たはむれひろがれる緑果てなし草千里原

九州大　水永正憲

ひろびろと開けゆく阿蘇のカルデラに我が来し道は細くつづけり

合宿の途次出家せし友と会ひて

鹿児島大　福寿一男

酒飲みて歌ひ踊るを好みしが出家の決意なみなみならじ

合宿に初参加して

鹿児島大　中西和夫

めがねごしに笑みたまふ師にむかへられ来て良かりしと顔ほころびぬ

山口大　吉田正樹

阿蘇のやどに見知らぬ友と語りあふ期待に胸もはずむおもひす

第十五班

九州大　小山達生

大阿蘇の山をながめて我が友と語る一時の嬉しかりけり

韓国の学生と話して

東京大　田代民治

未熟なる我の英語を苦にもせずほほゑみながら聞く君やさし

熊本大　永井幸男

白煙のみ空にのぼる大阿蘇のたぐひなきながめを頼もしと見ぬ

二日目の夜

九州大　猿渡良平

とつとつと己が思ひを語りたるこの友がきの心忘れじ

熊本商科大　境隆晴

夜更けまであかりを消して語りあふ友等の声に若さあふれたり

中央大　野口明宏

大阿蘇の火口に向ひ立ちたれば思はず我が身のひきしまるなり

オリエンテーションにて

富山大　岸本　弘

全国ゆ集ひし友に我が思ひをいかに伝へむと心さはぎぬ

我が声の高まりゆくを覚えつゝただひたすらに語り尽くせり

明治大　繁永正博

緑なす瀬の本高原の静かなる夕暮の中を友と歩きけり

レクリエーションの時に

防衛大　太田文雄

真剣に歌ふ異国の友人の澄みしまなこを心にとどめぬ

国境を越えし心のふれ合ひに我を忘れて拍手するなり

講義が終り床の中で

亜細亜大　才川　晋

今一度師の御講義のみ言葉をかみしめてをれば胸迫り来ぬ

ひしひしと迫り来る師のみ言葉にいかに生きむかと心迷ひぬ

慰霊祭にて

明星大　新野貴司

国おもひ生命ささげしもろもろのみをやのみたまにこうべを垂れぬ

第十六班

自己紹介にて

九州大　小松大輔

はじめての友にわが名をつぐるとき身のひきしまるおもひしにけり

長崎大　日下部　隆

友達はまごころつくし語りをり合はせしみ手に力をこめて

福岡教育大　北山　孝

のんびりと大草原に草をはむ牛の親子のつつましきかな

亜細亜大　大場一知

朝風に清くたなびく日の御旗あふぎみて血潮のわくをおぼえぬ

望郷

九州大　内海英祐

大阿蘇の外輪山の空遠く青く霞めり筑紫の国は

鹿児島経済大　有馬健二

大阿蘇に浮世のよごれをしらぬげに草はむ馬よ何を思へる

早稲田大　斎藤　実

友どちよ心のたけを述べつくしこの合宿を終りたまへよ

鹿児島大　水垂照明

さまざまの人の意見を聞きながら我が身のせまさ身にしみ思ふ

慰霊祭にて

玉川大　田中五造

手を合はせ御霊安かれと祈りをる祖国を思ふ友らの姿

中央大　小山吉継

夜ふけまで語りし友のその姿また見むと思ふ心つのりく

鹿児島工業短大　樋口義一

しんしんと夜更くるまで真剣に語り明かしぬ同じ班の友

第十七班

国士舘大　荒塚国男

大阿蘇の冷風あびて思ふなり身をも心をも清められしと

日本大　大学院　高岡敏夫

あせながし登りてみれば噴火口は行く手の苦難語れるごとし

中央大　長尾光雄

雄大な阿蘇の広野に身を置きてわが心いま何をまどふや

熊本大　高瀬邦一

高原にひぐらしの声のひろがりて冷気の中に阿蘇もくれゆく

富山大　吉沢清次

山々の落ちつきをりし姿見れば力なき我に焦り覚えつ

鹿児島大　中俣勝義

課せられし歌を詠まむとわれ一人細き草路をふみしめて行く

鹿児島大　黒木清亜

折々に吹き来る風の冷たさにしばしたたずみ四方をながめつ

九州大　片岡健

各地より集ひ来りし友どちと語り合ふのも四度となりぬ

おのがじし思ひをこめてうつたふる友らの心にいかにそふべき

おのおのが思ひをこめて語れどもなぜか心の通はざりけり

語り合ひ語り合ひしてわづかにも友らの心にふるるうれしさ

第十八班

順天堂大　田中誠一

師と共にかたりつつ阿蘇の岩道をのぼればつらさも忘れくるかな

鹿児島大　田淵勝次

岩道を汗をふきつつ頂上につけばここちよき涼風の吹く

九州大　春藤純生

切々と思ひを述べし君が身のまこと心を我は忘れじ

亜細亜大　鳥海利明

人の世は常ならずとは知りつゝも我が許去り行く友は悲しき

早稲田大　柳井鉱一

火をふきし太古のさまもしのばるゝ阿蘇のけむりの白きを見れば

鹿児島経済大　本村健三

漠としたわが青春に大阿蘇の大いなる心ひしと迫りく

鹿児島大　岩屋秀男

民族の清き流れをあるがままに子らに教ふるを天職とせむ

熊本大　堀切勝之

御講義の一言一言身にしみて師の御熱意に疲れを忘る

日本大　大学院　内藤勝

さびしさは一人耐へよと都べの人を思ひし蟬の声聞く

国学院大　大学院　中地丈夫

はるばると友を求めて大阿蘇につどひしわれらこころかよひぬ

第十九班（女子班）

鹿児島大　厚地順子

皆の声に和せんとすれど声ふるへしみじみときく君が代の歌

身にしみる一語一語に師を仰ぎしつかりせねばと心に誓ふ

オリエンテーションを聞きて

玉川大　今滝須美子

真剣にわが人生を生きよとの友のことばに胸ふるへたり

岡山大　孝忠加津子

親馬のあとに従ひ尾をふりつゝ小馬歩みぬ阿蘇の山べを

共立女子短大　山田苑枝

草原にすはりし子牛に親牛のそひたる姿ほほえましきかな

日本経済短大　沓沢千津子

無気味なる白き煙はく火口壁にすひこまるる如く足のすくみぬ

合宿準備

学習院大　小田村静代

受け付けのあたりにをれば不安げにはせ集ひ

来る友らさはなり
二年前はじめて合宿に加はりし我もかくありしかと思ひ出うかびぬ

班にて

何故か心閉して打ちとけ得ぬ友と語りぬ夜の更くるまで
とつとつと思ひを述ぶるその友の目は輝き来夜の更け行けば
心こめ語りてゆけばかたくなと見えにし友も素直なりけり

慰霊祭にて

実践女子大　青　砥　道　子

ますらをの御魂むかへし祭壇にいにしへびとの姿偲びぬ

阿蘇合宿を終へて

鹿児島大　高　山　由姫子

日の本の心まなべとふみをしへを胸にきざみてこの地を去らむ

第二十班（女子班）

玉川大　金　井　ゆみ子

大阿蘇のすそ野に群なす牛馬のいこふ姿はのどかなりけり

三重高校勤務　幡　掛　和　子

たはむるる馬の親子をながめつつ千里ケ浜にしばしすごしぬ

鹿児島大　内　倉　良　子

山の気の冷たき中にたたずめばしばしも惜しきこの夕べかな

早稲田大　河　原　倫　子

乳を呑む子馬見つむる母馬のまなざしやさしく慈愛に満てり

慰霊祭に臨んで

鹿児島大　上熊須　とし子

朗々とよまれしみ歌にひしひしとみおやのみたまをしのびまつりぬ
時忘れ夜も更くるまで友どちと冴えしまなこに語りあかしき

小田村先生の御講義を承りて

岡山大　三　宅　教　子

活字にてひそかに知りし師の君のみ声聞きつつ心ときめく

合宿を終へて

ひともとの草の命がこよなくも貴しと知る今日の歓び

山田先生の御講義を聞きて

山脇学園短大　宮　崎　恵美子

胸にひゞく真心こもる歌よみていにしへびとの心偲ばる

全体意見発表を聞きて

共立女子短大　寺　田　和　子

壇上に胸張り立てるとも声胸にとどめむ後の日までも

第二十一班（女子班）

法政大　白　鳥　佐千子

たどりつきやさしき友の姿見ればわが緊張もほぐれゆくなり

鹿児島大　武　島　延　子

大空にわき立つ雲のむく〳〵とひろがりゆけり夏陽に映えて

玉川大　小　藤　洋　子

友だちの直きことばにふれたしと心はずみて合宿に来ぬ

東京女子大　梅　田　咲　子

息荒くやうやく着きし山頂に立てば山風耳もとに鳴る
灰色の雲の下りきて草原の彼方の馬のかげうすれゆく
一心に我をみつめて語りかくる友の瞳は輝きてをり

全体意見発表を聞きて

西南学院大　古　川　慶　子

友どちの心の奥よりわき出づる尊き言葉に胸のつまりぬ

夜久先生の御講義を聞きて

九州大　浜田博子

天皇を思はるる師はみ心のあふるるまゝに御声つまりぬ

共立女子短大　島田寿子

国のため尊き生命すてし人よ歴史の中に永遠(とは)に生きませ

幼きとき父につれられ慰霊祭に行きしその日をなつかしと思ふ

鹿児島経営者協会　森永貴子

合宿にすばらしき友を我は得つこの友情を続けたしと願ふ

第二十二班（社会人班）

熊本市立春竹小学校　西川康徳

熔岩の赤き岩肌踏みしめて登れば涼し阿蘇の山風

高千穂相互銀行　松田夏哉

夏草の茂れる阿蘇の草原を生ける証(あかし)と踏みしめてゆく

奥田先生のお話を聞きて

宮崎トヨタ自動車　蔵満寅夫

原爆に妻子たふれしかなしみを語りたまひしことば忘れじ

熊本県植木町立山本小学校　松永公保

目にしみる白地に赤き日の丸はみくにのいのち護れと教ふ

福岡県立八幡西高校　村田英雄

感激に目をかがやかし語り合ふ若人達の頼もしきかな

知らざりし同室の人も何時のまにか別れ難き友となりぬる

八代市立第一中学校　林田忠義

国思ふこれのつどひに来る年は我が子を出さむと切に思ひき

山田先生の和歌の講義をききて

熊本市立京陵中学校　田辺隆秀

古の人の心に触れなむと心をこめて和歌の道を学ぶ

熊本市立城南中学校　夏野憲章

雲かぶる五岳のすそを眺めつゝわが行く道を静かに思ひき

班員の方々と話しつゝ

福岡県立香椎高校　田中利一

はげましつはげまされつゝおのがじし進みゆかましまこと求めて

夜久先生のご講義をききて

師の君の心のさけびいたきほど胸にせまりて泣かまく思ほゆ

八幡・入江興産株式会社　宮崎肇

阿蘇の野に学び鍛へし若き身は明日を夢みてさらにはげまむ

熊本県山鹿市大道中学校　中満重明

カルデラの夜空を裂きて雷雨来ぬ討論の声の激するときに

さはやかに朝明けは来ぬすさまじき阿蘇の雷雨のしづまりしのち

第二十三班（社会人班）

京都・飲食業　中川英男

世に生まれ暗きおもひに生くるとき父の情をありがたく思ふ

休けいの時若き学生たちと情熱をこめて話し給へる師の様を見て

熊本市立江南中学校　広瀬和夫

ひとことも聞きのがさじと見つめゐる姿うつくし師をかこむ友

合宿最初の夜に

熊本市立湖東中学校　加賀山興隆

父もまた学びに行くかと手を振りて送りし吾子はすでにゐねたるか

○

日の丸は美しきものか大阿蘇の山膚を背に今朝もはためく

遺歌をよみて

八代市福祉事務所　西　山　敬　直

大君に生命ささげしはらからの御魂に祈りぬあふるるおもひに

熊本市立大江小学校　高　山　良　策

若人と共につどひし招魂の式に頭をふかくたれたり

人吉市立大塚小学校　西　山　喜　雄

真剣に生きむと誓ふ若人のことばるほほにまことを覚ゆ

熊本市立桜山中学校　岡　徹　平

わかものの輝く眼にわれもまたあらたな力湧き出づるを覚ゆ

八幡・入江興産株式会社　岡　本　博　幸

大阿蘇の火口に立ちてながむればやまなみはるかかすみて見ゆる

熊本市立白川中学校　森　川　　力

今日よりは強く正しく生きなむと喜びいさむ友と別れぬ

沖縄沖で自爆せし友を偲びて

八代市立第二中学校　村　上　正　孝

集ひたる若人の声とゞけかしおほ海原にやすめる御魂に

第二十四班（社会人班）

慰霊祭に参列して

鹿児島経営者協会　池之上　卓

燈明はほのかにゆれてひもろぎに先人のみたま降ります夕べ

安らかに眠り給へやみ国守るといのちささげしかなしますらを

開会式にて

熊本市立城西小学校　海野尾　祐　全

日の本に生れし幸思ひ久々に声高くして君が代を歌ふ

熊本市立東野中学校　土　屋　正　照

夏雲のおほへる阿蘇の裾野にて生れし国の古きをたづねむ

熊本市立泉ケ丘小学校　川　嶋　政　喜

朝明けの宿舎の窓の真向ひに高く立つなり大阿蘇の煙

熊本県植木町立鹿南中学校　永　田　憲　二

重き軍靴曳きずりながら溶岩のあの急坂を行きし日のあり

北九州・吉川工業株式会社　高　橋　秀　隆

緑なす草千里浜のをちこちに群がる牛馬の姿のどけし

東京・荒木事務所　吉　田　道　雄

阿蘇谷に友らと語ればわが胸はいつしかはげしくたかぶりゆきぬ

八代市立大田郷中学校　西　田　　豊

連山の雄々しき姿に比べみて己が心のせまきを恥ぢぬ

林房雄先生の講義を聞きて

熊本市立城東小学校　貴　島　武　之

敗戦の苦難に耐へて二十年師のみ言葉は喜びに満つ

熊本市立託麻原小学校　北　原　　孝

静かなる夜もふけゆきてみ友らと語りつきせぬ阿蘇谷の夜

第二十五班（社会人班）

八幡・高田工業所　上　野　岩　男

各地より集ひきにける若人と言の葉かはしすぎぬ今宵も

八代市立八代小学校　本　田　逸　郎

友がきの熱意あふるる言の葉に日頃の不学をもどかしく思ふ

熊本市立江原中学校　藤　森　正　巳

くさまくらたびにつどひてともがきとまなびし朝の日の丸美し

熊本県五木村立二浦小学校　新　居　　健

カルデラの底に集へる若人の祖国を思ふ心にうたる

オリエンテーションを聞きて

熊本市立白山小学校　柳　沼　貞　雄

若人の燃ゆるが如き言の葉の力強さに心打たるる

熊本市立大江小学校　渡　辺　昭　平

民族の課題を語る同胞の瞳は燃えてわが胸をうつ

人吉市立人吉第一中学校　東　千　徳

夕立雲空のかたへにとどまりてむし暑きままに夜となりにけり

北九州・吉川工業株式会社　安　西　雄　志

遠くきてふりあふぐ阿蘇の山々はわが父母のごとくなつかし

八代市立八代第三中学校　水　本　正　和

日程を告ぐる係の声きびしゆるみし心にむちうつごとく

乱れたるこの世になほも一すぢの光かゝぐる人々のあり

全体意見発表を聞きて

熊本市立竜南中学校　石　村　俊　明

若人のまこと溢るる言の葉にわが魂はうちふるへけり

涙してとつとつのぶる若人のまことに打たれわれも涙す

熊本市立出水中学校　淵　上　久　孝

いにしへの人の心にふれんとてよみし古典の深さ身にしむ

第二十六班（社会人班）

熊本市立黒髪小学校　宮　田　末　吉

太古よりいまにつきせぬ大阿蘇の煙静かにたちのぼりたり

亡き戦友を偲びて

熊本市立京陵中学校　郡　保　雄

散りゆきし友思ひつつはたとせをなすすべしらず今日までは来ぬ

ひとたびはすてし生命をあらたにもささげむと誓ふ大阿蘇の峰に

菊池市立隈府小学校　富　永　昭二郎

いくたびも阿蘇に登りしことはあれど今日の思ひは永久（とは）に忘れじ

日本遺族会　板　垣　正

先人のつみ重ねし道脈々といま若人につがれんとする

新日本協議会　神　成　正　志

とこしへの平和求めて語り合ふ阿蘇の友らとの別れは悲し

熊本市立砂取小学校　山　本　昶　光

病める子の弱々しげにふりし手をいくたびか思ふ阿蘇のつどひに

今上陛下の御製を読みて

熊本県砥用東中学校　北　島　道　治

身にかへて止めたまひしといふ終戦の御製を読めば涙せき上ぐ

熊本市立尾上小学校　福　富　明　憲

道を説く師のみ教へをもらさじと聞き入る友の姿忘れじ

人吉市立人吉西小学校　氏　川　昭　二

朝明けの冷たき風に吹かれつつ静かに昇る日の本の旗

全体意見発表にのぞみて

熊本県植木町立五霊中学校　中　原　哲　哉

朴訥に語らふ若人のまなざしに道をきはめむ決意ぞみゆる

指揮班

早稲田大　今　林　賢　郁

幾重にも連なる阿蘇の山脈に小雨ふりきてほのにけむりし

写真班

班毎の写真をとりて

九州大　島　津　正　数

肩をくみ大きく笑ふ友どちの笑顔をみつゝシャッターを切る

見学参加者

順天堂大学助教授　鈴木満男

訪へば歓び顔にみなぎらせ出で来しわが師のこの夏は亡く

亜細亜大学学生部　三谷文雄

夜を徹し国を語れる友をみてあらたな力湧きくるを覚ゆ

亜細亜大学学生部　山本忠士

さわやかな朝の陽背にしあふぎみる日の本の旗たのもしきかな

東京・千代田株式会社　吉井八郎

かたりつつわかき心にふれるたびにわが浅学をかへりみるかな

東京学芸大附属高校教諭　秋元正明

具体的つきあひの意義を語りつぐ師のみ姿に心うたれつ

吾子合宿に参加す

宇部市　山田美智

草原を声高らかに語りゆく吾子の姿を見るぞうれしき

講師

林房雄

火の国の大阿蘇の野に友集ひ国の命を語り合ひけり

大学教官有志協議会

明星大学　奥田克巳

見の限り焼け石原のここにしも生えて枯れたる草ありにけり

いつの日かは世に役立たん大阿蘇の地底にうなるマグマの熱源

長崎大学　植木九州男

大阿蘇の山並ほのかに白みきて大いなる朝来らむとする

力なき我にはあれど今日もこそ励み学ばむ日の本の誠

国民文化研究会

合宿終る

国民文化研究会理事長　小田村寅二郎

大阿蘇のカルデラわたるそよ風は部屋ぬちまでもしみわたり来ぬ

いく日かも友ら集ひて講義ききしこの大広間はいま静かなり

集ひ来し友らおのおの文机に向ひて感想を記すひととき

合宿の運営委員とふ友どちもいく夜もゐねず心を合はせき

若き友すばらしき友よ運営のはげしきつとめ果たせし友らよ

つがの木のいやつぎつぎに伝へゆくこれのいとなみ絶ゆべくもあらじ

すめらぎの大きみ心仰ぎてむ心養ふ道もさだかに

白雲は山辺になびき真夏陽の光いや射す阿蘇の山々

慰霊祭

亜細亜大学教授　夜久正雄

ことそぎしまつりのにはのみともしの火かげゆらぎて神代のごとし

みおや神いまくだります海ゆかば水漬くかばねの楽の音とともに

みおや神くだりたまふとつゝしめばくしきひびきのいそそぐ心地す

つつしめる心ひとつに並び居て神をろがめば神いますなり

おほまへにのりとさゝげてわが友はわれらのちかひ神に告げまつる

神々はかへりたまふかなき師なき友もいますとおもへばなつかし

中岳に登る

八代市助役　加藤敏治

見あぐれば前ゆく友の姿遠く真日てる岩路ゆくにけわしき

山はだをつらなり登る人影のうちにまじりて
吾子も行くらむ
いたゞきはま近しと思ひ足早に登りくれども
なほも道あり
道一つかなたに見ゆる中岳の大き火口ゆ煙立
つなり
をやみなく立ちくる煙のぼりゆき果てはつら
なるみ空の雲に

山田先生の御講義の中に思いがけなく終戦の年鹿児島南方洋上で戦死せし兄の歌をききて

安田信託・渋谷支店長　松　吉　基　順

阿蘇の宿に兄の遺せしみ歌をば友らと聞きて
胸ぬちたかなる
靖国のみ社にはた歌まきにかゝげられたる忘
らえぬ歌
忘れじと同胞(はから)おもふみ言葉はわが胸ぬちゆ離
れえぬかも
亡き兄のみ霊よろこび聞きまさむみ歌よみあ
ぐる友のみ声を
うつそみは砕け散りしも兄のおもひ永久(とは)のい
のちとうけ継がれなむ

防人の歌の御講義を承りて

亜細亜大学学生部主事　関　正　臣

かなしみにたへつつゆきし防人の歌をし聞け
ば涙にじみ来
こみあぐる思ひあふれつつ防人の歌の数々く
りかへしよむ
名も知らぬ若人たちがまごころをうたひあげ
つつゆきしそのかみ
千年あまり経たりといへる防人の心さながら
継がむと思ふ

共同通信社論説委員　島　田　好　衛

待ちわびし阿蘇の集ひに吾子とわれ出で立つ
朝のすがしかりけり
よき友と手をたづさへて日の本のをみなの道
を進みゆくべし
人の世はきびしきゆえにいくたびもあらしに
耐えて生きよと祈る

下関・宝辺商店　宝　辺　正　久

小さきとき父につれられ雨をさけし阿蘇山神
社をなつかしみ拝す
溶岩の山道うちつれ登りゆくわれらが友に吹
く風涼し
岩壁の底の火口のあらはると見るまに隠れつ
湧きくるけむりに
のどをさすけむりしづかに吹き上げてもだせ
るごとき地の底を思ふ

八月九日奥田先生のお話を聞いて

三菱重工長崎造船所　小　県　一　也

赤きトマト一つはわれに残しきと語りたまへ
ば涙流れつ
はらからも同じ思ひにみまかりし日はめぐり
きぬ合宿の地に
常日頃忘れしこともうかびきてたまつりせ
む友らと共に

長崎中学校教諭　田　川　美代子

ともすればぐづるゝ足もとふみしめて登りゆ
くなり阿蘇の中岳
噴煙のたちのぼるかと見るまでにたちまちく
もる山の頂

電源開発伊予電力所　長　内　俊　平

駅おりて宿訪ふ道にひぐらしのかそけききけ
ば深山なるらし

阿蘇登山

友の語るこの地にちなむ神々の話ききつつゆ
く旅楽しも
外輪の山足蹴りてうまし国つくりし神の名建(たけ)
の磐立(いはたち)
おのづから先争ふらし若きらの一群はやも峯
近く行く

玉造温泉こんや旅館経営　青　砥　宏　一

谷こめてふきあがりくる噴煙に火口のあたり
見えわかぬかも

たけだけしき神のつくりし山なるかごつごつ
岩の天にそき立つ

武雄市・元教育長　毛　利　　潮

草千里酔ふたる如く馬を馳す学生のあり命たのしも

長崎県立長崎北高校教諭　本　城　良　子

幾度の噴火にたへてなほ今も阿蘇の山々たけくありけり

福岡県立若松高校教諭　山　田　輝　彦

石原を喘ぎ登れば焼け石のはざまに白し夏草の穂は
心知る友はよきかな火の山の石原をゆく笑みつ語りつ
火口壁のとがりし岩の頂きに人立てる見ゆ小指ばかりの
うす雲の靡きは白し山風にさからひてまふ蔦小さきかも
大地の底ひに燃ゆる奇しき火のとこしへにあれわれらが祖国

韓国の友らとバス車中にて語りあひて

滋賀大学助教授　吉　田　靖　彦

日本のくさぐ〳〵のことたづねきく異国の友のおもかゞやけり
萩にます松陰神社を訪ひしといふ異国の友のおものかがやき
韓国の若き友らの語りくるまみのかがやき忘れかねつる

五年前初めて合宿教室に参加した折登山した大観峯の見えてきて

三愛石油(株)社員　柴　田　悌　輔

目の下にはるけくひらく阿蘇の野に大観峯のかすみてみゆる
かすみゆく大観峰をのぞみつゝくさぐさの思ひ胸に湧きくる
彼の折の友らの顔のいくつかが昨日の如く思ひ出ださる

皇宮警察本部　亀　井　孝　之

いまもなほ活動つづく中岳の火口を見れば噴煙ふきあぐ
遠足の子らの命を奪ひたる爆発ありきと聞くもかなしき

遅れて合宿に参加せし汽車の中にて

熊本行政監察局　黒　木　林太郎

阿蘇駅を目指す夜汽車は遅きかな友ら集へる合宿思へば

合宿地近し

神奈川県立平沼高校教諭　福　田　忠　之

流れ落つる汗をふきつつ道行けば真白きのぼりはるかに見え来

鹿児島大学助教授　川　井　修　治

頂きにのぼりきたれば山高みすず風吹きて心地よきかな
火の国の大阿蘇が嶺はたえまなく白きけむりをふき上げてをり
おのがじしくみをつくりてたのしげに写真とりあふ若きらの群
我もまた仲間に入りて若きらと肩ならべつつ写真とるかも
ここだくの若人こぞりて奮ひ立たばいかなるわざか成らざらめやも
み国いまただならぬとき燃ゆる火の焔となりて奮はざらめや

岡山県立操山高校教諭　三　宅　将　之

中岳ゆおり来るバスの窓の外雲湧き煙る草千里が浜
おりたちし千里が浜に悠々と牛群がりて草はみゐたり

山田兄の御講義をききつつ

福岡県立修猷館高校教諭　小　柳　陽太郎

留魂といふことのはのひさぐ〳〵によみがへりきぬ君がことばに
うつし世におもひ残して去りゆきし友らのいまはしぬびまつるも
み友らのいまはのねがひをつぎゆかむ道求めつつ今日までは来ぬ

天がける友らもみませ二十年のおもいをこめしこれの集ひを

部屋に帰りて

高原は秋づきぬらし窓の外の細き虫の音澄みてきこゆる

（株）アジアビジョン・企画部　加　部　隆　三

阿蘇の野に若き友らが唄うたふ声高らかにきこえくるなり

林房雄先生に終戦の時の話を聞きて

福岡・筑紫女学園高校教諭　行　武　靖　枝

やせこけし帰還兵士を人々は言葉をかけていたはりにしと

暖かき人の心に支へられ荒れたる国土もかく賑はひぬ

数しらぬ人の心に保たれしこのうまし国うけつぎゆかむ

小泉明会計事務所計理士　小　泉　　明

合宿運営の事務にあたりて五年をこころはりつめ過ごし来りぬ

こののちはわれにかはりて若き友が合宿事務にいそしむといふ

それぞれのつとめはげみてもろともに心をつくすこの合宿は

慰霊祭場整地作業

岡山県立笠岡商業高校教諭　名越　二荒之助

生ひ繁る夏草刈れば玉なして汗は吹きいづ額（ぬか）にもろ手に

天がけるみ祖のみ霊喚ばはむと夏草払ふいとなみ尊し

仕事終へ友らと仰げば大阿蘇の中岳の峰ほのにけぶりし

み霊はや現はれそめしか雲黒くうづまきやまず雨ともなひて

日商（株）社員　沢　部　寿　孫

来む春に世にいづる友らと大阿蘇に集ひ学ぶがうれしかりけり

ひとときもとどまりをらぬ今の世に生きゆく道を語り合ひなむ

新技術開発事業団　野間口　行　正

大阿蘇のふもとに広ごる草原に馬の親子ののどかに草喰む

パネルデイスカッションにて

祖国をば背負ひたまひて話します御言葉のひびき胸に迫りく

林房雄先生の御歌を聞きて

長崎大学医学部専門課程　田　村　　潔

我々を友と詠み給ふ師の御歌ききてうれしく涙流れくる

夜久先生の御講義をききて

川鉄鋼板（株）社員　福　島　宏　之

大君のみ心しのび絶句さるる師のみ姿に涙あふれく

学生の感想発表をききて

山陽電軌宇部営業所長　加　藤　善　之

民思ふ天皇一人ましませば幸なりと若き友はいふ

思はずも涙あふれぬ若きらのまことのことば聞くがうれしく

合宿を終へて終戦記念日を迎ふ

熊本市役所経済部長　徳　永　正　巳

年を経て世はいかならむとも大君の深き御念ひ忘れざらめや

いたましき大御心を偲びつつ努めざらめや日の本の民

大君のみことかかふり出でましし友等のまことつがまし永遠に

夜久先生の御講義を聞きて

大分県国見町教育委員会主事　三重野　悌次郎

樫の実の一つ心に国民の共にあゆめるしきしまの道

国々に詩（た）はあらむをいかならむとつ国にかかる詩の道ある

大御歌ときあかしつゝ師の君の胸せまりけむ言葉とだえたり

慰霊祭の折りに

兵庫県立武庫高校教諭　寺　川　真知夫

窓ゆ入る風のさやぎもみなこれに降り来ますらむ霊の御業ぞ
降りませる御霊宿りてひもろぎの幣はかそかにさゆらぎてをり
師の君の奏上さるる祭文の調べ畏しこもる命に

夜久大兄の「今上陛下の御歌について」の御講義中、終戦の御歌のくだりになりて

福岡県立宇美商業高校教諭　小　林　国　男

終戦の大御歌しもをろがめば涙あふれぬ胸せまりきて
かしこきや大御身捨てたまふ御決意にこのみ戦をとどめたまひし
たふれゆく国民の上思召す大御心のなんぞかなしき
敗戦のこの世に生くるみ民われいそしまざらめやかなしみにたへ
大御歌をろがみまつりあふれいづる涙のごひてふるひたつべし

熊本県林業研究指導所　瀬　上　安　正

国民は我がことのみを思ふとき一人大君は民を思はす
若き等のかくそだち来てみ祖らのみ国つぎゆく姿尊し

山口銀行長崎支店　田　口　譲　二

新しき友らのおもわ忘れじと班別討論に加はりぬわれは
合宿はいくたびくれどあらたなる人のまことを学ぶ心地す

夜久大兄の御講義をききて

岸和田市立大芝小教諭　岡　村　義　一

身をかへりみず戦とめしてふ大御歌をろがみ読めば胸内あふれぬ
この事実長き歴史に留めむと叫びて立てり涙おさへて
語る友聞く友ともに胸せまりしばし声なく襟を正せり

車中にて

国民文化研究会　山　内　健　生

母親の胸に抱かれて眠る子の無垢な寝顔をしばし見つむる
すやすやと無心に眠る幼子の閉ぢたる瞼の母親に似て

慰霊祭にて

旭興業(株)社員　中　川　裕　司

おごそかに闇にひろがる師の御声国護り征きし御霊安かれ
我もまた心つつしみきびしくも日々のつとめにはげまむと誓ふ

事務局

ソ連収容所で別れて二十年・博多駅ホームにてA君と奇遇

最高裁判所秘書課　西　川　伍　朔

主義に殉ずと袂分ちし君なりきいま我が前に立てる駅売り
「このほうが考えなくていいですよ」と握りしめたる売上げを示す
「ひまわり」の自動ドアーの音荒し尽きせぬ思ひ遮ぎるがごと
挙げし手に眼の汗を拭ひつつ「弁当」を連呼しひた走る君

熊本女子大三年　加　藤　恭　子

噴きあぐる阿蘇の火山の火のごとく強き力をわれも持ちたし
幾たびも訪れ来たりし阿蘇なれど眺むるたびに心あらたまる

筑紫女学園高校二年　小　柳　怜　子

合宿地に着きて久々に会ふ人に拶挨かはしなつかしく思ふ
限りなく続く緑の草千里茶色の牛のてくてく歩く

あとがき

今回の編集は、国民文化研究会の若い世代――通称「若いグループ」と呼ばれている仲間が担当いたしました。私たちは、大学を卒業して三―五年を社会で送っている者ばかりであり、会社の仕事にもいまだ五里霧中で取り組んでいる状態です。夕方、会社の仕事を終えると、在京者たちが国文研事務所に集まり、皆さんの感想文の編集に従事しました。九月上旬からのことでした。

合宿日程の最後のあわただしい雰囲気の中で、熟慮する時間もなく、一枚のワラバン紙に想い付くままに書きつけていただいた感想文、その張りつめた情意の昂まりは、いつになく編集する私たちの心にも、生き生きと伝わってきて、そのつど感激を新たにさせられました。

執筆者の大部分の方々は、これがまさか活字になろうとは想いも及ばなかったことと思いますが、またそれだけに無雑作な筆記が私たちの心を打つのだと思います。一文一文は、それは短かい文章なのですが、四泊五日の悩みと苦しみの苦闘がそこに凝結していました。織りなす葛藤を踏み越えてひとつの高い心の統一を目指しての精神の息吹きが、私たちに堪えがたいほど滲透してきます。

この感動を、このままもっと沢山の人々に伝えたい。それには全文掲載すればよいのですが、それでは膨大な紙数になってしまう。そこで、筆者のもっとも言いたいと想われる個所を汲みとり、その他は割愛することで許していただこうということになりました。だが、筆者の言いたいところがどこであるかは、編者のあいだでも、人によって違ってきます。そのため、私たちは、一枚の感想文に幾度も代わるがわる目を通し、選択の断定には、その都度話し合って最善をつくしあいました。また誤字の訂正と多少の文意不明瞭な個所は添削いたしました。

この小冊子が上梓されるにあたっては、お忙しいなかを葉山での編集合宿地までおいでくださり、原稿の添削、校正その他全般にわたって並々ならぬ御協力を惜しまれなかった小田村寅二郎、島田好衛両先生に深くお礼申しあげます。

また九州の山田輝彦、小柳陽太郎両先生には、和歌の選択を――一人一首はかならず載せるという方針で――全てお委かせして了ってありがとうございました。同時に、編集と校正に協力してくださった国文研の上村和男・坂東一男・福島宏之・福田忠之・中川裕司・山本博資・石井恭子・岡部篤厚・山内健生・今林賢郁の諸氏に心から謝意を表します。

どうか心しておよみくだされば、これに越した喜びはございません。

（資料）
第十二回合宿教室（阿蘇）感想文集
非売品
昭和四十二年十一月五日発行
編集兼発行者
東京都中央区銀座七の三柳瀬ビル
電話（五七二）一五二六―七番
社団法人　国民文化研究会
理事長　小田村寅二郎
編集委員　国武忠彦・沢部寿孫・野間口行正
亀井孝之・柴田悌輔・磯貝保博